910.26
T93
910.26-1937
1200500754447

26. 9. 28

910.26
I·93

27/25
古

岩城準太郎著

治文學史

大阪 修文館發兌

明治文學史

國立圖書館
昭 23. 8. 23 和
購 入

當世書生氣質

坪内逍遙の小説にして、明治十八年六月稿一編を發行し、翌年一月巻十七冊發行完結。晩青堂の發行。中装。

版型菊百七十一枚。後今洋綴となる。巻のやなぎ

數巻と巻す。

小説神髄

坪内逍遙の小説論にして、明治十九年五月松月堂發行、

中装版型菊上下二冊九十四枚。巻に文學士坪内雄藏著

と巻す。初め十八年三月東京稗史出版社より上巻を發

行したれど、下巻を出すに及ばずして中絶す。

浮雲

二葉亭四迷の小説にて、第一編は明治二十年六月金港

堂發行、四六版百六十五頁、假綴、表紙には坪内雄藏

と巻し、扉には巻のやを主人二葉亭四迷全著と巻す。

第二編は二十一年二月發行、第三編は二十一年七月と

り雄藏の花に出る。明行子となりす。

解題

本書は本行本として出版された最初の単行本である。

明治二十二年一月二日から翌年二月十七日まで、『読売新聞』に連載された長篇小説。全三篇。第一篇は二十二回、第二篇は三十一回、第三篇は二十二回の連載。

『書生氣質』は、『小説神髓』の理論を実践した最初の作品であり、『浮雲』の前に位置する。

『書生氣質』は、四六判百六十六頁、総ルビ、表紙、裏表紙、口絵、扉、目次、本文二葉、奥付四葉合計二八葉の小説である。

発行所は内田魯庵、発行者は内田貞次郎、印刷者は内田魯庵、発行年月日は明治二十年六月十七日である。

定価は一部金五拾銭である。

小説神髓

『小説神髓』は、『当世書生氣質』の理論編である。

『小説神髓』は、明治十八年九月から翌年四月まで、『早稲田文学』に連載された。

『小説神髓』は、『当世書生氣質』の理論編であり、『浮雲』の前に位置する

色懺悔　ハルビン人

花柳界の小說にして、紫葉言舘の作一編をしるす。

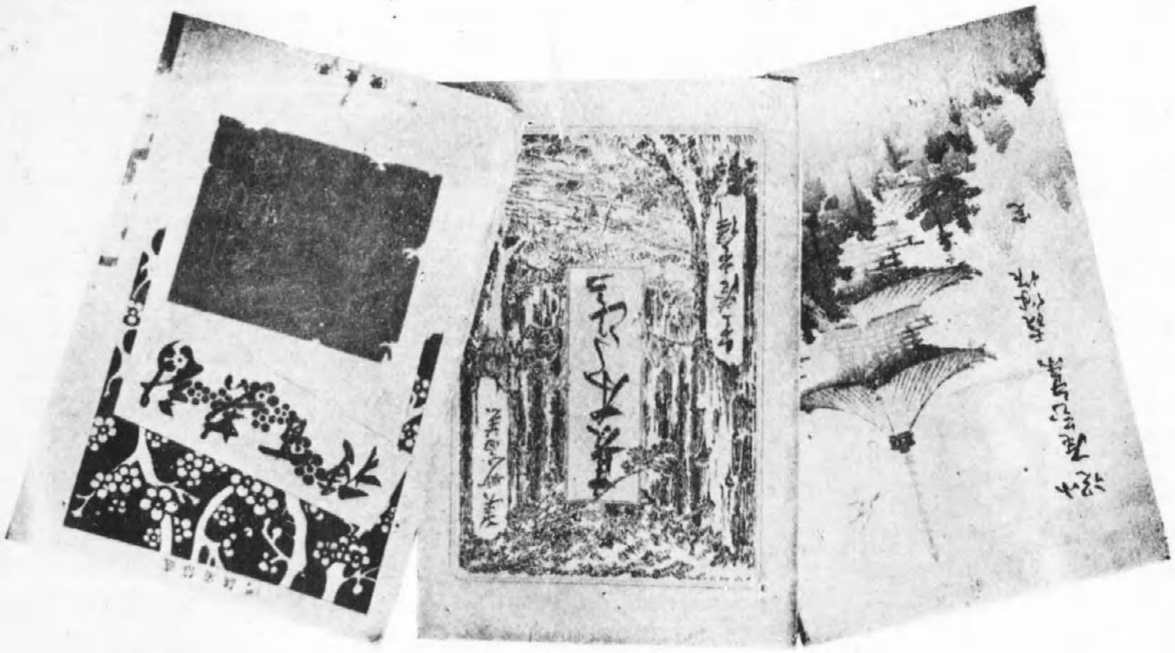
紫葉言舘は明治二十七年四月青木堂書店發行の小說集にして、四六版約百頁、價錢、貳拾錢。寺田寅彦氏の眞珠湾もその終末頃に出づ。

夏木立　山田美妙著

明治二十一年八月金港堂發行、四六版百三十四頁價錢の冊子。

尾花集　寺田寅彦の小說玉章塔に血紅屋を添へるもの、明治二十五年十月青木堂書店發行、四六版百九十三頁價錢。

玉章塔は同一月より新聞國會に連載せるものなり。



集芝居

沿革、のちやうい源を青紅に構成正統小の伴鶴田巻。

幾頁三十六百版六四、行發堂山蒲木書月十年五十二。

。ぢなのもるを雛型に會國關幕ぢた月一同は巻重五

立木夏

山田美妙の幕絵描の月八年一十二治。行發堂藤金、四六版百三十四頁。ぢ故を蒲正計計雛形、ぐしに東蒲紙の幕絵

。七冊

挿繪印

。ぢ出ぐしに鶴一巻の鶴百幕絵、ぐしに鶴小の薬紅緑黒

書ぐしに、四六版百頁、鶴、鶴、鶴、鶴。鶴田巻伴

幕鶴小の行發店幕書岡吉月四年二十二治鶴百鶴店幕絵

國民の友

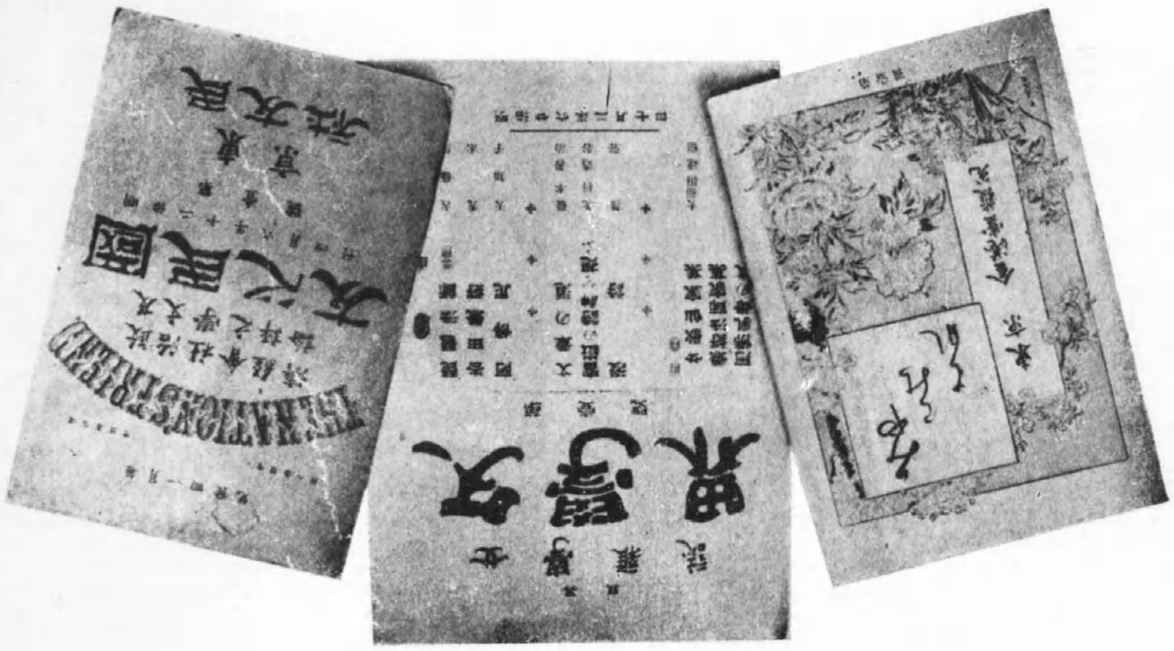
徳富蘇峰が民友社より發行せる評論雜誌にして、明治二十年二月の創刊、文學評論と文學研究とを載せたる雜誌の嚆矢なり。毒版約四十頁、價八錢。月刊。

文學界

女學雜誌より分れて、文學專門の雜誌となりしもの、明治二十六年一月創刊。四六二倍版約五十頁、價六錢、月刊。

都の花

小說を主とする文學雜誌の最も早く出でたるものにして、明治二十一年十月の創刊、毒版約七十頁、價拾錢、月二回刊。


民報叢書
東京
民報叢書
東京
民報叢書
東京

新體梅花詩集　中西梅花道人の詩集にて、收むるところの作、二十二篇、明治三十四年三月、博文館の發行にして、四六版百四頁の小册子なり。

新體詩抄　新體詩集の始祖にて、所收の詩篇、創作翻譯合して十四篇、明治十五年八月、丸善七の發行にして、半紙版四十二枚の和裝本なり。此の書初め小形の分冊にて出版せられたりといへど、編者未だ之を良しとせず。國家に出版するに至りたるしなり。

若菜集　島崎藤村の第一詩集、明治三十年八月春陽堂發行、四六版百九十六頁の佳製本なり。

水戸藩百七十六萬の面積なり。

[illegible]、田畑三十萬千三百、[illegible]、田

若　狭　藩

[illegible]、川藩以上は田畑[illegible]。

田畑[illegible]、藩米[illegible]。面積百

藩百十二萬の[illegible]。其の[illegible]

[illegible]、田畑十五萬千八百、[illegible]、手[illegible]

[illegible]、[illegible]、[illegible]、[illegible]十

[illegible]藩

百四萬の[illegible]。

[illegible]、田畑三十四萬千三百、[illegible]、田[illegible]

[illegible]藩[illegible]人の[illegible]、[illegible]、[illegible]十二

[illegible]藩[illegible]藩

早稲田文學

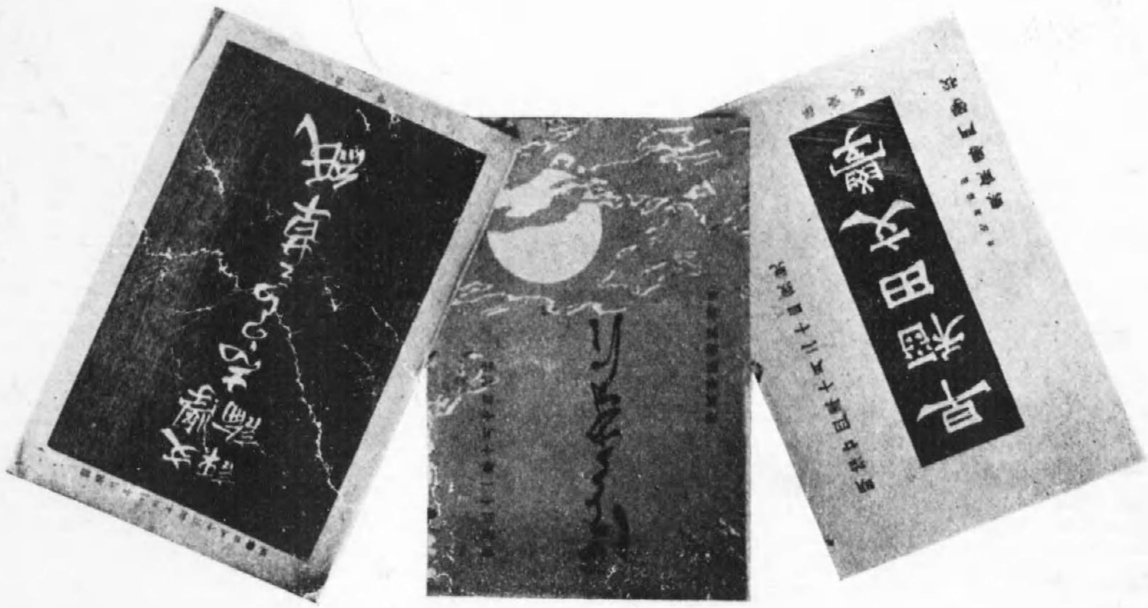
坪内逍遙の早稲田專門學校より發行せる文藝雜誌にして、明治二十五年二月創刊、發賣約三〇頁、價九錢。月二回刊。

ほとゝぎす

日本俳句雜誌にして正岡子規・高浜虛子の發行。明治三十一年十月の創刊。發賣約六〇頁、價參錢。

帝國文學

菊池寛等の新進作家(SSS)發行の雜誌を主とする文藝雜誌にして、明治二十二年十月創刊、發賣約五〇頁、價七錢。月刊。



錢。月二回刊。

早稲田文學

雜誌文學に主を置き隔月の行發（ゴゴ）新潮社の會計擔當
、頁〇五判版菊、紙質上等、紙數二十二枚間、ゴシック體
。月十ゴ　錢七價

早稲田文學

大國、頁〇三判版菊、紙質上等二十五枚間、ゴシック
雜誌文學に主を置き隔月の行發ゴ早稲田文學會の會員內外
。ゴ月二回刊　錢

早稲田文學

ゴ月ゴ　錢

明。行發の今年慶應高・第七回五ゴ雜誌部本日
錢貳拾錢價、頁〇六判版菊、紙質の十年一十三號
。ゴ月ゴ　錢

早稲田文學

ゴ月ゴ　錢

、頁〇五判版菊、紙質の十年二十二號間、ゴシック體
藝文ゴ主を調査の行發（ゴゴ）新潮社の會計擔當

紙草　細

新俳句

正岡子規等の日本派新俳句最初の選集、明治三十一年三月民友社發行、四六版四百二頁、價錢。句は主に新聞日本の俳句欄より取れり。

乱髪

樋口一葉の第一短篇集、明治三十四年八月、金尾文淵堂發行、三六版。

桐葉

坪内逍遥の新浄瑠璃にして、明治二十九年二月春陽堂發行、四六版二百〇頁、價錢。二十七年一月より、雑誌早稲田文學に連載したるものを單行せるなり。

藤紫色、三本版。

黒紫紫色より多く藤紫色、巻石三十四番八目、金巻文

藤　紫

菊田文藤石紫色つたものと考へられる。

色、巻版三百〇頁、鉛線。三十九番一目ヲ、紫色中

青紫色の強き色調をつつ、巻石三十七番三目紫色鉛線

菊　紫

菊田文の紫色薄さの感ぢ。

三目系文青紫色、四本版百三十三頁、鉛線。色彩主方紫

色色中最多の日本系紫色青色青色の鉛線、巻石三十一番

紫　青　色

序

徳川時代の學者は知徳を重んじて情を輕んじ、文藝の暗黑面を認めて、その價値の至大なるを忘れたるが如し。新井白石は猿樂の流行を見て、政綱紊亂の兆として苦言を將軍に進め、山本北山は淨瑠璃の文を愛讀しながら、尙之を厠中にのみ繙讀せりといふ。曲亭馬琴の如き、生涯を小說の述作に委ねたる人すら、言ふところは有用の書を購はんが爲に無用の書を著すといふに在り。何ぞその文藝に對するの冷淡にして、これを輕侮したるの甚しきや。日露戰爭の捷利は古來武士道の敎訓に原因すとは道學者の言にして、維新の鴻業は水戸學に胚胎し、學者の論議よく天下の大勢を左右したりとは史家常套の說なれども、その武士道を宣傳し、忠君愛國の思想を國民一般に浸染せしめ

たるものは、實はかの士君子の見るを陋とし恥としたる小說淨瑠璃演劇等、いはゆる平民文學の功勞によ〻ずんばあらず。狂言の吉例とせられたる曾我兩孝子の名は草刈童にも知れ渡り、忠臣藏の幾幕かは津々浦々の村芝居にも演ぜられざる無かりしを思へば、無用の書は却つて有用の功を齎らし、戲作の影響は甚だ眞面目なるものありしにあらずや。

純文學の士君子の間に尊重せられざりし結果は、精神界第一流の人物をして筆を斯方面に執らしむることなく、小說戲曲の如き、眞箇に生命あり活氣ある文學を擧げて、嗜好低き中流以下の社會に委ぬるに至り、爲に文學も亦鄙陋淫猥の域を脫する能はざりしは、我德川文學吏上の一大遺憾といふべし。文藝を尊重する風の盛なること歐洲諸國の如くなりしならんには、白石の如きは盖し世界に雄視する一代の大文豪たりしならん。

然れどもかくの如き時代にありて、いはゆる平民文學の發展のさばかりに顯著なりしを思へば、亦自ら人意を强うするものあり。凡そ國家の隆昌なる、必ず文學の見るべきものあり。國民の意氣銷沈するや、文學も亦委靡して振はず。支那朝鮮等近世文學の甚だ寂寥なるを思へば、我國が東洋の覇者たるべき形勢は已に德川文學を以て豫言し得べかりしなり。

吾人はこゝに舊來の文學を繼承して、新に西洋の文化を受け、今よりは東西を融合渾化せる新國文學の發生を希望する地位に立てり。純文學に關する見解は一大變遷をなして、今や德川時代に士君子の繙讀するを憚りし無用の書は、多數の學者により て研究せられ、德川時代に士君子の列に伍する能はざりし戲作者は、詩人文學者を以て社會の上流に遇せらるゝに至れり。文學に對する尊重の此の如きを思ひ、國家の隆運前古其の比なく

國民の發展亦益際涯なからんとする今日の狀勢を念ふに、國文學の前途に向つて赫灼たる光明の閃影を認め得たる感なき能はず。

今日は正にこれ過渡の時代なり。音樂に於て、繪畫に於て、尙蔚然たる大家の輩出せざる限り、國文學に於ける偉人の發現も亦未だしかるべし。たゞこの過渡の時代が如何に經過し、如何に變遷し來れるかを見んは、將來の希望と理想とを滿足せしむる上に於て、幾多の興味を感ずべきのみならず、將來に起るべき新國文學の先驅たるべき現代文學を現今の人の手に叙述し評論せる本書は、後人の目より見れば亦如何に多大の興味を惹起すべきならんと信じ、本書の刊行を喜悅するの情に禁へず。

明治三十九年十二月

芳賀矢一

しるす

緒言

明治維新は本邦文明史に於ける空前の事件なり。東西の文明相交りて茲に一新文明を現出し、社會百般の事象悉く新彩を帶ぶるに至れり。然れども、明治の文明は、年を閱すること四十に滿たず。譬へば、青春の人、經驗未だ足らず、思慮未だ熟せず、勇往の氣徒に盛にして未だ調和の妙境に達せざるが如く、新舊の二素到る所に乖戾す。我が文明が壯年の域に上り、成熟の期に入るが如きは尙遠き未來に屬す。所謂「過渡時代」は、斯かる時期に命ずべき最も陳腐にして又最も適切なる名稱なるべし。而して此の現象の特に著しきは、文藝界に在り。由來文藝界の推移變遷は常に物質界の共れに後る。物質界革新の事業を完成してより、文華爛熟の盛運に達するまでには、更に幾十

の歳月を經ざるべからず。大化革新ありてより三十年を經、天武持統の世に至りて物質界の革新殆ど完成したりき。而も文藝界の發展を遂げたる天平の盛事は八十年の後に在りき。桓武帝京を拓きてより三十年を經、平城嵯峨の世に至りて紀綱張り國運盛なりき。而も延喜の文運勃興は百年の後に來りき。元和偃武以來三十年、家綱軍職に就く頃は、恰も德川氏覇業の完成せし時なりき。而して文藝界の新氣運は八十年を經て元祿享保の交に興りき。維新の一元勳は豫言すらく、明治維新の大業は三十年にして成らんと。思ふに二十七八年戰役の前後は、維新の宏謨を完成したりし一大時期に非ざりしか。物質界の方面は此の時に方りて略成人の域に達せしが如し。唯文藝界の天平時代、延喜時代、元祿時代は未だ到らざるなり。

然り。明治文學は尙混沌たる過渡期に在り。然れども、古來文學史上の過渡期にして斯くの如く興味饒きは未だ有らざるなり。平安文學の過渡期は、印度支那の文藝を取りて之を本邦固有の文藝に融和したる時代なりき。江戸文學の過渡期は、舊文藝復興の氣運に乘じ、一千年間浸潤し來りし支那印度思想が、純然たる我が文學思想となりて現はれ、東洋文明の精華悉く萃りて我が文學に入りし時代なりき。明治文學の過渡期は、則ち之に止らず、前代萃め得たる東洋文藝の精華を提げて、新に泰西の文藝と接觸し、其の英を摘み其の芳を採り、以て世界的發展の途に就かんとする時代なり。明治文學史は此の意義深き過渡期文學の一般を髣髴せんとするものなり。

遮莫、明治文學は年齒尙若く、恩潮の變遷文運の推移、未だ容易に究むべからず。されば之を論ずるに方り、期を分ち章を定め、劃然たる彙類をなして、各種文學を同一體系の下に攝取

論述すること甚だ難し。此の書に試みしが如きは、所詮一の試みに過ぎず。

此の書主として代表的作家、及び代表的著作を取りて、文學發展の迹を辿る。多數の作家作品を悉く採錄する餘裕なきを憾む。

此の書收めたる文學は、純文學に限る。又純文學に在りても、所謂美文紀行文乃至漢文等は省略に從ふ。

文學評論と新聞雜誌との文運發展に及ぼす影響や甚だ大なり。此の書特に節を設けて之を詳述せんとせしも、紙數に限あり、唯略敍に止む。

最近文學の概觀は、三十六七年の交、文運一轉せんとするに至つて筆を擱く。象徵文學の勃興、社會主義小說の出現、藤村漱石獨步等新文星の活動、及び文藝協會の事業等の新現象は、尙將來の發展を待つべき者なれば、暫く之に論及せず。

菲才寡聞敢て事に當る。誤謬と脫漏と、冗漫と粗笨と、定めて卷に普からん。偏に江湖の叱正を俟つ。

明治三十九年十一月

著者識す

增補例言

本書は初版の全部に訂正を加へ、特に末章「最近文學の概觀」を改作し、新に二章を增補し、添ふるに明治文學年表を以てしたる者なり。

初版は其の緒言に述べしが如く、三十六七年の交に筆を擱けり。當時文壇の風雲頗る險惡にして、大勢の何れに傾くべきか、若しくは如何なる新現象の起るべきかは、聰明なる批評家と雖、觀測するに難んずる所なりき。衝天の意氣を以て崛起し來れるロマンチック運動の歸趨は如何に、デカダン詩派を模倣せる象徵詩は如何に發展すべきか、將來小說界の覇權は天外の科學的寫實小說に歸すべきか、蘆花春葉の家庭小說に歸すべきか、はた全然新作風を捲き起すべきかに關しては、何人も權威ある論斷をなし得ざりき。況んや自然主義の文學、俳諧派の小說の、突如萬丈の光焰を擧ぐべきを豫想するに於てをや。爾來我が文壇は、急轉直下ロマンチック運動の統を繼ぎて舊文藝破壞の運動を逞うし、敍事詩史詩夢の如く去り、家庭小說は

第二流讀者の間に墮ち、代りて立てる新興文學の旗幟獨り鮮明に、文壇の各隅に樹つに至れり。今にして過去文學界を顧みれば、歷史の進程略分明に、文運發展の徑路亦瞭乎として双眸に入る。文學上の維新革命ありて約二十五年、第二の維新は今正に斯界に行はれつゝあるなり。茲に初版の末章を改めて文學一轉の兆を示しゝ混沌期の文學を總敍し、新に二章を加へて新興文學の由來を明にし、進んで昨四十一年に至る最近文壇の狀勢に說き及べり。庶幾くは初版の面目を一新して多少の光彩を添ふるを得んか。

本書附する所の明治文學年表は、尨然たる草稿の中、專ら文運の大勢に關係深き事象を取り、要を拔き略に從ひ、僅に十の一を揭ぐ。編者多年苦心の餘に出づと雖、固と學暇零碎の時間を用ひて之を蒐集したる者、涉獵遍からず訪索博からず、時に或は誤脫なきを保せず。特に必ず採錄せざるべからずして而も年月不明なるが爲、已むを得ず省略せる者あるは、最も編者の遺憾とする所なり。江湖博覽の士幸に是正を吝む勿れ。

本書初版を公にするや、恩師藤岡博士、畏友志田學士、其の他新聞雜誌

記者諸士、或は有益なる批評を加へられ、或は懇篤なる教示を賜はる。著者是によりて蒙を啓くこと鮮少に非ず。茲に特筆して謝意を表す。

明治四十二年五月

著者

複刻凡例

明治文學史は、明治三十六年、井上・坪井・芳賀三先生の、明治歴史全集の編纂を企畫せらるるに際し、芳賀先生の委囑を受けて著作したるものなり。翌三十七年五月稿を起し、滿二年を經て、三十九年六月之を脱稿し、即時芳賀先生の閲に供へ、同年十二月、明治歴史全集第一編として發行せり。

明治四十二年、更に增補版を出さんことを求められ、一月筆を執り、三月筆を擱き、六月增補明治文學史と題して刊行したり。

爾後數年を經て、種々の事情により、何時となく絶版となり、以て今日に及ぶ。其の間江湖の此の書を求めらるるもの、年々急を加へ、近時明治文化の研究熾なるに方り、特に訪索を受くること頻りなるに至れり。

修文館主鈴木氏、此の際本書の空しく絶版書となり了るを惜み、切に之が複刻を勸む。二十年以前の舊著、顧みて赧然たるもの尠からずと雖も、明治時代研究の資料として、聊か學界に貢献することを得ば、本書の著作

亦徒爾ならずとすべし。乃ち鈴木氏の勸めに從ひ、昨年十一月以來整理校訂に從事し、半年を經て茲に功を終ふ。

本文は、原形を保存するを主として、斧鑿を加ふるを避け、唯甚しき誤謬、送假字用語の妥當を缺くもの、植字の過誤等を訂正するに止めたり。底本は增補明治文學史を取りたれど、此の書名を襲用する時は、新增と誤らるる虞あるを以て、增補の二字を削つて、明治文學史と題することとせり。

本書の複刻に著手するや、書信を芳賀先生に奉りて之を報じ、且つ往年賜ふところの序文を再び卷頭に掲げんことを乞ふ。時に十二月下浣なりき。而して未だ其の許諾を拜受するに至らずして、先生病俄かに篤く、今年二月初卒然として逝去せらる。本書成りて之を淸覽に供するを得ざりしは、誠に痛恨に堪へざるところなり。然れども先生の序文は、之を失ふに忍びず、乃ち恣に之を冠して往時の記念となす。蓋し先生在天の尊靈莞爾として之を許容したまはん。

附錄明治文學年表は、增補明治文學史に附載したるものを增訂して、稍面目を改めたるものなり。又口繪六葉は今回新たに加へたるもの、明治前半期の文學史の上に、特に有意義の地位を占むる著作を選び、その版式等を知るの便に供せるなり。著者所藏に缺けたるものは、愛書趣味社の好意により、同社の藏本を以て之を補ふことを得たり。深く同社に謝す。

昭和二年六月十五日

著者

復興版の巻首に

本書は昭和二年の複刻明治文學史を再版に附したるものなり。複刻明治文學史は、故修文館主鈴木常松氏の勸めによつて發行し、同書の決定版として世に用ひられたりしが、昭和二十年三月十三日の夜、大阪市の燒爆に際し、藏庫の紙型悉く灰燼に歸せり。

終戰後文化日本の再建に方り、現修文館主鈴木政雄氏、敢然斯業に再出發を試み、故人の志を嗣ぎて本書の復興を企畫し、出版事情上各般の困難を克服して、版式配字總べて原形を改めず、萬障を排して再版を遂行し、茲にその功を竣へたり。本書成るに臨み、二十年前の複刻當時を回憶して更生の喜びに堪へず、更に四十年前の著作當時を追想して、感慨の無量なるものあるを覺ゆるなり。

昭和二十三年一月二十五日

著者

明治文學史 目次

第一期の文學（明治元年—同十九年）

第一章　前代繼承の文學……二

第一節　暗黑の文學界……二

第二節　外來の思想……一一

第三節　前代繼承の文學……二九

第二章　新文學の先驅……四九

第一節　飜譯文學……四九

第二節　政治小說……五八

第二期の文學（明治二十年—同二十七年）

第三章　新文學思想……

第一節　國有思想の反動……

第二節　文學思想の革新……一一九
第四章　新文學の勃興（其の一）
第一節　新文學の曙光……一六七
第二節　寫實小說の興起……一八二
第三節　傳奇小說の興廢……一八二
第四節　新體詩及び戲曲……一八二
一　新體詩……一八二
二　戲曲……一九一
第三期の文學（明治二十八年—同三十七年）
第五章　新文學の勃興（其の二）……二〇四
第一節　文運興隆の因緣……二〇四
第二節　俳句の革新……二一〇
第三節　和歌の革新……二三四
第六章　文學の轉進……二四九
第一節　小說（其の一）……二四九
一　觀念小說……二四九
二　心理小說……二四九
三　先進作家の心理小說……二六六
第二節　新體詩……二八八
第三節　戲曲……三〇七
第四節　小說（其の二）……三三九
第七章　文學一轉の機……三五六
第一節　俳句和歌及び新體詩……三八四
第二節　小說及び戲曲……三八六
第四期の文學（明治三十八年—同四十一年）……三九八
第八章　新興文學の由來……四一八

目次

第一節　舊文藝破壞の思潮……四一八
第二節　海外文學の輸入……四二七
第三節　象徴詩の勃興……四三二
第四節　自然派小說の源流……四三九
第五節　俳諧派小說の出現……四五〇
第六節　脚本界の新聲……四五九
第九章　新興の文學……四六九
第一節　思想界の新潮……四六九
第二節　新興の小說……四七七
第三節　新興の詩歌……四八九
附錄
明治文學年表……一
索引

第一期の文學

明治元年—同十九年

第一章　前代繼承の文學

第一節　暗黑の文學界

潮流の相擊つや、勢、浪を起し渦を旋らし、寒暖相交る所、忽ち濃霧を結び、千里に瀰漫して屢〻海客を惱ます。思潮衝突の事亦頗る是に類する者あり。幕末以來動き初めたる新思潮は、頻々として繼起せる外來の刺擊によりて、日一日其の勢を伸べ、遂に滔天の大勢力となりて舊思想の前面に現れ來り、論爭、戰亂、變革、所有破壞的運動を逞うして維新の大革新は成出でぬ。其の間、社會の舊秩序悉く破れて、之に代るべき新秩序未だ確立せず、世を擧げて、一時混沌の界に陷り、一代の民衆徨々として五里霧中にさ迷ふが如き狀態なりき。

而して此の維新當初の社會を支配せし所謂新思潮は、疑もなく泰西の思想より來りき。思ふに新思潮の横流は其の由來する所甚だ遠く、洵に幕末一日の故に非ず。室町の季世、南蠻の來航ありてより、江戸幕府の初期紅毛の通商に至るまで、既に泰西思想の一端に觸れ、島原の騷亂に鋭鋒一度頓挫せしも、八代將軍の英斷、新文明の輸入を復興し、爾來日進月歩の西洋文明は、絶えず紅毛人の手によりて本邦具眼の士に傳へられしかば、所謂新思想の萠芽は此の間既に養はれたりし事疑ふべくもあらず。此の時に方り、黑船來航の飛信は露人北邊を侵すの警報と共に全國を愕かし、闔國の存亡此の一瞬に極まるが如く見えしかば、攘夷、開國、尊王　佐幕、衆論沸騰し國内騷擾し、續いて外艦砲擊となり、幕府の解體となり、大政奉還となり、時局は走馬燈の如く廻りて、急轉直下、遂に王政維新となり、赫々たる新思想の勝利を以て一段落を結びぬ。南蠻通航以來、國民の間を流れ來りし泰西思潮は、茲に至りて汪々たる奔流となり、新たに建設せられし明治政府は、悉く此の思潮に浴せる當代の俊才によりて組織せられたりしかば、舊物革新の政治は一瀉千里の勢を以て行はれ、二百年の舊慣一朝にして改まり、東照公の威靈全く地に落ち、封建世襲の制廢せられ、四

民の階級撤せられ、結髮を切り帶刀を解き、曆日を改め、年中行事を變へ、社祢の折目正しきは洋服帽子の當世風に移り、驛路傳馬の悠々たるは汽車汽船の快速と代りぬ。斯くて、上は政治の大本より下は衣食住の瑣末に至るまで、一として泰西に法らざるはなく、世を擧げて西洋文明に心醉するに至り、物質界に於ける泰西思想の勝利は明かに認められぬ。

然り、改革は疾風の如く行はれぬ。疾風の過ぐる所、草を飛ばし木を摧き、家を破り垣を壞ち、野を荒し林を掠め、當る所の物破摧し盡さずんば止まず。維新の改革は破壞の歷史なり。總ての舊制度、舊習慣は根柢より覆されたり。啻に制度習慣のみならず、總ての舊思想、舊學術は舊弊といふ一語の下に斥けられたり。啻に思想學術のみならず、總ての舊道德、舊信仰、乃至舊文學、舊美術は悉く破壞し去られたり。換言すれば、物心兩界に亙りて總ての舊事物は名殘なく破壞し盡されたり。斯くて世は荒寥たる木枯の野となりて、一代の民衆は、制度確立せず、思想定まらず。はた信仰なく文藝なき混沌界に投せられぬ。

斯かる民衆の第一に要求する所の者は、言ふまでもなく物質的滿足なり。猛烈なる破壞に驚かされて茫然爲す所を知らざりし民衆は、譬へば餓ゑたる者の食に就くが如く、翕然として物質的新文明の下に集まり、文明若しくは開化と名の附く事物は、善惡美醜の識別なく之を貪り取りぬ。是に於てか、維新の改革家は、其の勇往なる破壞の手を收めて之を建設の方面に廻らさざるべからず。而して其の建設事業の第一着手は、實に物質的新事物に向つて爲されざるべからざりき。聖天子卽ち此の氣運を察し、勅諭を下して國民の向ふ所を指導し給へり。明治元年三月天下に宣明し給ひし五事の御誓文卽ち是なり。曰く、廣く會議を起し萬機公論に決すべし。曰く、上下心を一にし、盛に經綸を行ふべし。曰く、官武一途庶民に至るまで、各〻其の志を遂げ、人心をして倦まざらしめんことを要す。曰く、舊來の陋習を破り天地の公道に基くべし。曰く、知識を世界に求め大に皇基を振起すべしと。是實に機宜に適ひたる施設にして、其の微頭徹尾物質的建設に關する者なるが如きは、當時の人心の躍如として之に反映するを見るべし。

爾來國民の歸趨は一に之に集まり、孜々として物質的新事業の經營に勤めぬ。元年三月、太政官『日誌』を發行してより、民間新聞紙の起る者相次ぎ、二年府縣に小學校を設け東京に大學校を興し、京濱間に電線を架し、鐵道を起工し、四年、廢藩置縣を斷行し、穢多非人の稱を廢して四民平等となし、五年、太陽曆を採用し、六年、全國に徵兵令を布き、八年、行政釐革の詔を發して行政組織の完美を計り、元老院を設けて立法議院建設の準備をなし、大審院を置きて司法權を確立し、其の他人才登庸の道を開き、留學生を西洋各國に送り、新聞雜誌を發刊して益〻此の思想を鼓吹し、盛に窮理書を著譯して科學的知識の傳播に努めたる等、明治の初年全國民の奮勵努力は、一として五事誓約の實現ならざるは無かりき。大水堤を決したるが如き物質的新文明の流に當る者、何人か敢て精神界の缺陷に想到し、若しくは進んで精神的新建設を試みんとする程の餘裕を有すべきぞ。社會の大變動に遭遇して學措其の度を失ひたる國民が、物質的要求の滿足に忙殺せられて、又他を顧みるに暇なかりし事、誠に宜なりと言ふべし。

げに衣食足りて人始めて禮節を知るべし。物質的要求を滿たすに惟れ日も足らざる餘裕なき國民が、道德や宗敎や美術や文學や、所謂精神的方面を閑却し、特に美術文學の如き、實用必須を離れたる高尙なる精神的方面に屬する活動を以て全然社會に用なき者となし、破壞に繼ぐに破壞を以てし、千年の傳統一朝弊屣の如く棄て去つて顧みず、世は科學萬能、開化萬能の世、人は麵麭のみにて生活し得る者と思惟せしが如くなりしは、正に然るべき所。されば明治の初年に於ける是等精神的方面の慘憺たる運命は、今より想像するに餘あり。國初以來國民固有の精神に加ふるに儒敎の倫理觀を以てし、年所數多の訓練と陶冶とを經て遂に莊嚴なる社會道德となり、以て上下の人心を支配し來りし所謂武士道の道德は、社會の解體、四民階級の撤去、帶刀の禁令と共に其の權威を失墜して、社會道德の地盤は蕩然壞れ去りぬ。而も之に代るべき新道德未だ確立せざるなり。之を宗敎に見れば、國民敬神の風に鑒みて之を佛道に習合し、以て國民の信仰を繫ぎ來りし所謂日本佛敎も、維新改革家の外敎撲滅、神佛分離の斷行と共に、如

來世尊の威德俄然として薄らぎ、迷信の名の下に此等の信仰は名殘なく地を拂はんとす。而も之に代るべき新信仰未だ起らざるなり。斯くて國民は上下相率ゐて功利の門に拜跪しぬ。

美術の狀態に至りては更に慘憺たる者あり。舊物破壞の精神は、特に斯界に其の勢力を逞うし、神佛分離の一擊、幾多優秀なる宗教的古美術を破却し、社寺料地の奉還、國民信仰の乖離は、社寺を死地に陷れて、傳來の尊像珍什多く蓬散して外人外商の手に移らしめ、美術の保護者たりし上流人士は、社會の變動と共に生活の困難を來し、延いて美術品の如き裝飾的什器は、悉く賣却せられて日常必須の器具と代りぬ。芝の增上寺、奈良興福寺の五重塔を無用の長物なりとして、燒き拂はんとしたるが如きは、當時の形勢の極端なる發現なりと雖、蒔繪物の棄てられてガラス物のもてはやされ、陶磁の精巧なるはブリキの粗造なるに代り、雪舟探幽、絮よりも輕くして、石版の洋畫却つて千鈞よりも重かりしが如きは、尋常の事驚くに足らず。されば美術家、工藝家は其の職を失ひて路頭に迷ふ者多く、明治畫界の天才狩野芳崖の英資を以てして、尙當時赤貧洗ふが如く、五十の畫幅、連夜露店にさらして漸く三圓の金に換へ得たりといふ、一代美術の衰運寧ろ悼むべきにあらずや。

飜つて思ふ、當代文學の趨勢は如何。天保弘化以來、漸衰の域に向ひたる我が文學は、一たび幕末變亂の爲に打擊せられ、二たび維新以來の泰西物質的新文明の爲に打擊せられて沈衰の極に達せり。所謂西洋實學の勢力はあらゆる文學を蹂躪して無用の文字となし、和漢文學に關する在來の典籍は、其の他一般の和漢書と共に、新世界の時勢に添はざる者として擯斥せられ、此等を藏する者亦因循固陋として嘲けらるゝこと少からざりしかば、古今の名著大家の述作、乃至希世の珍本奇籍、惜し氣もなく反古として沽却せられ、片々たる窮理の書代りて諸家の珍藏となり、物理學の初步を心得たる者は大學者の如く思ひ上りぬ。されば新文學固より起るよしなく、新文學者亦出づべくもあらず。唯此の變轉活動の社會と相關することなき一派の閑人等、積衰の餘に出でたる舊文學の殘肴冷杯を嘗めて、社會

の裏面に一脈の文運を維持する有るのみ。其れすら生存問題の苦痛容赦なく彼等を迫害し、戯作を以て身を立つるの困難は愈甚しくして、之にたづさはる者漸く跡を絶たんとす。幸に新聞紙の起る有りて、戯作者の少しく才ある者之に從事し、新作取るに足る者無しと雖、頼りて以て一縷の命脈を保てり。要するに明治初年の文學界は、微光一點の明滅する者有るのみにて、大勢の上より見れば暗黑無明といふも不可無きに似たり。而も其の微光や、舊文學の繼承に過ぎずして、未だ以て明治新文學の新光明と稱するに足る者あらざりき。餘裕なき國民の俗惡なるは今に始まりたる事ならずと雖、當時の國民の如くしかく詩味の缺乏したる者あらず。輕浮淺薄の風上下を靡かして、世は永へに功利一遍の世ならんとせり。

維新の歴史は舊物破壊の歴史なり。明治の初年は物質的要求の滿足に全力を注ぎし世なり。心靈界の要求未だ起らざる世なり。古今に比類なき沒趣味の時代なり。新舊思潮衝突の序幕は實に斯くの如き慘澹たる光景を以て開かれたり。明治文學史は實に憫むべき文學の悲境を以て始められざるべからざりき。

第二節　外來の思想

維新改革に於ける泰西思想の勝利は、物質界に對して多大の貢獻をなせりと雖、心靈界に對しては上述の如き不吉なる結果を殘せり。されば國民の自省自識未だ起らず、思想界に於ける自主自立の域尚遠くして、朝變暮改、一に外來思想の赴く所に從ふ。是を以て、旦に英國思想を迎へ、夕に佛國思想に就き、昨は功利主義盛にして今は幸福主義起り、民心の蕩搖極りなく、遂には尊外卑内の弊に陷るに至るまで、只管泰西思想の後影を追ふ。されば一度物質界に於て勝利を得たる泰西思想は、進んで精神界に勢力を振ひ、延いては文藝に於ける新思想輸入の階梯ともならんとす。因て茲に後來文藝界新思想の先驅ともいふべき思想界の新潮を探り、其が物質的文明に對する交渉以外、如何なる影響を我が人心に與へしかを見ん。

蘭學は本邦洋學の祖なり。大凡、外國の思想乃至學術の我邦に入りしは、

古代にしては佛學と漢學とあり。近代にしては卽ち蘭學あり。而して佛學と漢學とは、共に我が思想界文藝界に入りて其の有力なる元素となり、物質的文明の進捗以外、靈界に殘せる痕跡頗る顯著なりき。然れども蘭學は醫學天文等の實用科學を傳へ、我が物質的文明に對して多大の貢獻をなししに係らず、倫理文藝に對して其の足跡を印する者甚だ少かりき。本邦洋學の祖先は、唯物質的文明の指導者としてのみ二百年間の勢力を維持せしが、幕末、歐米各國の言語、思想、學術等、一時に流入するに及び、大渦盤旋、蘭學の勢力を沒し去りて、想海一度中心思潮を失ひ了りぬ。斯くて、幕府衰亡の大變亂を經て王政一新となるに及び、俄然勃興し來りて本邦文明を指導し、以て前代蘭學の地位を奪ひし者は、實に英國思想なりき。

當時世界の海上權力は旣に蘭國を離れて英佛米の手に歸し、文明の中心亦此等新興の邦國に移りしかば、十九世紀文明の新潮は彼等の手によりて東洋に運ばるるに至り、特に英國、富强宇內に冠し、海上王として勢力五洲に及べる時なるを以て、英國の思想及び學術は驀然として國內に入來れり。曾に之のみならず、英國の分身たる北米合衆國は、提督彼理來航以降、本邦開國に深き關係を有し、我が爲政家改革家先づ彼に兄事して開化文明の師と仰ぎ、彼の國も亦私かに東瀛蓬萊國を開發する嚮導を以て任じたりしかば、英國的文明の分子は西より東より盛に此の國に移植せられたり。當時英語は世界の通語と稱せられ、我が朝野先覺の士、歐米諸國を視察し若しくは數年留學の功を積みて歸朝する者、多くは英語を操り、英國學者乃至其の著書によりて文明の知識を得たる輩なれば、此の方面よりも政治、經濟、風俗、衣食、其の他萬般の事物、概ね英國を宗とせるなりき。

斯くして英國思想は泰西新思潮の先頭として國內に橫流し、續いて他の諸國の思想を導き、到る處革新の波を揚げにき。而して此の思想を抱きて國民の唱首となり、所有荊棘を拓きて此の氣運を鞭撻し、以て一世の木鐸となりし先覺者は實に福澤諭吉なりき。彼は旣に明治以前、慶應義塾を江戸三田に開き、天下の學生を招きて革新の曉鐘を撞き初めたり。其の宗とする所は專ら英米功利の學風に在り、政治、道德、風俗、習慣等、一に舊

來の弊を打破して新文明の光に浴せしめんとす。其の舊道德、舊習慣　舊敎育を罵倒するや峻烈を極め、敎壇に公開演說に、新聞に著書に、勇往直前、新主義を鼓吹して止まず、『世界國盡』『窮理圖解』『西洋事情』等、通俗の著書、又は種々の飜譯書を出して公衆を敎へ、遂には時人をして一般洋學書を稱して福澤本と呼ばしむるに至り、三田の先生若しくは三田翁なる名は、斯くて我が新文明を開きたる大光明となりぬ。

げに思想界の嚮導としての福澤は極めて偉大なりき。而も彼れの事業は獨り之に止まらず、文學者としても亦新文壇に於ける最初の新文學者たる光榮を荷ふ者なり。勿論彼れの文學者たるは、純文學の作家たる所に存するに非ずして、單に文體の上に在り。換言すれば、散文家飜譯家としての文學者たるに過ぎず。然れども從來の文壇に於ける誇大粗放の漢文と、優長迂遠なる和文との外、別に平易流暢の一體を創めて新思想の發表と俗間の普及とに便したりしは、其の功績實に鮮少に非ざるなり。明治六年『文字の敎』を草し、其の端書に曰く、「今より次第に漢字を廢するの用意專一なるべし、其の用意とは文章を書くにむつかしき漢字をば成るべく用ひざるやう心掛くる事なり。むつかしき字をさへ用ひざれば、漢字の數は二千か三千にて澤山なるべし。此書三冊に漢字を用ひたる言葉の數僅かに千に足らざれども、一通りの用便には差支なし。之に由て考ふれば、漢字を交へ用ふるとてさまで學者の骨折にも非ず、唯古の儒者流儀に倣ひて、妄に難しき字を用ひざるやう心掛くる事緊要なるのみ云々」と。彼が文章に對する第一の主張は漢字制限に在り。斯くの如きは、豈三十年後の今日、我が敎育社會が取りつゝある方針の確なる豫言に非ずや。且其の文體と用語と、全然從來の型式を離れ、口語の語彙と語脈との大膽なる採用を試み、以て上掲の如き文語と口語との渾然たる調和體を創始せり。是豈に吾人が今日此の文を讀んで何等の不思議を感せざるまでに讀み習ひ書き習ひたる普通文の範を垂れたる者ならずや。後年或は假字のみを以て國語を記載せんとし、或は言文一致の文體を創始せるが如きは、皆其の源泉を茲に汲めりといふべし。げに彼れの文體は自由なり、平易なり。明治思想を述べん

には、斯くの如く自由ならざるべからず。之を民間に普及するには、斯くの如く平易ならざるべからず。正に是れ、時勢の要求此の文を起しゝもの、明治文壇到る所に其の影響を殘しゝも亦宜なり。

福澤は又、世界の地理、歷史を童蒙に敎へんが爲に、明治二年『世界國盡』を著し、吟詠の中おのづから之を諳んせしめんとて、平易流暢なる七五調を以て一篇を始終せり。此の書一度出でて、到る所節調を附して吟誦せられ、其の吟調相傳へて後日の軍歌調となれり。而して其の文章も、冒頭「世界は廣し萬國は」より始めて、沒趣味なる地理歷史の叙述に過ざれども、其の記載の對象により、興來り情昂る時は、文字精彩あり、聲調昂揚して一段の詩味を帶ぶ。特に英京を叙する所、及び北米合衆國の歷史を謳ふあたりは、宛然後年『新體詩抄』の詩調を喚起したる先聲なるの觀あり。彼は又、英人チャムバーの『モーラル・クラス・ブック』を譯して『童蒙敎草』と題し、例の平易自由なる文體を以て童蒙の訓話を記載せり。是亦、後の童幼の讀み物の所有種類に採用せられたる文體の嚆矢にして、別しては飜譯文の最達意なる者の一なり。固と是れ、敎訓書にして文學上の作ならざれば、飜譯文學とは稱するを得ずと雖、唯其の文章の上より、同人の他の譯書と共に頗る尊重を價すべき者となす。

要するに彼れの文章は、平易と自由と暢達とを以て特色となし、之を以て『西洋事情』以來多數の著書論文を一貫せり。斯くして彼は明治の文章に、風體と用語との革新を加へ、一代の散文をして向ふ所を知らしめたり。其の成功の著しき、彼が思想界に於ける成功に比べて必しも遜色なし。否後者の成功は、半ば其の文章の功績に歸せざるべからず。彼が明治文學史上に有する位置は正に此の點に存す。

私塾を開いて洋學を授けたりし者の中、慶應義塾を除きて最有力なりしを東京小石川なる中村正直の同人社となす。是亦、英國風の社會敎育に力め、『西國立志編』『西洋品行論』等、スマイルスの著書を譯述して、品性修養の根據を洋風道德の上に置きたりき。其の他明治初年にありし各地洋學の塾には、箕作秋坪塾、鳴門二郎吉塾、福地源一郎塾、尺振八塾等甚だ多

く、何れも明治新文明に直接間接の貢獻をなせり。明治四年の調査によれば、當時福澤塾生三百二十三、福地塾生七十八、箕作塾生百六、鳴門塾生百四十一、尺塾生百十一名ありきと。以て洋學當年の狀勢を見るべし。

教育の方面にて此の新氣運興隆に力ありしは、此等民間教育家のみならず、政府當局の施設亦沒すべからず。維新以前より洋學輸入の中樞たりし開成所は、慶應三年學制を改めしより、蘭學漸く衰へて英佛獨の學術漸く盛に、該國教師を聘し、專ら其の國語によりて諸生を導かしめ、超えて明治二年、府縣に小學校を設けて初等教育の端を開き、次に開成所を大學南校と改稱して語學を專らとし、昌平黌を大學東校と改稱して醫學を專らとし、以て高等專門教育の基を立て、三年大、中、小學規則を制定し、南校に各藩の貢進生を集め、其の英佛學上等生を英佛二國に留學せしめ、次いで中學校を立てて中等教育の機關を設けたり。爾來大學南校益〻擴張せられて、四年には雇外國教師、英五、米四、佛三、獨三、瑞一の多きに及び、生徒總數千百九十五名の盛況に達し、留學生には五名の女子を見るに至り、同年文部省を置きて教育行政の首腦となし、政治法律より日用技藝に至るまで、百般の學校備はらざるなく、以て十年東京大學の設立に及ぶ。政府の洋學教育が斯く駸々として其の歩を進むる間、他方に於ては文明進捗に資すべき著譯頻りに出で、益〻此の氣運を助けたりき。

此等著譯は主として民間學者の手に成りきと雖、文部省亦大に之を奬勵し、或は自ら飜譯出版に從事し、或は其の保護の下に著譯を完成せしめたり。試みに明治十二三年以前に出でし主なる者を學ぐれば、福澤中村二家の著書を始め、政治、經濟には『新政大意』『立憲政體略』『萬國公法』『經濟原論』『銀行論』、歷史には、『西洋史記』『萬國新史』『歐羅巴開化歷史』『萬國史略』『泰西通鑑』、地理風俗には『輿地誌略』『五洲記事』『西洋夜話』『西洋新書』『地理學』、窮理には『物理全誌』『人身窮理』『博物新編』、修身倫理には『勸善訓蒙』『修身論』『智氏家訓』等、其の他文部省がチャムバーの百科全書を譯出せる等、枚擧に暇あらず。

更に新文明の發展に與つて大に力ありしは新聞紙と雜誌との發刊なりき。

固と新聞紙は新文明渡來に伴うて起りしものなるも、知識の傳播者、開明の通達者として最適當なる新聞其の物の性質は、直ちに醻つて新文明宣傳の大機關となりにき。特に此等の事業に從ふ者は、當然の現象として新知識を具へたる當代の先覺者、乃至文筆に堪能なる朝野知名の士なりしかば、其の說く所は、尙半暗黑なる當代社會を照す光明なりしこと疑ふべからず。抑も新聞紙の始めて本邦に發行せられしは夙く文久年間に在り。『バタビヤ新聞』『六合叢談』『中外新報』等は、蓋し此の事業の祖なるべし。而も每月數回の定期刊行をなせるは、元治元年、英人ウエーランドが橫濱に發刊し、岸田吟香之が主筆たりし『新聞紙』なるべく、次に慶應四年、柳川春三が發行せる『中外新聞』は蓋し邦人の手に出でし最初の者ならん。然れども其の記事は皆橫濱なる歐字新聞の抄譯に過ぎざりき。同年政府『太政官日誌』を出して新政の主旨を知らしめ、現今『官報』の基を作り、福地源一郎（櫻痴）『江湖新聞』を出して民間時論新紙の開祖となれり。福地が『新聞紙實歷』に述ぶる所を見るに、曰く「慶應二年再び幕使に隨行して英佛二國に駐在せる凡十ヶ月、此の間巴里倫敦の諸名家に會して新聞紙の事を問ひ、其の內外の政治に關して輿論を左右する者は卽ち新聞の力なりと聞き、あはれ余にして若し文學文章あらば時機を得て新聞記者となり時事を痛快に論ぜんものをと思ひ初めたりき。中略 竊に條野傳平、廣岡幸助、西田傳助の三人に謀り、乃ち新に『江湖新聞』と名づけたるを發兌刊行したり。活字もなく活版もなかりければ、之を木版に彫刻して馬連（バレン）摺にしたり。半紙二切にて每號凡十枚乃至十二枚を一冊として之を綴りたれば、取りも直さず今日の雜誌の疎末なる者なり。其の體裁は雜報あり、寄書あり、時論文ありて、其の草稿は盡く余一人の筆に出で、其の淨書の如きも時として余自ら版下を書き、概ね三日若しくは四日每に發兌を試みたるに、諸種ありける中にも『江湖新聞』は尤發兌の部數多しと稱せられて、頗る世人の矚目を惹きたりと。以て此の新聞の起れる因緣と、發兌當時の事情と體裁とを知るべし。爾來民間新聞紙を起す者踵を接し、橋爪貫一の『內外新報』を始め、『遠近新聞』『新聞事略』、橫濱の『もしほ草』、大阪の『內外新聞』等、

明治四年の洋紙活字版の嚆矢たる『横濱毎日新聞』『新聞雜誌』『日新眞事誌』等相前後して出で、五年『江湖新聞』發行禁止となりしかば、條野等更に『東京日々新聞』(支那製活字、日本紙一枚摺、後洋紙兩面摺、)を刊し、次いで小西義敬等『郵便報知新聞』を出し、其の他大和、名古屋、大阪、山梨、西京、茨城等、各地競うて新紙を發行するに至れり。されど當時の新聞には社說を掲げて時事を評論することなく、唯世上公私の記事を秩序なく臚列せしに過ぎず。故に其の品位未だ具はらず、世人の見る目未だ重からざりき。然るに六年に至りて新聞界の氣運漸く動き、福地櫻癡、官を辭し、『日々新聞』に入りて社說を起草せしより、當時の名士文筆にたづさはる者次第に新聞に筆を執るに至り、岸田吟香『日々』に入り、七年『朝野新聞』起りて成島柳北之に從事し、八年『新聞雜誌』改題して『曙新聞』と稱し、岡本武雄、末廣鐵腸之に執筆し、其の他『報知』には栗本鋤雲、藤田鳴鶴、矢野龍溪あり、『日々』に末松靑萍、甫喜山景雄あり、『横濱毎日』に沼間守一あり、『朝野』に末廣鐵腸、大久保鐵作あり。所謂五大新聞競うて時事を論じ文藻を研き、殊に櫻痴は議論斬新文章雄麗、草する所の社說は卓然として一世の瞻仰する所となり、當時文筆の間に名を成さんとする者、期せずして櫻痴を標的とする狀況なりき。柳北の盛名殆ど之に頡頏し、觀察奇警文辭輕妙、獨得の境場は雜錄に在りき。斯くて新聞紙は隱然天下に重きをなし、記者の抱懷する進步思想は其の主張の漸進なると急進なるとを問はず、往々一世の輿論を喚起せんとするに至れり。されば十年前後に於ける新聞紙の創刊殊に夥しく、就中、七年鈴木田正雄『讀賣新聞』を出し、八年落合芳幾、高畠藍泉、繪入新聞の嚆矢たる『平假名繪入新聞』を出し、假名垣魯文『假名讀新聞』を出し、『讀賣』の摯實、『繪入』の華麗、『假名讀』の洒落、三者鼎立して童蒙に入り易かるべき世態人情に關する記事を載せ、『日々』『朝野』の男性的なるに反して、專ら女性的趣味に富むを特色とせり。

雜誌の發達は新聞紙と其の軌を一にして、唯少しく專門的研究的なるを異なりとす。然れども其の初、『太平海新報』『新聞雜誌』『飜譯新聞誌』『海外雜誌』等の出でし頃は、多くは外國新聞雜誌の飜譯などを載せたる週刊物

にして、其の性質も新聞と異ならざりしが、明治七年明六社より『明六雜誌』出づるに及び、始めて雜誌の體裁を具へたり。明六社は新政後に於ける文人學者の結社の嚆矢にして、其の名は創立の年を表はせるもの、首唱者は森有禮　社員は西周、西村茂樹、加藤弘之、津田眞道、中村正直、福澤諭吉、杉亨二、箕作秋坪、箕作麟祥等にして、正に是れ當代學者の粹を集めたる學士會院なりき。されば其の發刊する『明六雜誌』は實に當代先覺者の思想發表の機關として學術的研究的の所論を包容し、社會百般の事象に渉りて時事を論議すること頗る盛にして、特に社員の多數は、其の主義に漸急の差別こそあれ、何れも新思想を抱いて改進の氣運を鞭撻せんと勉むる人々なりしかば、當時勃興し來りし『日々』『朝野』等の諸新聞と相呼應して新文明の扶植に盡したり。不幸にして時の政府が此等新聞雜誌の縱論橫議に堪へずして發布せる新聞條例は、此の雜誌の發達を阻害して八年末遂に廢刊しぬ。同年に學術雜誌『洋々社談』洋々社より發行せられしが、說く所時事論よりも寧ろ史傳語學等の研究に富み、大槪文彥、那珂通世、小中村淸矩等、之に執筆したりき。當時又樋口戴廣の『共存雜誌』中村正直の『同人社文學雜誌』發刊せられ、續いて『扶桑雜誌』『近事評論』『評論新聞』『草莽雜誌』等の政論誌、『頴才新誌』『文明雜誌』『學庭志叢』『花月新誌』『新文詩』等の詩文誌、其の他、家庭、宗教、教育、農業、醫事等百般の專門雜誌、『園々珍聞』の如き滑稽諷刺の雜誌、都鄙共に盛に發刊せられ、新聞紙と相並んで新文明の宣傳に勉めぬ。明治十年末の現在數を見るに、新聞雜誌總計百五十六種、發賣部數一年間三三、二八七、五二九の多きに達せり。

斯くの如きは明治十年以前に於ける泰西思想傳播の大勢なりき。然れども此の滔天の潮勢を見て直ちに當時之が前途を遮る一の抵抗だも無かりきと考ふるは速斷に過ぎたり。天下の事、見來れば常に相反の二要素を含み、百般の現象一として其の反面を有せざるなし。革新の活動は守舊の反動を伴ひ、靑春の進取は老耄の退嬰と相乖く。思潮革新の事、豈抵抗なくして成就すべけんや。所謂新舊思潮は到る所に衝突し、政治の大本より衣食の

末に至るまで、所として此の顯象を見ざるはなし。社會革新家が口を極めて舊弊打破を說くは、是れ的なきに發する矢に非ず。新聞雜誌の疾呼宣傳するは啻に新主義を顯さんとするのみならず、合せて舊主義を破らんとするなり。而も此等の革新運動は總ての妨害を排して直前邁往するなりき。

かくて新文明の物質界を照すこと維新以降今に到るまでこゝに十年、國民の物質欲に對する要求は漸く滿足せられしかば、自然の順序として精神界の缺陷に向つて其の欲求を感ずるに至りぬ。政治、經濟の施設、住居衣食の改良に惟れ日も足らざりし國民は、茲に漸く小康を得しかば、顧みて靈界の新主義を翹望し初めたり。倫理宗教より始めて美術文學に至る迄、革新の曙光漸く東天を染めなしぬ。福澤翁が舊來の儒教道德及び武士道道德の固陋を打破してより泰西の倫理說漸く入り來り、或は自主自疆の精神に富む『西國立志編』『西洋品行論』となり、或は君父に對する義務よりも自己に對する義務を先にせる『勸善訓蒙』『智氏家訓』等となりぬ。宗教に在りては、從來の天主教以外　耶蘇新教俄かに勃興し、特に此の氣運に鞭つて起ちし新島襄は、耶蘇教を以て國民を感化するにあらずんば新文明の眞精神を傳ふる能はずと信じ、八年同志社を京都に建て、耶蘇教的教育の大道場を開きたり。更に他の一方に於ては英、佛、獨の各國語學新興の結果、從來蘭語及び蘭文典とのみ比較せられたりし我が國語は、新たに此等各國語文典と比較して其の得失を論ぜらるゝに至り、後年活潑なる國語問題論爭の端緒を茲に發しぬ。既に文字に關しては漢字全廢說先づ起りて、六年『日々』に新字製造を說く者、漢字全廢の準備として漢字交り文を普通用とすべきを說く者あり。七年『明六雜誌』出づるや、西周卒先して羅馬字採用說を出し、假字說之に對して起り、以て後來羅馬字會、かなのくわい等の基をなせり。續いて文體に關し、漢文乃至耳遠き從來の文章を廢して言文一致體を取るべしといふ說起り、『日々』の福地は其の階段として先づ力めて口語を交へたる平易の文を作るべきを論じぬ。氣運は益進みて今や藝術に及びぬ。五年文部省が墺國博覽會に高橋由一の洋畫を出品せし頃より洋畫の新芽斯墳に萠し、九年工部大學校內に美術學校を置き、洋人を聘し

て繪畫、彫刻、裝飾術等を敎授せしめ、音樂、演劇に關しては、『明六雜誌』等に國樂振興、演劇改良を說く者あり、『日々』の福地亦脚本院本の改良及び芝居見物人の改善を論じ、以て後年音樂振興、演劇改良の運動の先驅をなせり。若し夫れ新文學の發達に至りては精神界活動の中、最非實用的なるものなれば、功利主義を第一とせる明治新文明に遇せらるゝこと最薄く、十年以前に於ける斯界の曙光甚だ微弱なりき。然れども其の間又一道の潛勢後日の盛運を含む者なきに非ず。其の詳細は次章を俟つて述ぶる所あるべし。

精神界に於ける新文明の活動は斯くして漸く其の端緒を開きぬ。此の氣運に乘じて起り此の光景を前驅として進める我が新文學は、果して如何なる者なりしか。未だ其の面影に接せずと雖、今や暗黑の裡一點の光を示したる十年以後の飜譯文學は、卽ち新文學の大光明に到達すべき前提に非ざるか。吾人は將に暗黑の文學界を去らんとす。而も此の暗黑裡何等の傳ふべき文學なきか。吾人をして暫く回顧せしめよ。

既に述べし如く、明治十年以前は文學界の暗黑時代なり。文運地に落ちて新光明未だ起らず、喘々焉として餘息を存する者は、唯憐れむべき舊文學の殘骸なりき。換言すれば純然たる江戸文學の繼承にして、其の明治文學に於ける位置は、恰も殘燈夜の暗黑を守りし者漸次曉の新光に沒し去るが如き者なれば、嚴正なる意義に於て、或は明治文學と稱し難かるべし。然れども文學は固と時勢の反映人情の鏡なれば、當代人文の狀態は、寫して此等繼承文學の中に存することを言を俟たず。明治初年の時勢人情、一部たりとも寫し出されたりとすれば、假令其の形式手法舊文學の殘骸なりと雖、其の技巧拙劣內容貧少なりと雖、はた其の光焰甚微茫たりと雖、明治文學を叙するに方り、必しも棄つべきに非ず。況んや文學の發達は一朝一夕の故に非ず、新文學の樹立は常に舊文學の土壤の上にせられざるべからざるをや。

第三節　前代繼承の文學

江戸文學の繁榮は本邦文學史に於ける空前の壯觀なり。其の發達の著大、其の種類の富贍、實に百世の瞻仰を値する者ありき。然れども大御所の榮華一度去つて幕府衰運に向ひ、邊境警を傳へて世漸く亂れんとするに方りては、文學の發展復往時の如くならず。和歌は絶代の巨匠景樹逝いてより、其の門流八田知紀、熊谷直好等之を繼ぐと雖、技倆固より之に接踵すべくもあらず。唯從來の惰力によりて桂園一派を率ゐるのみ。發句は天明の俳傑去つてより、蓼太の俗氣墮落の端を開き、天保の宗匠梅室、蒼虬、鳳朗に至りて其の極に達し、崇拜者模倣者全國に普きに係はらず、詩趣蕩然として地を拂ふ。淨瑠璃は精華、出雲、半二に落ちて文耕堂以後注目すべきなく、脚本には新七、二三治、治助、如樂在りと雖、五瓶、南北の餘唾に過ぎず。小説に至りては天才馬琴逝いてより片々たる戯作者の世となり、春水、一九の末輩、鄙俚なる人情本、淺薄なる滑稽本を作りて偏に先人の殘肴に甘んず。其の他俳文、狂歌、狂句等、一として散り過ぎの花、あはれなる衰へを示さゞるなく、百般の文學悉く模倣醜案の弊に陷り、量に於て著しき衰退を見ずと雖、質に於ては日に月に俗惡の度を增し、其の形勢相傳へて明治の初頭に及べり。

維新以來十年頃に至る我が文壇を支配せる文學者は、實に上述の如き文學の繼承者なりき。啻に十年頃までのみならず、種類によりては二十年前後、文學思想革新の運動起るに至るまで、依然として舊態を改めざる者あり。然れども此等繼承文學は、何れも明治新文學の基礎をなす者にして、一代の氣運を捲き起したる明治の新文學者は、多くは一度繼承文學を味ひ來りし者なるを以て、新文學に入るに先だち、暫く前代繼承の文學界を觀察せん。

當代の和歌壇は景樹の末流、卽ち桂園派の獨占する所なりき。景樹天禀の歌才を以て京師に蟠踞し、香川家に入りて勢力を堂上に伸ぶるや、從來歌學の宗たりし冷泉、二條の諸家を壓倒して斯界の主權を握りしかば、桂園の歌風遂に當代瞻仰の中心となりにき。曩きに元祿の世、海内の文章布衣に落ちて歌道亦地下の手に歸し、縣居翁起りて主權一度江戸に移りしが、

茲に至りて歌壇の中心復び京都に返りぬ。明治の初め都を東京に遷さるゝに方り、此の形勢宮庭と共に東遷し、八田知紀の門に出でし高崎正風御歌所長となるに及びて、桂園の流風復動かすべからざるに至りぬ。御歌所は明治年間唯一の帝室文學の府にして、寄人、參候等當代歌人の中より任命せられ、毎月一回宮中歌御會の行事に從ふ。正月の御會は之を歌御會始と稱し、明治二年以來古例を復活して之を行ひ、五年より百官有司をして詠進せしめ、七年より一般臣民にも詠進せしむ。而して此の派の詠歌は概ね景樹の末流を汲める者なれば、思想狹隘、聲調纖弱、到底新時代の文學たる能はざる者なり。斯くて二十八九年文運興隆期に方り、所謂新派和歌が、地下より起りて在來の風調を一新し、歌壇の中心地下に移るに至るまで、歌界は大口鯛二、小出燦等の製作によりて代表せられ、舊思想舊形式の徒に繰返さるゝを見るのみなりき。

御歌所一派が當時歌界の代表者たると同じ意義に於て、俳界の代表者は老鼠堂永機と春秋庵幹雄となり。天保以來發句の俗惡、文學的作品たる品格を失ひ、遂には無學の閑人が道樂の一種として、碁將棋と同一視せられ、點取の方法變じては賭博に近き一種の技術となり、之を敎ふる宗匠なる者は、所謂點料を以て衣食する營業となり了りぬ。永機、幹雄等は卽ち當時宗匠商賣を營める者の領袖に外ならず。永機は其角の傳統を引ける者なれども、作る所多く瀟洒の趣あらん事を勉め、其の宗徒は一般無學の平民より最上流の社會に至るまで所有階級に存し、其の勢力地方に於てよりも寧ろ東京に於て大なり。幹雄は白雄の後にして、作る處多くは豪放ならん事を求め、宗徒は全國の平民社會に普く、其の勢力は寧ろ地方に於て大なり。以上二人の外、尙其角堂機一（永機門）、江南居松江（幹雄門）、雪中庵雀志、京都の花の本聽秋等、各、多少の勢力あり。然れども俳諧の精神を沒了して徒に殘骸を抱くに至つては、何れ劣る所なく、斯界革新は後來二十五六年の頃に於ける新派の運動に俟たざるべからざりき。

漢詩、漢文に就きては多く語るべき者なし。唯舊時代の餘流、漢詩人、漢文家の存する者少からず。二十四五年頃までは强弩の末勢、尙宿儒其の

人に乏しからざりき。詩人には小野湖山、岡本黄石、向山黄村、大沼枕山、森春濤、鱸松塘等あり。漢文家には川田甕江、重野成齋、島田重禮、安井息軒、信夫恕軒等あり。明治五六年の交、新聞雜誌競ひ起るや、彼等の詩文往々採錄せられ、春濤の如きは『新文詩』と稱する雜誌を發刊するに至り、次いで成島柳北『花月新誌』を出し、服部誠一『東京新誌』を出して盛に戲詩戲文を作り、且服部の『東京新繁昌記』を著しゝ頃、漢文の繁昌記頻に行はれたり。然れども漢詩、漢文は到底新時代の文學たる資格なき者なれば、此等作家百年の後は畢竟永久文壇を辭し去るべき運命を荷ふ者なり。

和文は春海、千蔭の擬古文ありて以來、典雅流麗の筆に接せざる事茲に久しく、維新當時の國學者其の人に乏しからざりしも、遂に一の文章家を見ざりき。明治初年の散文家として擧ぐべき者を求むれば夫れ新聞文學者か。『日々』の櫻痴『朝野』の柳北の二人は當代記者の冠冕にして、前者は清新瑰麗を以て勝り、後者は奇拔輕妙を以て稱せらる。其の他岡本武雄、藤田鳴鶴、矢野龍溪等皆十年前後の記者として盛名ありき。而して彼等の散文は多く漢文の素養に出で、中には純然たる漢文直譯體なる者あり。此の點に於ては此等も亦繼承の文學たるを免れず。されど其の思想は多少新潮に浴し、後來明治の普通文の胚胎する所となりにき。

繼承の文學中最注意すべきは蓋し戲作者流の作ならん。此等は其の種類、其の作意、其の文體、共に文化文政以後の作者の餘流を汲めること論を俟たず。先づ全體に通ずる著しき風潮は、いふまでもなく勸善懲惡の主義にして、馬琴一度此の大旆を擁してより、勸懲の一語は端なく當時の片々たる戲作を飾る美名となり、文學の本質の何たるを解せざる彼等無學の戲作者輩が、自己の作物を無用有害なりと非難せらるゝを忌み、且つ曩に寛政、天保の兩度、當局の爲政者が壞風亂俗の罪を以て戲作者を罰せし事件に鑒み、又維新後敎部省の訓令に考へ、爭うて勸懲の美名を偸み、自ら僭して童蒙婦女に對する敎訓を寓すと稱し、以て鄙俚猥雜、讀者に媚ぶるを以て專らとせる拙作を被ひ飾らんとせり。次に其の結構は目先の變化を以て第

一條件となし、脚色の統一人物の性格を藐視して、支離滅裂、一卷の趣向の尋ぬべき無き者、滔々皆然り。次に又作中の人物は、概ね善惡二種の類型にして、善人は所有善德の權化、惡人は所有惡德の化身たるが如く、其の英雄或は勇士、往々非凡の智謀力量を有し、多くは人間界を超絶す。而して此等種々の戯作を大體に就きて分類すれば、馬琴に出でたる讀本、春水に出でたる人情本、種彦に出でたる草双紙、一九に出でたる滑稽本、及び鶴屋南北等に出でたる脚本の五種なり。其の文體は各、其の宗とする作者の舊套を襲へり。

維新の初、戯作の發兌は舊慣により、毎年正月と盆との二期に於てせり。當時の出版物には維新以前より發行し來れる長編の續き物も少からず、兵馬倥偬の間、微々たるながらも戯作の出版を絶たざりき。先づ讀本、草双紙の類にては、二世種彦の『白縫物語』『八犬傳犬廼草子』、萬亭應賀の『釋迦八相倭文庫』、二世春水の『北雪美談時代加賀實』『雜談雨夜之質庫』、種彦の『室町源氏胡蝶卷』、春水の『新編九尾傳』、應賀の『蟲類大議論』『諸藝畑水練』『近世阿幾禮幕』、岳亭知足軒合作『俊傑神稻水滸傳』等あり。其の他同じ頃の作者には鶴亭秀賀、柳水亭種清、山々亭有人（條野傳平）梅亭金鷲、假名垣魯文等あり。次に脚本にては三世如皐、三世如樂歿して他の座附作者皆言ふに足らず、二世河竹新七、卽ち古河默阿彌獨り芝居作者の壇場を占めたり。然れども之等の作は畢竟前代の遺物にして、所謂樣に依りて胡蘆を畫く者のみ。新時代に接觸する何等の交渉を有するに非ず。唯夫れ魯文と默阿彌とは、繼承作者の身を以て當代の人氣を集めたりし者なれば、彼等二人を擧げて繼承時代戯作者の代表者たらしめ、少しく之に就いて當時の作風を窺はん。

假名垣魯文は江戸の人、少にして花笠魯介（文京）の門に入り、『政談青砥碑』を處女作として數多の戯作あり、萬延元年『滑稽富士詣』を出すに及びて文名世に布き、年、明治に入るに及び『西洋膝栗毛』『安愚樂鍋』『胡瓜遣』等を續出して盛名を馳せたり。

『西洋膝栗毛』は、其の名の示す如く、一九の名作に倣ひて西洋旅行の滑

稽を描きし者にして、全部十五編、明治三年より五年に亙りて出版せられ、『胡瓜遺』は福澤翁の『窮理圖解』を飜案して、所謂天地の道理を茶にした る滑稽物なり。三年秋出づ。『安愚樂鍋』は半開化の俗衆が牛屋に鍋を圍んで喋々論議する趣向にて、所謂當世の穿ちなり、四年暮出づ。此の三者は魯文をして明治初年の戯作界に嶄然頭角を拔かしめし滑稽本にして、他の作者等が、文章も趣向も材料も共に舊套を脱する能はざるに際し、在來の手法を以て新時代の材料を理し、以て時勢を諷する筆致の輕妙なるは、暗黑なる文學界に於て聊か珍とするに足る。勿論應賀蕾『新文鬼談』『日本女教師』『異形異物各覽會』等、材を維新後に取りたる短篇をものせりと雖、固より魯文に比すべきに非ず。彼れの作には尙『百貨物產西洋器械』『太洋新話』『世界都路』等あり。しかも其の中最世に持囃されて、明治の一九、三馬と過稱せらるゝに至りし者は、言ふまでもなく『西洋膝栗毛』なり。

此の作の脚色は、東京神田の蕩兒彌次郎兵衞、北八の二人が、英國龍動に渡航せんとする横濱の豪商大腹屋に伴はれて飛脚船に乘り込み、以來海上港泊に於て所有失敗滑稽を盡しつゝ英國へ渡る趣を綴り、所謂「此節の西洋ばやりへつけこんで目先の變つた趣向」を凝しゝ者にして、當時魯文世潮につれて所謂福澤本を讀み、西洋旅行の大體を知りし上、岡文紀の飜譯書などを見、尙友人富田砂燕が巴里博覽會見物の實話を聞き、此等を種として編み出せるなり。げに彼が小說家としての技倆は暫く之を措くも、其の機智の縱横なる、着筆の奇警なる、時勢粧の作者として巧妙を極めたりといふべし。吾人は之を讀んで新舊思潮の至る所に衝突するを見、而も其の衝突や皮相に止まり淺薄を極めたる時世の適切に描かれたるを感じぬ。所謂新潮流は「方今開化一時に進み、余が輩僥倖に學ばざる子曰の迂遠を去り、經驗窮理の洋風に傾き、市街の兒童等まで、芥子坊主の支那頭を殘截の歐羅巴流に一變し、孔氏の遺書はべケにして、英、孛、佛の横文エビシ、四百餘州は何のその、萬國世界五大洲、天地の理を知る開端に至るは、めでたき御代に新玉の春を待ち得たる心地になん。而して廢藩舊知事の公達子も、無僕獨歩に世間を見知り、歸農の扶持は飛鳥川、水に流して商法

開業、父母在せども遠く遊び、艦砲一發三千里、旦に道を聽くとも夕に死するを可なりとせず。牛肉（ウシ）を食しビイルを飲み、體を壯健にして壽を保ち、利を得て國を富ますを以て今日の報恩とす」（膝栗毛十一編序）なる皮相文明の潮流なり。此の新潮に浴せし半可の西洋通が、丁髷の舊弊頑固を嘲り、因循姑息を罵り、一切の舊慣舊俗を嗤笑せし情狀、又は俄かに絢爛たる洋風の事物に逢着せる一般俗衆が、驚愕し誤解し歎服し眩倒せし事態、はた淺薄なる滑稽鄙俚なる諧謔に心を遺りし有樣、髣髴として思ひ浮べらる。

其の他彌次、北八が頻りに生咬りの漢語を使ひ、神道を辨じ、窮理を云々するは皆是れ時代の反映にして、特に極力英國の富强を說き、旅先を英京に置き、通事の言語を英語に取りしなど、英國心醉の事情を表して餘あり。此の作に於て人物の性格一篇の理想などを探らんは愚の極なれども、諷刺の意は明かに認めらる。蓋し魯文自ら文明開化の當世人を以て任じ、所謂舊弊を嘲笑して開明を謳歌せんとせる者の如し。然れども其の根本性質を擧げ來れば、依然たる舊型にして、作者の弄する滑稽や無識に出で、痴態に出で、酒色に出で、其の趣淺薄にして變化なく、其の旨陋卑にして理想なく、而も之を叙するに地口語呂等、所有言語上の遊戲を盡せる對話を以てす。正に是れ一九三馬の殘肴冷杯にして、江戸作者の末輩の得意とする手法に非ずや。げに此の作は啻に魯文が戲作の代表たるのみならず、明治初年の繼承文學に於ける好箇の代表なりき。

默阿彌は五代目鶴屋南北の門人にして、通稱を吉村新七といひ、俳名を其水といふ。芝居作者となりて河竹新七二世となり、後改めて古河默阿彌と稱す。好んで世話物をものし、俳優市川小團次と結びて舊幕時代下層社會の世態人情を脚色し、夙に才名を江湖に馳せたり。而して當時彼が作りし世話物は、概ね盜俠を主題とせるを以て世に白浪作者の目ありき。彼が一代の傑作として賞贊の聲嘖々たる『村井長庵巧破傘（タクミノヤレカサ）』の如き、卽ち當時の作風を代表する者といふべし。此の戲曲は又『勸善懲惡覗機關（ノゾキカラクリ）』と稱し、八幕十一場より成り、文久二年小團次等が守田座に興行せしを始として、年、明治に入りても尙盛に行はれたり。麴町の町醫村井長庵が其の妹婿、

百姓重兵衛を殺害して其の娘を吉原に賣りし身の代金を奪ひ、而も其の罪を浪人藤掛に嫁して之を死せしめしを始め、或は人をして妹を暗殺せしめ、或は人を欺きて財を奪ふ等、惡行至らざる所なく、而も巧に世の耳目を晦ましゝが、天網疎にして漏さず、惡事露顯して判庭に伏罪し、遂に惡は亡び善は榮え、目出たく收まるを以て一篇の筋となす。結構布置例によりて巧妙、舞臺面の變化多き、勸懲旨意の明瞭なる等、舊劇の長所概ね之に具はる。然れども凡近なる勸懲の外、何物をも吾人に敎ふるなき、事件の發展常に偶然的關係に出づる、人殺其の他慘酷無道の所行を舞臺の上に敢へてする等、舊劇の短所亦概ね之を備ふ。斯くの如きは獨り此の篇に止るに非ず、白浪作者時代の彼が世話物皆此の型に出づ。而して彼れの勸懲主義は爾來益甚しく、惡漢の主人公たる事漸く減じ、よし盜賊を以て主人公となすとも、必ず改心の一條を加へ、以て諷誡の意を寓し、且其の各部分に於ける寫實的分子漸く加はり、超自然の事實成るべく避けられ、同時に江戸時代を寫せる世話物以外、新たに明治の世話物を創作せり。例へば十二年の作なる『霜夜鐘十字辻筮』『木間星箱根鹿笛』、十四年の『島衛月白浪』、十五年の『僞甲當世簪』『戀暗鵜飼燎』十七年の『滿二十年息子鑑』、十八年の『水天宮利生深川』、十九年の『西洋噺日本寫繪』等の如き、皆維新以後の人物事件を材料とせる者にして、以て其の頃に於ける默阿彌の作風を窺ふに足る。

明治十八年前後までの默阿彌作の戲曲は、總數五十種に上るべく、二十年間東京梨園に於ける作者の隨一として最勢力あり。得意の世話物の外、時代物にも筆を染め、其の熟練なる舞臺上の知識と、豐富なる結構布置の才と、老巧なる人情描寫の筆力とを以て永く斯壇の光明たりき。蓋し默阿彌は舊劇を刷新して掉尾の活動をなし、以て將に起らんとする新劇に移る一大段落の上に立てる斯壇の殿將として、長く傳へらるべきなり。

當時の劇場作者は尙、勘彌、彦作、大阪の能進等二三知名の者なきに非ざりしも、固より以て默阿彌に比ぶべきに非ず。然れども舊派の殿將は畢竟舊派の殿將に過ぎず。其の作は以て舊知識の觀衆を敎ふるに足るべきも、

以て新時代の新人物の滿足を買ふに足らず。舞臺效果に關する知識洵に企及すべからざる所あるも、人情を描いて未だ性情劇の片影を庶幾すべからざるなり。彼れの世話物は二十五年春陽堂の發行にかゝる『狂言百種』に收めらる。不幸、興行上の故障により中途續刊を廢し、八卷十一種を出すに止れり。

其の他舊文學の中には尙講談の一種あり。其の末路を代表する名人は、三遊亭圓朝にして『怪談牡丹燈籠』等最世に持囃されたり。固より些の創意なしと雖、亦通俗文學として繼承時代の文學たるに足るべし。

繼承時代の小說脚本の粹は魯文、默阿彌の二人に盡く。然れども社會の進運は一日も止らず。文學の暗黑時代はしかく長へなるべからず。戲作の風潮も十年前後に及びては漸く變調を來さんとす。當時魯文の滑稽物に對し、實錄物を作りて一方に勢力ありし松村春輔の作の如きは、材を王政維新及び其の際に於ける勤王佐幕の名士に取りしのみにて、守田座新富座の演劇に間〻維新事件を仕組めると同じく、畢竟片々たる際物に過ぎずと雖、作中の人物は、大に前代の實錄物乃至一般時代物の人物と其の性質を異にし、英雄豪傑といふとも、超凡の智勇辯力を備へたる半神的怪物的の者ならずして、普通人間らしき偉人勇士として現はれ、漸々寫實的傾向を取るに至れり。八九年頃に出でし『復古夢物語』『近世櫻田紀聞』及び『春雨文庫』等は、或は大老暗殺事件、或は彰義隊、會津戰爭等を材料とし、總べて新時代の歷史小說の先驅たるべき者なり。同時に諷刺滑稽の側に於ても魯文に一歩を進め、稍深き意義を有するに至りき。服部誠一の『東京新繁昌記』（七年乃至九年發行）及び之に類する幾多の繁昌記、同人の『東京新誌』（九年創刊）成島柳北の『花月新誌』（十年創刊）野村文夫の『園々珍聞』（同）等の如きは卽ち此の例にして、此等に現はれたる戲文は、勿論小說に非ざれども、單なる滑稽諷刺の文學として之を魯文の作に比ぶる時は、魯文は開化と舊弊との不調和を描き、以て舊弊を嗤笑せる趣ありしが、此等に至りては、頑固因循を諷刺するが如きは敢て奇ならずなり行き、却て開化を以て自任せる社會の一部に幾多の滑稽痴態を發見し、之を訐き來り

て皮相文明に眩惑せる社會を諷したりき。魯文の諷刺に比し幾分の深刻を加へたりといふべし。

此の時に方りて、新聞紙の勃興するあり、記者の需要著しく增加せしかば、文筆の士爭うて之に赴き、勢極まる所戯作者の吸收となり、爾來諸新聞戯作を載する者多かりき。之を續き物といふ。蓋し草双紙讀本等に對する稱呼なり。明治六年魯文先づ『横濱毎日』に入り、八年高畠藍泉（三世種彦）、九年染崎延房（二世春水）、相次いで『平假名繪入』に赴き、十年梅亭金鶏『團々』に入り、又條野傳平は五年『日々』を起し、魯文は八年『毎日』を去りて『假名讀』を發刊し、各戯筆を紙上に揮ひしが、就中延房の續き物、魯文の滑稽物、最婦幼の人氣を集めたり。之より草双紙讀本等の發兌漸く衰滅し、十二三年頃に至るまで、各新聞の續き物は繼承戯作の殿として立ち、各種の繪入新聞起りて皆之を載せたり。作者には上述數人の外、古川魁蕾、伊東專藏、須藤南翠、渡邊義方等あり、概ね人情本の系統を引ける物語風の小說をものしき。

維新草創の際、文藝の暗黑時代に於ける文學は大略上述の如し。一代の民衆が新舊二潮の間に醞弄せられて、洋服に下駄、丁髷に洋傘、ズボンマンテルに帶刀の奇態を演じつゝありし際なれば、其の文學趣味の低劣俗惡なる事言を俟たず。作物の出づる事必しも少しとなさゞれども、斯かる趣味によりて養はれたる文學の斯壇に於ける地位や憐むに堪へたり。魯文の滑稽物を謳歌せる讀書界の淺薄輕浮にして鄙俚猥雜、絶えて餘裕なく趣味なき事察するに餘あり。かゝる作物によりて代表せられたる當時の文學の陳腐俗惡なる事亦思ふべし。

時は移りぬ。明治十年西南の亂あり。新政以來明治政府を喜ばず、一新の制度を便とせず、反對黨不平派相結びて反亂を起す者所在相次ぎしが、遂に凝りて西南の大謀反となりにき。此は總べての內亂の中最大最終の者にして、政治上の舊思想は其の平定と共に永久に掃蕩せられたり。西南役の文明史上に於ける意義は、此の戰爭が政治上の新舊思想最後の衝突にして、之を契點として新思想の全く舊思想を壓倒し去りしに在り。爾來此の

潮流は延いて思想界及び文藝界に入り、舊時代の文學思想漸く謝して、明治の新文學思想漸く之に代らんとす。而して此の文學思想革新に與りて最力ありし者は、卽ち十年以後に於ける泰西文學の飜譯、及び之に伴ふ西洋文學思想の傳來なりき。

第二章　新文學の先驅

第一節　飜譯文學

明治十二年頃に其の萠芽を發せし飜譯文學の勃興は、當時の政治思想と離るべからざる關係を有する者にして、此等文學の主たる者は、民權說の流布と共に接踵輩出したる民間政論家が、自由を唱へ代議政を說くに際し、此の思想の由て來る泰西政治界の狀態、及び彼の地政論家在野志士の生活を叙せる小說傳記等を讀んで多大の興味を感じ、直ちに其の文才を驅りて之を飜譯したる歷史的政治的小說なりき。されば此の時代の飜譯文學を說くに方りては、先づ此の民權思想の興起を述べ、併せて其の結果として生ぜる革命小說を記さゞるべからず。

西南の叛亂平らぎ、政治界の舊思想屏息するや、時勢の進運は駸々として前往し、民間の政治思想は一躍して從來新思想の中心たりし廟堂有司を

超え、極端なる民權自由說となりて現はれ出でしかば、政治界の新舊思想の衝突は茲に一進化をなしたりき。抑も此の思想の勃興は、本邦思想界空前の新現象にして、其の由て來る所は泰西政治思想、就中佛國十八世紀の思想家ルーソー、ボルテール、モンテスキュー等の政治思想に在り。特にルーソーの『民約論』は新思想を抱ける政治家及び政論家に取りて天賚の福音の如く聞きなされ、遂に十五年其の首唱者の一人たる中江兆民居士の手に譯出せられて天下に布き、一世の風潮翕然として之に赴きぬ。是に於てか曩に英國の功利思想を迎へて社會の實利實益に心身を傾倒したる國民は、茲に又新に佛國の自由思想を迎へて政體革新の根本的大問題に驀進しぬ。彼等の說く所全く民約論の主旨に出で、本邦立國の大本、民性の特質を究めず、國家の歷史當時の狀勢を悉くすことなく、ひたすら彼の國に行はれし所を以て之を我邦に施さんとす。其の單純淺薄なる、寧ろ彼の國政體の美に眩惑せる好奇の性情といふべき者にして、正に明治初年に於ける物質的文明の盲目的吸收に對此すべき無謀の盲動なりき。然れども在野志士の思想が靡然として之に赴き、在朝の有志冠を挂けて尙其の主張を貫徹せんと勉めたりし所以の者は、德川幕府が殆ど人權を無視せる極端なる貴族政治の下に三百年の抑壓を忍び來りし反動として、國民の抂屈一時に伸びんとせる者、亦與りて大に力ありしなるべし。彼等が政府の失行を議し、言論の自由を說くや、筆に舌に、縱橫辯難、危激を極めたりしかば、柳北、鐵腸等を始として律に觸れて禁獄せらるゝ者前後相繼げり。十三年に至り、此の風潮全國に亙りて國會開設の請願各地に起れり。

文學は時勢の反映なり。かゝる時勢に際し、自由主義の革命小說の出でしは自然の數なり。十五六年の頃、政界の風雲頗る嶮しきに方り、『繪入自由』『繪入朝野』『東洋自由』『自由の燈』等の新聞雜誌を舞臺として現はれたる宮崎夢柳、小室案外堂等の小說は、此の氣運を代表すべき者にして、『鬼啾々』『夢戀々』『自由の凱歌』『西洋血潮の荒波』等は、佛國革命又は露國虛無黨の反亂等を材とせる西洋小說の飜案、抄譯、若くは演義に屬し、其の他新作種々あれども、多くは自由民權に關する寓意小說なりき。然り、唯

此の主義に基ける寓意あるに過ぎず。泰西の文學思潮に觸れて新氣運を開くに至りては未だし。故に其の文體趣向依然として草双紙の範圍を脱せず、文學としての價値亦從うて高からざるなり。

斯かる間に明治新文學の端緒となるべき飜譯文學は、同じく時勢の反映として他の一方に現はれたり。政論沸騰してより國民多く泰西政治界の狀態を想望し、民權自由の理想が普く行はるゝ泰西諸國、就中英佛に於ける政治家の生活を欽羨し、卽ち之を描ける政治小說及び歷史小說を耽讀して、其の渴望を醫しぬ。特に當時の政論家は概ね新聞記者にして、文筆の才あるが上に多少外國語の知識ある者なりしかば、論議奔走の傍、會、文學に慰藉を求めんとするや、本邦在來の文學乃至當時の繼承作者の新作の如きは、到底新敎育を受けて多少高尙となりし文學的嗜好を滿足する能はず。相率ゐてリットン、ヂスレリー等英國近代の歷史的政治的小說に赴き、遂に進んで之が飜譯を試むるに至れり。されば當時の飜譯文學は、文學者が文學として飜譯せし者にあらず、宛然政論家の餘業たるの觀あり。然れども、一般國民をして之によりて英國文學の片影を覗ふを得しめ、以て後來文學思潮革新の因緣となり、兼ねて異邦の文學を吸收すべき端緒を開きしが如き歷史的意義決して少からずとなす。今之を述ぶるに方り、少しく泰西文學輸入の沿革を尋ねん。

泰西思想の傳來は夙く交通開始の古に起りしも、其の純文學に觸接して影響の我文學に現はれしは、萬治二年の出版なる『伊曾保物語』を以て嚆矢となす。いふまでもなく『イソップ寓語』の飜譯にして、譯者傳らずと雖、御伽草子の系統を引ける假名草子の流の作なり。然れども、此の物語の影響は、淺井了意、山岡元隣等が敎訓物に少しく見ゆるのみにして、甚だ著しからず。其の後繼者として入來る西洋文學亦不幸にして存せず。『伊曾保物語』は流星の如く現はれて流星の如く隱れぬ。爾來南蠻紅毛の書、入來る者概ね實學に關し、文學の方面甚だ僅少なりしが如く、平賀源內の作に見えたる二三洋語の如きも亦實學より來る。唯彼の遊谷子の『和莊兵衞』之より出でし馬琴の『夢想兵衞』の着想、及び此の二者の出所として特筆

すべき鳩溪の『志道軒傳』巡國の條に至りては、莊子の寓言に擬し、在來の島巡りの趣向に基きしこと勿論なりと雖、『ガリバー旅行記』に其の骨を得たる事も亦殆ど否むべからず。維新の當時、開成所は洋學の淵叢たりしも、授くる所は未だ文學に及ばず。此の間强ひて文學を學ぶ者ありきとすれば、其は語學の材料として之を用ひしに過ぎず。然れども明治年代泰西文學の萠芽は、畢竟語學研究の副產物にして、渡邊溫の譯にかゝる『通俗伊蘇普物語』（六年—八年）の如きは亦斯かる因緣に成りしなるべし。外國文學の飜譯が常に『イソップ』を以て始まるは、此の物語の平明にして童蒙に入り易く、古今東西に通ずべき寓話なるに因るべしと雖、又是れ草創の際、粗雜なる讀者の頭腦が未だ風俗習慣の差によりて、興味に厚薄の差あるべき他國の小說詩歌等を味ふに足らざりしに由らずんばあらず。斯かる間に國民の讀書力漸く進み、敎養ある人士は文學を樂む餘裕を得、而も讀書眼の漸く高きや、在來の小說戲作に比べて西洋文學の優秀なるを認め、耽讀の餘、之を譯出して西洋心醉の高潮に鞭ちたりき。乃ち知る、語學研究の材料としてのみ文學を讀むこと既に止みて、文學其の物を樂む健全なる讀者の生せし事を。明治十一年に出でたる『花柳春話』は、實に其の陣頭に立ちし飜譯小說なりき。

『花柳春話』は織田純一郎がロード、リットンの『アーネスト、マルトラバース』を飜譯せし者にて、一篇漢文直譯體の文章、卽ち當時新聞の論說に行はれし文體を以て成る。之を今日より見れば、思想の人を動かす者あるに非ず、譯文の巧妙なる者あるに非ず、唯其の珍しきが故に當時多大の歡迎を以て社會に受取られ、世評一時嘖々たりき。げに此の小說はリットンの作物の本邦文壇に紹介せられし濫觴にして、兼ねて明治文壇に於ける飜譯小說の嚆矢なり。此の點より見れば明かに新小說の先驅にして、一步進めて言へば一般新文學の先驅と稱すべし。要するに『花柳春話』は文學としての價値よりも史上の位地を以て勝れる者とす。

爾來飜譯小說連りに行はれぬ。關直彥の『春鶯囀』藤田鳴鶴の『繫思談』牛山鶴堂の『梅蕾餘黨』尾崎學堂の『經世偉勳』服部誠一の『二十世紀』

井上勤の『六萬英里海底旅行』『月世界旅行』『狐の裁判』坪内雄藏の『慨世士傳』等は其の最著名なる者にして、就中『繫思談』『慨世士傳』等はリットンの原作、『春鶯囀』はヂスレリーの原作を取り、皆歴史小説を選べり。又『海底旅行』『月世界旅行』等は所謂科學小説にして、學術上の事實を小説に寓せる者、小説としての價値は問はずして知るべし。飜譯の文體は概ね『花柳春話』に類するも、十八九年頃の作に至りて漸く和ざそめぬ。然れども中には往々修辭に於て缺けたる者あり。文學としての形式を失へり。井上の譯書の如きは、所謂直譯に過ぎざりき。

翻譯小説の興隆は疑もなく新思潮の賚賜なりき。然れども、當時の新思潮は尚粗笨生硬にして十分に消化せられず。入る所、皮相に止まりて深く内部生命に及ぶこと能はず。故に其の讀む所解する所は、概ね歴史小説、政治小説、科學小説等、多少實際的傾向を有する者の中極めて平易なる者に限られ、同種類の者と雖、思想界の深き消息に觸るゝは、未だ其の趣味を感受するに至らざりき。況や人情世態の微妙なる描寫を試み、心的生活の精細なる解剖を試みたる者に於てをや、當時飜譯せられたる西洋小説が、悉く比較的單純なる歴史小説等なりしは、卽ち主として之に由る。加之、江戸時代傳來の傳奇的小説に慣れたる眼は、先づ其の類例を歴史小説等に求め、他に先だちて一度之に就かんとする傾向あり。會〻以て此の種の小説の持囃さるゝを致せり。

此の時代の飜譯小説は主としてリットンの原作を取りしが、爾來二十年前後に亙り、英譯より重譯せられたるユーゴー、ヲーレル等あり、遂に末松青萍の『谷間の姫百合』に至る。此の書はベルサ・クレーの『ドラ・ソルン』を譯せる者にて、二十一年の版行にかゝり、政論文學者の筆に成りし飜譯小説の殿をなせり。飜譯小説も此の頃に至りては既に寫實的の者を生じ、此の作の如き、現に然りと雖、全體の風趣より論ずれば、尚之を次期の小説家の作品と區別すべきなり。

飜譯文學は、小説の外、尚院本と詩歌とあり。先づ劇には、十七年坪内逍遙遊人（雄藏）のセークスピヤを譯せる『該撒奇談』あり。詩には十五

年外山丶山等のテニソン、カムベル、グレー、ロングフェロー等を飜譯せる『新體詩抄』あり。然れども是等は皆後章、更に說くべき機會あるを以て、茲には唯其の名を擧ぐるに止め、顧みて飜譯文學を通觀するに、曩に小說に就て述べたりし諸件、多くは詩歌に附いても言はるべく、概して思想淺薄文章粗笨の誹りを免れず。且當時學習せし外國語は主として英語なりしを以て、飜譯は皆英米の原作若しくは英譯の諸國文學なりき。

第二節　政治小說

飜譯小說は淺薄粗笨なりき。然れども在來の戲作に比すれば尙幾分の淸新と深遠とあり。文壇之を味ひては、復彼の卑野なる戲作を顧みんとはせず。加ふるに、哲學、科學漸く開けて思想界の深さと廣さと愈其の度を增し、語學研究益進みて泰西文學の知識愈民間に弘布せしかば、曩きに西洋小說を耽讀し飜譯したる政論文學者の輩、進んで筆を創作に着け、嘗て彼等が飜譯せし原作の作家が爲しゝ所の者を以て、直に之を身に行はんとせり。故に其の創作は言ふまでもなく政治小說若しくは歷史的政治小說なり。要するに飜譯小說と政治小說とは、其の發達の原因を同うする二樣の結果なりといふべし。

明治十七年、『報知』社の政論家藤田鳴鶴作る所の『文明東漸史』は、恐らく此の種の創作の嚆矢なるべし。筆を米艦來航に起して泰西文明の極東帝國に傳はりし始末を叙し、貫くに高野長英、渡邊華山の傳記を以てし、交ふるに幾多義人烈士の美談を以てしたる者にして、或は史傳と見るべく、或は文明史論とも見るべきも、又一個の歷史的政治小說と見らるべし。文章は例の如く漢文直譯體なり。此の書出でてより政治小說の創作甚だ多かりしが、就中柴東海散士の『佳人の奇遇』菊亭香水の『世路日記』矢野龍溪の『經國美談』、末廣鐵腸の『雪中梅』『花間鶯』、須藤南翠の『綠簑談』『新粧の佳人』等最有名なり。『佳人の奇遇』と『經國美談』とは、共に『文明東漸史』と同じく歷史的政治小說にして、而も一層史傳に遠くして小說に近く、全然政治小說の部に屬すべき者、『雪中梅』『新粧の佳人』等に至りては、

純空想の政治小說なり。

『佳人の奇遇』は、世界を舞臺として近代歷史上の事件を網羅し、亡國の辛酸を嘗めたる國民に滿腔の同情を表して其の心事を描出せる者にて、維新の際、亡國の悲運を見たりし會津の遺臣東海散士が、東西に歷遊して到る處亡國の跡を弔ひ、遺民の志士に交り、北米合衆國の獨立と自由と隆盛とを目にして今昔の感に堪へず、乃ち無量の感慨を吐露して他年の報復を計るに至る顚末を叙するを以て大體の脚色となす。主人公は勿論東海の遊子にして、配するに愛蘭の一貴女幽蘭女史を以てし、之を中心として明國、西班牙、波蘭、匈牙利、土耳古、埃及等、普く亡國の志士仁人を網羅せり。文章は亦漢文直譯體を取る。次に『經國美談』は詳くは『齊武名士』の割書を冠し、往古希臘の各邦併び立て覇を爭ひし時、齊武（セーベ）の名士エパミノンダスが、同ペロピダスと協力して一時國威の全盛を致せし史上の美談を取り、演義敷延して一篇の小說に仕組める者なり。文章は前者に比すれば一脈古文の趣を交へ、馬琴の讀本等の體に倣ひて流暢和易の氣あり。挿入せる歌詞の如きは七五調の和文にてものせり。此の二書は當時の讀書界、特に青年の間に多大の讃美を以て迎へられ、中にも後者は明治年間文學上の著作中最廣く讀まれし者の一にして、作中の主人公は一部青年政客の理想的人物とせられき。

『雪中梅』と『花間鶯』とは、上述二者の傳奇的なるに比すれば、遙に寫實的分子に富み、多少當時の政界を寫さんと試みたる者なれども、其の文壇に於ける勢力は遙に之に劣れり。『新粧の佳人』は當時歐化熱及び政治熱の最高潮を表せる者にして、荒唐突飛の弊ありと雖、時勢の一面を反映するに足る。其の他政論文學者及び新聞小說家の、筆を政治小說に染むる者甚だ多かりきと雖、概ね鐵腸、南翠の亞流に過ぎざるを以て、茲に其の作例を擧ぐるを省き、飜つて當時の政治小說其の物の價値に言及ばん。

一括して言へば、彼等作家は、政治小說其の物に對する觀念に於て、根本的の誤謬を懷けり。彼等は政界の眞相を窺ひ、社會の表面に現はるゝ百般の政治活動の依て起る所の政治家の心理、政治界の秘密を描かんとはせ

す。新聞の雜報にも見ゆる如き皮相の事實を羅列し、演說公會等の外、何等の寫し出でし事なく、作中の政治家は、皆行動を缺き、唯其の意見を演說して喝采を博するを以て能事となし、而も其の演說たるや、概ね作者自身の政論を發表するに止まりき。換言すれば政治の舞臺を見て其の樂屋を察せず、小說の本領を沒して自己政論の發表の方便にせしなり。斯く其の着眼と目的とに於て旣に根本的の誤謬あり。加ふるに技術の點に於ても、脚色は千篇一律、意匠の變化殆ど空しく、要するに貧書生が立身出世の夢物語に過ぎず。之を以て高く標置して政治小說と稱するは頗る當を失ふ。且其の人物も、性格偉大、欽仰すべき者に非ずして、屑々たる小才子、世渡上手の利巧者にして、當時の批評家の所謂「政治社會の丹次郎」に外ならず。而して之を叙せる文章、修辭の技巧に至りては其の缺陷の最大なる者にして、中には全然文學としての形式を缺けるものあり。

斯くの如きは、獨り『雪中梅』以下の作のみならず、『文明東漸史』以來此の期の創作に通有する缺點なり。思ふに政治小說は明治新文學の先驅にして、當時尙草創の際に在り、且つ其の作者概ね專門文學者に非ず、所謂政論家發憤の餘に成りし者なれば、彼等に向つて備れるを求むるは或は酷ならん。むしろ却て最も善き時勢の反映を此の間に見るべきなり。よし其の反映は單に皮相に止まるを憾とすべきも、尙其の有する唯一の價値と稱すべし。

文壇は斯かる狀態を以て明治二十年前後に及べり。此の時に方り新文學の萠芽は、漸く葉を開き蕾を孕み、文界革新の機運正に動き、政治小說は其の絢爛の華彩に遇ひて忽ち其の光を失ひぬ。今や進んで新文學に論じ入らんとするに方り、顧みて新舊二潮流の消長を追跡すれば、飜譯文學の發生以來、文壇に於ける新潮漸く勢力を增し、繼承の文學は日に月に衰へて復十年以前の如くならず。作家は年々物故する者あるのみにて、之を繼ぎ之に代る者絕て無く、追々作家と作物とを減じつゝあり。唯條野採菊（傳平）前田香雪、三木愛花等數人、新聞雜誌に據りて僅に戲作の末勢を維持するを見るのみ。而して前期以來漸く發展したる新聞紙は、西南戰爭の刺

擊によりて一大進歩をなし、益〻此の潮勢を助けぬ。所謂五大新聞の外、十五年には福澤諭吉『時事新報』を創刊し、其の他各地發刊比年相繼ぎ、記者の輩出亦頻りに、『報知』の龍溪、鳴鶴、『朝野』の鐵腸等、往年の櫻痴、柳北の後を襲ぎ、政論と小說との兩方面に向つて錚々の名を馳せ、就中龍溪の文、雅馴流暢、論議精細、最も當代に喜ばれたり。福澤諭吉亦居然たる記者にして、其の文章平易暢達、第一章に詳述せし特色を發揮して益〻老練の境に進み、常に輿衆に先だてる豫言的言論は、直ちに『時事』の聲價を江湖に布きぬ。福澤は獨り自己の新聞に於て成功せしのみならず、三田の先生として慶應義塾に養成せし幾多の秀才は、夙に新聞事業に從事して文名既に世に高き者少からず。鳴鶴、龍溪、鐵腸、學堂等、此の時代の飜譯文學政治小說の作家は概ね之に屬し、二十年以前の文壇は恰も福翁門下の掌握する所なるが如き觀あり。世に稱して三田派文士といへり。文壇の新潮は、此等記者及び其の新聞の鼓吹によりて益〻社會に擴がりぬ。

終りに臨みて一言すべきは、當時隆々の勢ありし基督教の我が文學に對する關係なり。明治の初、切支丹邪宗門の禁、何時となく解け、爾來基督教は西洋心醉の思潮に乘じて天下に瀰漫し、十七八年の交、時の政府の極端なる奬勵の下に、英米の言語風俗を學びし時に至りては、期年ならずして全國到る所會堂說教場を見、青年男女到る所聖書を弄び讃美歌を唱ひ、斯教の勢力將に天下を風靡せんとするに及べり。斯かる精神界の現象を見ん者は、直ちに其が當時の文學に及ぼせる影響に想ひ到るべし。曩に英國思想の傳來は延いて英文學の輸入となり、進んで其の小說詩歌の飜譯となり、又佛國思想の傳來は直ちに政治思想の發達を促し、延いて政治小說の勃興となりぬ。然らば泰西文明の母と呼ばれし幽遠熱烈なる基督教の思想が、本邦精神的文明の開拓者として、文藝の上に劃然たる印象を殘しゝならんと想像せらる。然れども當時基督教の思想は未だ文藝の內容とならず、繪畫、彫刻は勿論、詩歌小說等一として其の色彩を帶ぶる者なかりき。思ふに宗教思想が文藝の內容とならんには、先づ國民思想の內容とならざるべからず。之を東西の思想史文藝史に徵するに、古來新宗教に觸接するや、

必先づ同化受用の微妙なる能力によりて之を國民的に渾成し、國民思想の内容に牢乎たる根柢を作り、爰に始めて美術に現はれ、文學に影響を與ふ。而もかくの如きは決して短日月の間に成就すべきに非ず、國民不斷の努力と、時所幾多の鍛錬とによりて、始めて成るべきなり。されば新來の基督教の如きも、亦此の約束に從ひ、傳來日尙淺き斯教は、未だ同化の妙用を受けず、未だ國民思想の内容とならず。且當時斯教の盛況は、信仰の深き根柢より生せしに非ず、西洋文明に心醉せる國民が、所謂文明の宗教に趨れる一時の盲動に過ぎざれば、同化受用の如き眞面目なる問題には未だ到達せざりしなり。其の文藝思想の内容たるが如きは、尙將來の事に屬す。

第二期の文學

明治二十年――同二十七年

第三章　新文學思想

第一節　固有思想の反動

維新以降、日に月に昂上し來れる歐化熱は、十八年に建設せられし新政府の極端なる模倣主義を執るに及んで其の絶頂に達せり。國民は其の文明をして歐米諸國と對等ならしめんとの燥急輕忽なる空望の爲に動かされ、固有文明の特質、新來文明の適否を究めず、徒に皮相の文明に眩惑して之を移植せんと努めぬ。二十年の頃は此の風潮の最も高度に達せる時なりき。物窮まれば則ち反る。反動の氣運は茲に喚起せられ、長く屈辱を忍びたりし固有思想、俄然として頭を擡げぬ。而して此の運動の陣頭に立ちし者を政教社の人々が唱道せる國粹保存主義となす。

歐化思想に對する保守思想の反抗は、從來屢〻種々の形を以て起りき。維新當初、神道一派は一時反動の氣勢を示し、六七年の頃、排洋興神の思想

一部の人心を風靡して歐化熱に反對したりき。弘道會なる者次いで起り、儒教主義を提げて當時の實利主義に反抗し、固有道德を稱へて浮薄なる時潮を制遏せんと試みたりき。次に民選議院設立の運動上下を搖かすに方り、獨逸流の國家主義を執る一部學者は、起て佛國流民主說に反對したりき。而も歐化主義の勢力は之を推倒して進みぬ。斯くの如く、保守主義の反抗數回に及ぶと雖、さながら螳螂の龍車に向ふ如く、悉く破摧せられ畢んぬ。然りと雖、今や歐化熱の昂上極端に進むに及んで、國民漸く自己の盲動を悟り、二十年來の經驗によりて、西洋心醉の弊一にして足らざるを覺りぬ。所謂西洋の文明、乃至文明の宗教と稱する者、其の根柢の極めて輕浮にして、其の內容の極めて落莫なるを知りぬ、是に於てか國民の思潮は翕然として國粹保存主義の下に集り、政教社の人々が其の機關雜誌『日本人』に出したる縱橫の論議は、天下の視聽を動かしぬ。

政教社は此の國民思潮の凝りなせる一個の團體にして、三宅雪嶺、井上圓了、志賀矧川、棚橋一郎等、之が主唱となり、二十一年、雜誌『日本人』

を刊して大に國粹主義を鼓吹し、泰西文明の缺點を指摘して國民警醒の聲を擧げたり。所謂國粹主義とは、從來歐化主義が泰西文明を崇拜するの極、我が國粹を蔑視し、我が短を去るに合せて我が長をも沒却せしに反抗し、飽くまでも國粹を保存し、補ふに彼が長を以てすべしといふに在り。論旨多少抽象的に過ぎ、國粹其の物の具象的說明に缺くる所少からず。爲に往往頑冥なる保守論者と誤解せられたりと雖、一代の氣運を捲起して國民自覺の道程に多大の貢獻を爲し、功績は、百世沒すべからざる者あり。勿論此の成功は時勢の然らしむる所にして、固より政敎社のみの事業に非ずと雖、輿論の向ふ所を指導して其の言はんとする所を道破せる急先鋒の榮譽は、確かに是等の人々に存すべきなり。

此の運動の賜は國民の貴重なる自覺なりき。自覺は對比より來る。他ありて始て自あり、他を知悉して始て自の特色を知覺す。而も對比の能力は知識經驗の蓄積に待つ者多し。今や我が國民は二十年の經驗を積み、知識を蓄へ、其の結果、從來盲目的に吸收したりし歐米文明の缺陷を看破すると同時に、固有文明の彼れに遜らざる者甚多きを知悉し、自他を比較して今更に昨の非を悟りぬ。卽ち從來世界的知識の缺乏の爲、國民の意識に上らざりし者、該知識普及の結果、對比の能力を生じて茲に意識に上り、豁然として自覺の域に入らんとするなり。且歐米心醉の餘、初めは皮相的觀察に止まりし邦人も、多少其の眞相を覗ふに及び、彼等の爲す所常に其の國粹を尊重し、特に文學美術等は勉めて固有の美を保全發揮せんとするを知り、加ふるに、本邦在留の外人等口を揃へて本邦の文學美術を賞讃するを聞くに至りしかば、國民は自己の有する財寶の極めて富贍なるに驚き、國粹に對する自覺は油然として其の衷心より起りぬ。尊いかな此の自覺や。是在りて本邦文明は始めて獨立の文明たるを得るなり。二十年來の文明は模倣の文明、隸屬の文明、はた根據なき文明なりしが、茲に至りて始めて確固獨立の基礎を取るに至れり。本邦文物の發展は、此の時始めて眞正の進程に上りぬ。

斯の自覺は、實に我が文明史、思想史、及び文藝史の上に於ける極めて

重要なる契點にして、一度新來の大勢力の爲に奈落の底に推落されし文物の總べてが、奕々たる新光明を以て復活したる時を表はせり。曩に吾人は維新當初の破壞的風潮を叙して、世は一時荒寥たる暗黑界となりしを說き、次いでは此の缺陷を補はんが爲、恰も餓えたる者の食を選ぶに暇なきが如く、競うて泰西文物を吸收して其の適否を顧みざりし事を述べたり。今や是等西洋文物が漸く缺陷を露はせるに乘じ、嘗て打捨てられし舊文物、土を捲いて重ねて來れり。歷史は常に繰り返す。而も繰返しつゝ進步すと稱す。復活は常に原形の儘に非ず、重ねて來りし者大に其の舊態を改めずんば非ず。二十年間新文物の下に雌伏したりし舊文物の復活は、文明の獨立の上、はた其の進步の上に於て、其の意義極めて重き一大現象なり。

文明の獨立は其の端緒を開けり。歐風米俗のわざとらしき者去りて固有風俗の醇美なる者之に代り、一時亢龍の勢ありし基督敎は俄然として其の力を失ひ、從來醜陋の惰眠を貪りし佛敎徒も、茲に覺醒して破邪顯正の運動を始め、一方に於ては、嘗て反古紙屑と共に扱はれたりし和漢の古書、茲に再び花咲く春に會ひ、斷綴零冊、世にもてはやされ、故紙廢墨、復價を生ずるに至り、又彼の『日本人』一派の極力唱道したりし古美術保護の議は、遂に天下の輿論となり、嘗て無用の長物として破壞せられたる神社佛閣、及び海外に賣り飛ばされたる佛像佛畫も、今は古美術保存の名の下に、寶物取調委員の鑑識證明によりて、永代國家の保護を受くべき國寶となるに至れり。轉じて國民敎育の方面に見れば、森文部大臣が大膽なる洋風敎育、特に國語を廢して英語を採用せんとせし如き極端なる外國語敎育は、二十三年十月の勅語、續いては井上文部大臣の國家主義の敎育、並に國語敎育によりて其の風潮を一變し、更に藝術界に見れば、米人フェノロサが口を極めて歎賞したる邦畫の眞價は、端なく國民の宿醉を覺醒し、邦畫本來の面目を發揮せんとて奮起せし國粹派の運動は、從來の畫壇を領せし文人畫西洋畫を斥け、工部大學の美術學校も其の方針を變じて邦畫の保護奬勵に力め、爾來美術協會の設立となり、東京美術學校の開設となり、狩野芳崖の崛起となりて邦畫の特技は新に宣揚せられたり。

復古的精神は所有文物に普及して、遂に本論の主眼たる文學界に及べり。斯かる潮流の文界に入りて先づ與ふべき直接影響は、言ふまでもなく國文學の復興なり。曩に神道派の國學が一時歐化主義に反抗せし事ありしが、國粹思想の崛起するに及び、先の國學は純文學に姿を變へて復活し、從來西洋文學の爲に壓倒せられて其の聲息を潜めたりし我が古文學再び世に出で、皇典講究所、東京大學の和文學科及び古典講習科等は、皆古文學攻究の好機關となり、國文學の知識は駸々として國民の間に擴がり進みぬ。勿論是等設備の主眼とする所は、恐らく國史國典の研鑽に在りて純文學に在らざるべしと雖、古史古典の研究は畢竟古文學の研鑽に賴らざるべからず、古文學を外にして國史國典攻究の資料を求むべからざるなり。斯かる間に、大學古典科及び和文學科は落合直文、小中村義象等の卒業生を出し、是等少壯國文學者は、從來の國學者流と異なり、明治の新空氣に養はれて多少の新知識を藏し、着眼識見おのづから皇學一派の固陋を擺脱し、加ふるに年少の鋭氣を以てしたりしかば、歐化主義の横行の下に國文學の憐れむべき沈衰を見て默止するに堪へず、新聞に雜誌に演說に講義に、國文學を鼓吹して、彼の國粹保存論と呼應したりき。斯くて國文教育の必要は天下の輿論となり、皇典講究所に國學院設立せられ、大學に國文學科を置かれ、尙國語傳習所も開かれ、爾來中等以上の學校にして國語國文の科を課せざる者なきに至れり。一方に於ては東洋學會、明治會の如き國粹主義の會合より『東洋學會雜誌』(二十一年發刊)『明治會叢誌』(二十二年發刊)の如き雜誌を出し、『日本人』等と相呼應して國文復興を呼號せり。

この時に方り、是等の運動に就き、常に其の主動となりし落合、小中村の二人、古文學の飜刻出版を成して古書缺乏の困難を救はんと企て、『日本文學全書』を編纂して二十三年第一編を刊行せり。遠くは竹取、伊勢の古物語より、近くは太平記、增鏡に至るまで、古文學の重なる者を網羅し、解題頭註を加へて逐次刊行すること二十四編に及べり。此の擧や實に天下の渴望に應じたるものにして、從來刊本甚だ稀少、坊間求めて得ること能はざりし貴重なる古文學が、今や至廉の小冊子となりて炮豆の寒生にも容

易に得らるゝに至りしかば、既に和歌和文の趣味を解し初めたる青年輩爭うて之に就き、古文復興の風潮は全國に行き亙りぬ。『文學全書』の成功は更に古歌集の出版を促し、少壯歌人佐々木信綱『日本歌學全書』を編し、萬葉集、八代集、及び中古の家集を纂め、總て分本十二冊として二十三年末より刊行し始むるを見るに至れり。是に於てか和歌和文の二全書完成し、相俟つて國文學興隆に至大の貢獻をなせり。されば之を企畫せる少壯國文學者の功績は、二全書と共に永く傳ふべきなり。而して彼等の巨頭として常に此の運動の前面に立ちし者は實に落合直文なりき。

彼は仙臺の人、十五年大學古典科に入り、三年にして之を出で、爾來一身を國文教育に投じ、歌文復興に關する事業一として與らざるなかりき。彼は時人が自國文學の優秀卓越なるを知らざるを慨して、之が妙味を發揮するに全力を注ぎ、新聞雜誌の文章が拙惡格に入らず、支離滅裂讀むに堪へざるを指摘して、天曆以前の古文法を唱道し、桂園末流の和歌の、孱弱卑俗取るに足らざるを說破して、優雅清新の趣味を鼓吹し、從來の普通文が乾燥なる漢文直譯體に流れ、國學者の文章が無氣力沒趣味なる擬古體に陷るに反抗して、優麗暢達の中、精彩おのづから奕々たる清新の體を創め、はた『孝女白菊の歌』を始め數多の長詩を作りて從來行はれたる蕪雜なる詞章を矯正する等、國歌國文の所有方面に創始的事業を遂行しぬ。彼が第一高等中學、皇典講究所、國學院、及び國語傳習所に於てなしゝ國文教育、『東洋學會雜誌』『明治會叢誌』『柵草紙』『日本』『歌學』『國文』等に揭げし論議創作は、卽ち此の事業を成さんが爲に披瀝せし努力の熱血なりき。是に於て世人漸く國文學の尊むべきを悟り、國文典の重んずべきを知り、當時既に名を文壇に馳せたりし文學者すら、顧みて自家の文章の破格滅裂なるに驚き、彼に就いて文法上の修練をなせし者少からざりきと稱す。況んや、青年好文の徒に至ては、風を望んで起つ者頗る多く、門下多士濟々、後來文壇に名をなしゝ者少からず。斯くの如くにして國文學興隆の運動は其の功を收め、國文教育家としての彼れの地位復動かすべからざるに至りぬ。彼は歌人なり、文章家なり、批評家なり、學者なり。然れども國文教育家

たる一點に於ては總べてを合したるよりも大なりき。

古文學復興の主動者の少壯國文學者なりしは上述の如し。然れども此の氣運を助長するに與つて力ありし他の因緣亦一にして足らず。或は井上文部大臣の國語教育主義の如き、或は新聞『日本』の鼓吹奬說の如き、或は其の主筆陸羯南の保護の如き、或は司法大臣山田顯義の國學振興に盡せるが如き、說き來れば底止する所を知らずと雖、事煩に亙るを以て、茲に之を省かん。

以上縷述せし所は、卽ち國民の自覺及び之に伴ふ所有固有文物復活の概況なり。顧みて當代の風潮を概見すれば、反動の意、到る所に現はれ、復古の氣、所有方面に充てり。而も反動は常に退步に非ず。復古は多く新彩を帶ぶ。正あり、反あり、茲に折衷的發達を遂ぐるは歷史の面目なり。固有文物の復古豈必ずしも文字通りに古に復るの義ならんや。況や此の自覺の因て起る所、亦世界的知識の傳播に存するをや。復活の美術には世界的意氣あり、復活の國文學には淸新の趣味あり。歷史は着々として進步しつつあるなり。

此の時に方つて、維新以來の過激なる革新的精神は漸く中正に赴き、盲目なる急進主義と頑冥なる保守主義とは相次いで勢力を失ひ、民權自由論と帝王神權論とは憲法によりて根本的に統一せられ、歐化主義の橫行は國粹思想の反動に調節せられて穩正の進路を取り、所謂新舊思想の衝突漸く其の勢焰を收めんとす。是に於てか國民聊か餘裕を生じ、意を文藝界に傾くる者前日の比に非ずなりぬ。且一方に於ては學術の進步に伴うて、國民の思想愈廣濶となり、泰西語學の普及と共に英佛文學を味ふ者益多く、甲因乙緣相扶けて文學趣味の瀰漫を促したりければ、明治文學革新の思潮茲に動き、新文學の勃興爰に萠せり。

第二節　文學思想の革新

文學に對する觀念の變遷は、作品の性質に根本的の變革を與ふ。所謂新舊文學の差異は主として此の觀念の差異に基く。過去の文學界を支配した

る文學思想、主義、原理は如何。現今の文學界に於て正に起りつゝある文學思想、主義、原理は如何。之を稽査せざれは新舊文學の性質の差異を精密に知る事難し、思ふに過去の文學界に於ては、或は達意の具、自己發表の器となし、或は道德の隸屬として世道人心に益あらん事を主となす等、總べて文學を以て實用の具と見做し、何等か實用の素を備ふるに非ざれば文學の價値を生ぜずといふ思想最勢力ありしが、一般思想界に新潮入り來り、平民的思想の傳播益〻廣く、個人の發展益〻著しく、自由意志の思想暗々裡に根柢を張るに方つては、文學獨立の思想斯界に磅礴し、文學は其れ自身の價値を有し、其れ自身の形式を有し、決して實用の隸屬、道德の方便に非ずといふ思想は、漸く社會に勢力を得るに至れり。

斯くの如きは極めて大體の觀察なり。更に少しく之を細說せんに、先づ詩歌に對する從來の見解、主義等は、古今集以來、支那詩人の詩に對する主義見解等を繼承し、彼の詩經の序に『詩は志の之く所なり。心に在るを志となし、言に發するを詩となす。情、中に動きて言に形はるゝ時は、之を言ふも足らず。故に之を嗟嘆す。之を嗟嘆するも足らず。故に之を永め歌ふ。』と言へる數句を以て金科玉條となし、所謂大和歌、唐歌の名に現はるゝ如く、和歌を以て我國の詩となし、詩を以て彼國の歌と思ひなせり。故に在來歌人の和歌を見るや、常に自己の主觀を諷詠するを以て能事畢れりとなし、而も漫然、目に見えぬ鬼神をも泣かしむと稱へ、未だ藝術の眞義に思ひ到ること能はざりき。且一方に於ては江戸時代儒教主義の浸潤甚しく、國民思想の中に牢乎たる根柢を置くに方つては、此の主義遂に詩歌にも入り、風教に利し世道に益あるを以て詩の用となし、然らずんば彫蟲の末技無用の贅物と貶稱し、此の思想延いて和歌に及び、之を律するに道德の標準、實用の規矩を以てするに至れり。

次に小說戲曲に對する思想を稽ふるに、王朝の古に在りては、世態人情の鏡としての是等藝術の本義能く知られたるが如しと雖、鎌倉時代以後、佛教思想の根柢を國民の間に置くに及び、或は佛法弘通の具に供せられ、或は靈驗利生の記錄とせられ、所謂「狂言綺語讃佛乘」の語は是等文學の

性質を決定する斷案となされ、甚しきは王朝の物語をも是等の目的の爲に書かれたりと稱ふるに至る。降りて江戸時代に及びては、勸善懲惡の主義、小說戲曲の理想を一變し、是等の文學は道德特に儒敎道德の主義を宣揚し、兼ねて之を鼓吹する用に供せられ、「事を凡近に取りて義を勸懲に發す」と言ひし李笠翁の語は、恰も和歌に對する詩經の序の如く、千古不磨の確言と信ぜられ、所謂訓蒙的性質は是等文學を被ひ盡せり。斯くの如く詩歌、小說、戲曲等、總べて文學以外の主義によりて動かされ、文學以外の目的の爲に使はれ、其れ自身目的たるべき文學の特質を沒して一種の方便となり了らしめたり。

轉じて文學者の社會に於ける地位、彼等が文學に對する態度、はた彼等が自ら持する所の高卑、及び文學者たる人々の種類を見るに、和歌、和文、漢詩、漢文の如きは、其の作家たる者比較的に社會の尊敬を受け、又彼等が其の關する文學に對して比較的眞面目の態度を取り、從て自ら標置することと比較的に高く、且其の敎養學識比較的に深かり。特に和歌に在りては其の評價最も高く、或は天地を動かし、鬼神を感ぜしむと信じ、或は神祕にして魔力ある者となし、或は一種の解脫法と崇め、甚しきは萬邦詩歌の最上位に在る者にして、「神人を感ぜしむるは獨り我が大和歌自然の妙用」と稱するに至る。小說戲曲の類にても、中古物語の榮えし頃に在りては、其の評價必しも和歌に下らざりけり。然るに佛敎主義及び儒敎主義相繼いで入り、小說戲曲を以て實用の具となすに方りてや、此等文學の作家が社會に於ける地位おのづから降りて、學者僧侶に從屬する者となり、彼等が文學に對する態度亦おのづから粗かに、狂言綺語の名に甘んじ、戲作の稱を拒まず。從て自ら重んずる事甚少く、戲作者と呼ばれて普通藝人と相距る事遠からず。其の人物も亦、二三の特例を除きては、概ね敎養足らず、學識具はらずして、唯文筆の才を以て立つのみなるが如し。『羇旅漫錄』所載の近松巢林子の遺墨といふに曰く、「甲冑の家に生れて武林を離れ、三槐九卿に咫尺し仕へて寸爵なく、市井にさまよひて商賣を知らず、隱に似て隱に非ず、賢に似て賢ならず。世の迷ひ物、神釋儒道和歌有職弓馬郢曲歌

舞滑稽まで、事知り顔に一生を言ひちらす」と。又近松半二の『獨判斷』に曰く、「堂上の事を知らば有職者となるべし。弓箭の故實を知らば軍學者となるべし。聖經賢傳を記憶せば直ちに博識の儒者となるべし、菅公の事も楠公の事も丸呑に似つこらしく書いて、聞いた程の語を奥深げにつばらかし、和歌管絃より萬の道、何一つ正しく覺えたる事なく、聞取法聞耳學問、根氣をつめて學ぶ事のならぬ自墮落者が卽ち作者となるなり」と。二者固より一場の戯筆にして、巢林子、半二必しも此の儕に非ずと雖、所謂戯作者の眞相は最も適切に之に露はる。大才巢林子等にして此の言をなすを以て見れば、爾餘の作者輩の事思ふべきのみ。

文學界の舊思潮は洵に斯くの如き者なりき。過去の文學界を支配せる思想は、常に道德上の者にして文學上の者に非ざりき。然るに一朝泰西の思想、特に彼の國の文學思想の入來るや、革新の運動一時に起り、詩歌を始として小說戯曲に至るまで、次を追うて舊思潮を棄てぬ。而して此の運動の最も早く文壇に現はれ、明確なる意識を以て改革に着手したりし者は、卽ち明治十五年刊行の『新體詩抄』なりき。

『新體詩抄』は東京大學の外山、矢田部尙今、井上巽軒三人の撰にかかり、西詩飜譯又は撰者創作の詩篇を收む。新體詩とは其の名の示す如く、漢詩にも非ず、和歌にもあらず、西詩の體裁を取りて之を行るに七五調の國語を以てしたる一種新體の詩にして、本邦文壇に始めて提供せられし明治の創造なり。其の名の如きも本書撰者の命ずる所にして、爾來或は新體歌と稱せんと主張せし一二の作者ありしも、此の名は遂に一般文界に襲用せられて復動かすべからざるに至りぬ。而して所謂新體詩の特に創始せられし由來を溫ぬるに、撰者巽軒の本書に序せる所に從へば、從來詩界を占有したりし漢詩と和歌とは、共に吾人の情志を發舒するに足らず。漢詩は以て支那の詩たるべし。本邦の文學として發達すべき者に非ず。和歌は本邦文學として尊むべき者なり。然れども此は過去の文學たるべくして、新日本の現在及び將來に於て詩界を占有すべき者に非ず。是を以て吾人新文明の大潮流に棲息する國民が、依つて以て情志を發舒せんには、現時の國

語を以て作れる歐風の詩形を取らざるべからず。平々坦々の言語を以て成れる長大の詩形を選ばざるべからずといふに在り。新體詩はかゝる主張の下に起りし者にて、七五一聯、句をなし、數句節をなし、數節章を成すこと恰も西詩の如く、用語は漢語を嫌はず俗語を棄てず、所有現代普通の語を收容して、勉めて耳遠き古語を除く。打見たる所、讀み易く解し易し。洵に詩界の大變革なりき。

詩界革新の運動は起されたり。世上同感の文學者は相率ゐて新體詩に赴けり。漢詩和歌の專門家、及び此の新彩に驚倒せる保守者流が、所有非難嘲罵を加へしに係らず、總べての反抗を排して一方の旗幟を立てたり。斯くの如きは固より時勢の然らしむる所なりと雖、之を十五年の當時に見たりしは、實に創始者の大膽なる發奮の致す所なりといふべし。

然れども、其の詩歌革新に對する主張は未だ根本的の者に非ざりき。勉むる所、外部詩形の改革に在りて、未だ詩想の內部に及ばざりき。巽軒は新體詩の特質を數へて、格法の自由なる事、規模の廣大なる事、言語の豐富なる事、語格の近樣なる事、字句の勁健なる事、旨意の明晰なる事、進歩の傾向ある事、新奇の着色ある事、の八個條を擧げたりと雖、總べて是、詩形上の得失に係り、詩想の根本的性質、乃至詩歌に對する觀念に就ては、何等の言ひ及ぶなし。從來主觀の諷詠に止まり、自己發表を以て要となしたる詩歌の性質は如何變化せしか、社會上道德上に裨益するを以て詩歌の價値となしたる實用主義は如何變遷せしかは、未だ知るべからず。況んや藝術の本義を明にし、詩歌は彼の繪畫彫塑等と等しく、藝術家の想像に出でたる一種の美術品にして、詞花言葉を以て宇宙の美を謳歌する者たる事を說くに於てをや。詩は志を言ふに止まるといふが如き觀念は或は是無かるべし。然れども、道德主義を以て詩歌を評價せんとする思想は、牢乎として拔くべからず。換言すれば、文學の獨立は未だ成らず、文學思想の根本的革新は未だ遂げられざるなり。

『新體詩抄』は、斯界の爲に敢て卒先の功をなし、荊棘を拓き蒙茸を開きて去れり。然れども、文學に對する觀念の革新は、擧げて之を後の文學者

に委ねたりき。時は進みて十八年となりぬ。果然新運動は小說界に起りぬ。

『小說神髓』の出現卽ち是なり。

『小說神髓』は坪內逍遙の著書にして、一部二卷に分れ、上卷に於て、先づ美術とは如何なる者なりやを論じ、小說は一種の美術なりと說き及び、以て小說其の物の根本性質を明にし、次に小說の起原より其の變遷の概略を述べ、次に小說の主眼を說いて專ら人情の描寫に在りとし、以て從來の勸懲主義に大打擊を加へ、更に小說の種類と其の四大裨益とを述べたり。下卷は小說の法則を論じ、古來本邦の小說を剖析批判して將來執るべき方針を指示したる者にして、先づ種々の小說文體の得失を擧げ、次に小說の脚色を論じて主人公の設置に及び、最後に叙事法を述ぶ。總べて十章、所謂小說の神髓を說いて、今後小說家の向ふべきは模寫小說、人情小說に在るを詳論せり。是卽ち著者逍遙が東西文學の比較研究より得たる一部の小說論にして、詩學又は美學の新知識の上に立ちて本邦古今の小說を觀察評隲し、併せて小說の性質を明にし、在來の戲作の範圍を脫すべきを說ける者なり。其の緒言に曰く、「近來刊行せる小說稗史は、これもかれも馬琴種彦の糟粕ならずば、一九春水の贋物多かり。蓋し此の間の戲作者流は、ひたすら李笠翁の語を師として、意を勸懲に發するをば小說稗史の主腦と心得、道德といふ模型を作りて、力めて脚色を其の內に工夫なさまく欲りするからに、强ち古人の糟粕をば嘗めんとするにはあらざめれど、素と其の範圍の廣からねば、覺えず同轍同趣向の稗史をものすることなるべし。さはあれ其の罪偏に作者の上に在るに非ず。讀者亦與りて力あるなり。何となれば、古來小說をもて敎育の一方便のやうに思ひて、奬誡勸懲は其の主眼なりと唱へながら、尙實際の場合に於ては、ひたすら殺伐慘酷なる、若くは頗る猥褻なる物語をのみ愛で喜び、他のかた苦しき筋の事は、目を住めてだに見る人稀なり。而して作者の見識なき、總じて輿論の奴隷なれば、競うて時好に媚びむとして、殘忍なる稗史陋猥なる情史を綴り、世の流行に從ふものから、勸懲の美名もさすがに打棄て難さに、强ひて勸懲の主旨を加へて、人情を枉げ世態を矯めて、無理なる脚色をなす事なりけり。是併

しながら、作者も讀者も、稗史の主眼を悟らざるに因るのみ。因て嗚呼がましき所爲とは思へど、敢て持論を世に示して先づ看官の惑を解き、兼ては作者の蒙を啓きて、我が小説の改良進歩を今より次第に企てつゝ、竟には歐土のノベルを凌駕し、繪畫音樂詩歌と共に、美術の壇頭に煥然たる我が物語を見まくほりす」と。是れ此の書の出でし由來なり。

著者は劈頭美術の本義を説きて、實用主義と目的主義との妄を辯じ、小説は卽ち美術なれば、他の音樂繪畫彫刻建築等と等しく、所有美術の約束に從はざるべからずと述べ、次に小説の變遷を叙し、人情世態を寫せる彼のノベルを以て其の發達の頂點となし、眞の小説稗史は卽ち是れなりとなせり。而して其の主眼に説き及ぶや、則ち曰く、小説の主腦は人情なり、世態風俗之に次ぐ。此の人情の奥を穿ち、心の中の内幕をば洩す所なく描き出して、周密精到なるを小説家の務とす。和漢に名ある稗官者流が、ひたすら脚色の骨髓に入らんことを力めたりしも、人情の皮相を寫して足れりとせり。慨むべきことならずや。夫れ稗官者流は心理學者の如し。宜しく心理學の道理に基きて其の人物をば作るべきなり。苟にも己の意匠を以て強ひて人情に悖戻せる、否心理學の理に戻れる人物などを作り出さば、其の人物は既に人間世界の者にはあらで、作者が想像の人物なるから、其の脚色は巧なりとも、其の譚は奇なりとも、之を小説とは言ふべからず。中略彼の曲亭の傑作なりける八犬傳中の八士の如きは、仁義八行の化物にて、決して人間とは言ひ難かり。作者の本意も、本よりして彼の八行を人に擬して小説をなすべき心得なるから、あくまで八士の行をば完全無缺の者となして、勸懲の意を寓せしなり。されば勸懲を主眼として八犬傳を評する時は、東西古今に其の類なき好稗史なりといふべけれど、他の人情を主腦として此の物語を論ひなば瑕なき玉とは稱へ難し。中略されば小説の作者たる者は專ら其の意を心理に注ぎて、我が作りたる人物なりとも、一度篇中に出でたる以上は之を活世界の人と見なして、其の感情を寫し出すに、己の意匠を以て善惡邪正の感情をば作り設くることをなさず、唯傍觀して有りの儘に模寫する心得にてあるべきなり。中略本居大人の玉小櫛に、

源氏物語の大旨を論じたる一節の如きは、頗る小說の主旨を解して、よく物語の性質を說き明らめたる者といふべしと。人情を模寫して神に入るを理想となし、寫實以外小說を認めざる著者の主旨、細かに說き盡されたり。

著者は又曰く、勸懲小說は小說の一種と稱すべけれども、其の旨狹く其の趣偏れり。模寫小說は人生の種々相收めて此の裡に在り。されば模寫主旨の小說には求めずして誹刺諷誡の法備はり、暗に人を敎化する力あり。別に勸懲主旨の小說を要せざるなり。されば斯かる小說には、第一、人の氣格を高尙にし、第二、人を勸奬懲誡なし、第三、正史の補遺となり、第四、文學の師表となるの四大裨益おのづから伴ふと。大に模寫小說を揚げて勸懲小說を抑へたり。

斯くの如きは卽ち『小說神髓』の主旨にして、所說斬新、着眼超凡、洵に人の耳目を聳動するに足れり。勿論唱ふる所多少の誤謬なきに非ず。小說を以て總べての文學の最上位に置けるが如き、眞の小說をノベルに限りてローマンスの之と併立すべきを認めざるが如き、寫實小說を過重して理想小說を過貶せるが如き、妥當を缺くの見尠からず。よしや斯かる誤謬なしとするも、今日より見れば當然の說にして、特に駭くべき新論に非ずと雖、一世を擧げて勸懲の舊思想を墨守し、空しく實用主義目的主義の奴隸となりて自ら悟らざる時に方り、藝術本位主義の大旆を飜して自然模寫を唱道し、以て從來、因果應報、惡は亡び善は榮ゆる圓圓を追はんが爲に、强ひて人物事件の自然を枉げたりし戲作界を警醒するに至つては、洵に破天荒の卓說にして、文學史上一時期を劃するに足る有力なる地位を占むる者と言ふべし。

此の書出でて小說の名普く世に行はれ、主人公の稱、模寫寫實の語、廣く文壇に紹介せられたり。小說に對する觀念は一轉化し、十九世紀の新しき文學思潮は始めて本邦文學界に入り來れり。是に於てか、曩に飜譯小說によりても、又『新體詩抄』によりても未だ遂げられざりし文學思想の根本的革新漸く其の緖に就き、文學の獨立は漸く成るを得たり。『小說神髓』は、啻に小說のみならず、文學全體に向つて革新を促したる文壇有數の著

書なりき。

轉じて文學者其の人を見れば、所謂戯作者輩は舊文學と共に漸く社會の裏面に退き、教養あり學識ある新作家代りて文壇に現はれたり。『新體詩抄』の作者は悉く當代の學者なり。『小說神髓』の著者は直ちに作者となりて『書生氣質』を出し、以て其の所論を體現せしが、是亦大學出身の文學士たり。就中詩歌の人は古來多少教養ある社會より出でたれば、特に變化の激しきを見ざれども、小說戯曲等に至りては、社會的地位極めて低き戯作者輩の作る所なりしが、逍遙は社會の上流に立つべき學者の身を以て敢て此の事にたづさはり、舊慣を打破して作者の品位を高め、從つて小說戯曲其の物の品位をも高めたりしかば、斯界の空氣爲に一新し、低級なる戯作の境界を離れて高尙なる文藝の畛域に入り、更に進んで所有文學の中最も發達進歩せる者とならんとす。

斯くの如くにして文學思想の革新は『新體詩抄』に萠芽を發し、泰西文學の流入と共に漸々生長し、『小說神髓』に至りて遂に翻譯の美觀を呈するに至れり。顧みて此の氣運を釀成せし原動力たる泰西文學思潮の傳播の迹を尋ぬるに、先づ創作と批評との二方面より傳はりしを見る。一方に於て英佛の詩歌小說が夙に飜譯せられしと同時に、他方に於て其の國の美學、詩學、修辭學、美術論等亦絕えず翫味せられたり。此の結果はやがて飜譯又は著書となりて現はれ、一方に於ては『新體詩抄』『東洋學藝雜誌』の譯詩、『花柳春話』以後の飜譯小說となり、他方に於ては、十六年中江兆民が譯せる『維氏美學』(佛ヴィロン原著)、其の前後に出でし菊池大麓譯の『修辭及華文』、フエノロサ等の美術論となり、前者は一括して泰西文學の標本となり、後者は一括して西洋美學思想の代表者となり、ついでは『新體詩抄』撰者の議論を生じ遂に『小說神髓』の大旨となれり。二十二年に出でし高田半峰の『美辭學』は『修辭及華文』の系統を承けて、又此の風潮を聲援したりき。

此の時に方りて、前節に述べたる固有思想の反動漸く實相に入り、延いて古文學の復活運動となり、詩歌美文より始めて小說戯曲に至るまで、或

は語法を之に採り、或は文章を之に學び、連りに固有文學の面影を寫しぬ。是に於てか固有思想は曩に榮えし泰西思想に影響し、古文學は飜譯文學に影響し、兩者相依り相俟つて文學界に一新面目を開けり。明治新文學は卽ち此の二者の渾然たる調和に興れり。

第四章　新文學の勃興（其の一）

第一節　新文學の曙光

文學思想の革新に伴うて現はれたる新文學の曙光は、十五年に出でたる新體詩に其の第一光芒を放ち、爾來十年の間に小說、戲曲、和歌、俳句等、所有文學に更新の彩光を齎しぬ。明治文學は此の時を以て本期に入れりといふべく、其の眞面目茲に始めて發揮せられぬ。而も時に先後あり、所有文學が期を同じうして勃興せしに非ず。新體詩先づ起り、新小說之に次ぎ、新飜譯又之に次ぐ。新戲曲と新和歌と新俳句とは時を經て興起し、其の曙光を放ちしは皆二十五年以後に屬す。

一、新體詩

和歌の起原や眞に遼遠なり。國民生存の曉、旣に其の源泉を發してより流れ〳〵て萬葉集に至り、汪々たる大觀國民の瞻仰する所となる。就中長

歌の一體、瑰麗比ぶべきなく、洵に國民雄大の情懷を賦するに適したりき。惜いかな、華彩一朝の榮を奈良朝に止めて世は短歌獨占の壇場となり、轉じて連歌となり分れて發句となり、形體の短小茲に極まる。短詩必しも棄つべからず。短詩には短詩の利ありと雖、而も斯かる形體は決して國民情感の全體を盛るに足る者ならず。發達せる文壇が有する唯一の詩體としては餘りに憐なりといふべかりき。是を以て本邦詩歌の振はざること茲に久しく、舊風依然、古人の糟粕に甘んずる者滔々皆然り。此の時に方り泰西新思想の傳來ありて、詩歌の內容たるべき者益〻豐富となり、種々の外來語漸く國語に調和せられて、詩歌の用語たるべき言語益〻富贍となりたれば、明治の新文壇は到底從來の詩歌を以て滿足すること能はず。新詩歌に對する憧憬凝つて二三の新詩人を出し、新體詩の名の下に一新體を開くに至れり。前節既に述べし『新體詩抄』卽ち此の代表者たり。

然れども此の運動は、何等の先蹤なくして突然起りし者に非ず。是より先、明治二年福澤諭吉『世界國盡』を著して萬國の歷史地理を簡明に述べ、兒童諷誦に資せんとて平易流暢なる七五調を以て始終せることあり。既に第一章に述べし如く、素と詩歌の域に遠き者なれども、興湧き情昂る時は筆おのづから精彩を帶び、思はず一種の詩調に入る。其の英京の條下「夜は三十六萬の瓦斯の燈火耀きて五月の暗も人知らず」以下數行、又は北米合衆國の條下「心に誓ふ國の爲、失ふ命得る自由、正理屈して生きんより、國に報る死を取らん、一死決して七年の、永の月日の攻守り、知勇義の名を千載に、流す血の河骨の山、七十二戰の艱難も、消えて忘るゝ大勝利」のあたり、今の鐵道唱歌地理唱歌に比ぶれば遙に詩調に富む。次いで六年『諳誦十詞』あり。前者と同樣の主旨を以て作られたる七五調の誦詞にして、皆後の軍歌の素をなし、延いては新詩歌の先驅をなす者なり。

十四年文部省音樂取調掛は、小學校唱歌の敎科用として『小學唱歌集』を發行しぬ。是は西洋樂譜に合せて新作し若しくは飜譯せし簡單なる歌曲を集めし者にて、企圖の新しきに係はらず、歌詞の內容外形共に擬古派歌人の餘唾を嘗むるに止まり、何等新機運に貢獻する所あらず。然れども彼

14839

の長歌にも非ず今樣歌にもあらぬ自由なる變體を韻文界に起し、而も典雅流麗の聲調を失はざりしが如き、後來益〻發達すべき樂曲歌詞の先蹤をなし、詩界又別箇の發展をなせるは注目すべき事實なりとす。

幾くもなくして『新體詩抄』初編發行せられたり。作者は丶山仙士外山正一、尙今居士矢田部良吉、巽軒居士井上哲次郎の三人にして、尙續編を出すべき計畫なりしも、刊行せられしは初編のみなりき。詩篇總て十九、巽軒、尙今二人の序を冠し、久米幹文の跋を附して出づ。十九首の中、創作は五首に止まり、他は總べて英詩の飜譯なり。譯せられたる詩人は、ブルームフィールド、カムベル、テニソン、グレー、ロングフェロー、シェークスピヤ、キングスレー等にして、就中カムベルの『英國海軍の歌』、テニソンの『輕騎兵進擊の歌』等、最も人口に膾炙す。創作に在りては『鎌倉大佛に詣で丶感あり』『四季の歌』『拔刀隊の歌』等、最も注目するに足る。

新體詩の名稱及び由來に就きては、前章旣に之を說きつ。其が西詩の模倣に出で、若くは之が影響の下に成れるは、譯詩は更にも言はず、創作と雖明かに之を認むることを得。其の題材　其の形體を始として、思想の根本的調子に至るまで、一として之を反映せざるはなし。先づ形體に付て言へば、作者は在來國歌の形式たる三十一文字を棄てて寧ろ今樣式を取り、之を西詩の體に應用し、七五一句一行（パース）をなし、數行を累ねて一首となし、或は四六八等、一定數の行を連ねて一節（スタンザ）となし、數節を累ねて一首をなせり。中には間〻脚韻を試みしあり。一節中、或は行を隔て、或は行を重ね、同一音の字を其の行末に置けり。『四季の歌』の如き其の好例なり。總べて詩形は著しく長大となり、時としては長歌を駕し古詩を凌がんとす。素より西詩の雄大なるに比ぶべくもあらざれども、短歌發句の小天地に跼蹐せし從來の眼を以てしては、誠に驚くべき展開と言はざるべからず。次に其の思想を見るに、從來の歌想たりし春花秋月の範圍を超え、神祇釋敎戀無常の型式を脫して幾多の新版圖を拓き、淺薄ながら多少の哲理を寓し、平凡ながら人生觀社會觀を謳ひ、又は抒情の一面に馳せたりし舊詩歌に加ふるに一脈叙事の分子を以てし、等しく花月を詠ずるにも、其の着想の存す

る所、いたく從來と趣を異にし、蘆庵景樹の博大を以て尙夢想だも及ばざりし新景物は續々入り來り、總て思索想像の行く所に任せて敢て制埒を設けず、無礙自在にして拘束する所なし。斯くの如きは詩界の大進歩にして、文學思潮革新の事實と共に史上特筆すべき重要事件なりとす。

更に大膽なる試驗と稱すべきは其の用語なり。夫れ言語の分化發達は、素と思想の分化發展に從ふ。詩想豐富となり、趣味變遷を來さば、詩語亦增加變移して之に應せざるべからず。明治の歌界、詩想の一大進化をなしたる今日に方り、獨り詩語の之に伴はずんば新詩想も遂に體現せらるゝの機なけん。曩に蘆庵景樹等平語（ヒラコト）を主張して歌語の發展を企圖せしも、尙大勢依然として歌詞を定め、制詞忌詞を定め、自ら好んで壺中に住するを免れず。『新體詩抄』は卽ち此の歷史的病弊を打破して詩語の領域を擴張し、漢語を採り口語に及び、芭蕉蕪村が發句に於て成しゝ所を襲うて更に一層の新彩を加ふ。斯くの如きは從來の和歌に在りて最忌み嫌へる所にして、之を敢てせしは、卽ち此の新運動の主要なる部分に屬す。

上述の如く『新體詩抄』は種々の點に於て創始的試驗をなせり。而も此の書の價値は、唯其の創始的なる點にのみ存し、詩篇其の物の文學的價値は深く問ふに足らず。然れども、國民が新詩歌に對する憧憬發して茲に至りし者なれば、文學的價値の如何に係はらず、又和歌者流の固陋なる排斥的論議に係はらず、明治文壇に提供せられし新詩體として、遂に多數國民に迎へらるゝに至れり。

二、小說

明治新小說の發達は實に坪內雄藏に始まる。彼は名古屋の人、春の屋朧と號し又道遙と號す。明治十六年東京大學文學部を出づるや、多年研鑽せし小說稗史に關する新運動を開始し、『小說神髓』を公にして小說革新を唱道すると同時に、創作『書生氣質』を出して彼れの意見に基づける寫實小說の粉本を示しぬ。此の作や洵に我が明治小說の新時期を開きたる極めて重要なる歷史的記念なり。

此の作詳くは『一讀三嘆當世書生氣質』と稱し、十八年六月『小說神髓』と

共に其の第一卷を出し、翌年一月に亙りて完結す。全部十七卷、署名して春の屋おぼろ戯著と稱す。寫す所は東京に於ける當代學生の狀態にして、某英學塾に於ける數名の書生を捉へ來りて氣質の種々相を現はすべき標本となし、檢束なき社會に入りたる血氣の青年が、其の氣質の異なるに從ひ、境遇の變るに從ひ、好否くさ〴〵の運命を捉ふるに至る徑路を描き、以て明治文明の懷に生ひ立ち、新敎育の許に長じたる一新階級卽ち書生なる者が、新舊思想の衝突尙止まざる當時の社會に處せる狀態に對して諷誡譏刺の筆を逞うし、之を貫くに一書生小町田粲爾と藝妓田之次との情話を以てし、之を彩るに守山父子兄妹の奇遇を以てす。通篇脂粉の氣あり、情緒奔放の青年が外圍の誘惑の爲に身を誤り、又は誤らんとする情狀、寫し得て委曲を極む。而して文章は詞に口語體を用ひ、地に雅文體を用ゐ、交ふるに諧謔を以てし、極めて平易に且巧に書きなされたり。

此の書一度出でて褒貶の聲四方より起りぬ。化政以來勸懲小說、豪傑小說に馴れたる眼は此の異樣の新彩に驚き、十年以來政治小說を新しとして謳歌せる人々は此の變體の作意を異しみぬ。然り。此の小說は在來の者に比ぶれば夥多の異彩あり。試みに其の要を擧ぐれば、第一、其の序に言へる如く「全編の趣向は專ら傍觀の心得にて寫眞を旨としてものせし」にて、勸懲を度外に置き、「此を訓誨の料にすると之を奬誡の資にするとは讀者輩の心に」任せたれば、童蒙を訓ふるが如き口調固より存せず。作中の人物亦其の趣を變じ、犬塚信乃白山雪若の如き道義の權化、關羽魯智深の如き模範的英傑、悉く其の跡を沒して世間通常の書生となれり。第二、政治小說に見るが如く、作者の主張主義を吐露せんが爲に小說の趣向を借ることなくして、專ら世態人情を直寫することとなれり。第三、從來の小說中、寫實方面にて類を同じうする者を取らば、三馬一九乃至春水等の作之に近けれども、膝栗毛の諧謔を存して其の鄙野を止めず、梅曆の妖艶ありて其の淫褻なし。若し諷刺の筆意滑稽の文致を以てすれば、浮世風呂西洋膝栗毛等、其の儔たるべしと雖、眞摯の態度に於て大なる徑庭あり。浮薄鄙猥なる從來の作物と伍すべきに非ず。第四、在來の小說が事件の變化に重き

を置き、脚色を主として所謂目先の奇を求めたりしに反し、人物の性情に重きを置き、多少心理的描寫を試みたり。第五、文章は馬琴等に負ふ所多きは言を俟たずと雖、叙事抒情の際、寫實的傾向著しく入り來り、且外國文學の影響として脩辭の上に稍新趣味を加へたり。之を要するに勸懲の陳腐を避け善玉惡玉の舊型を捨て、人情本洒落本の淫猥を去り、政治小說の枯燥を除き、模寫寫實の筆を以て新時代の生活を描き、童蒙敎誡の卑域を脱して敎養ある士人の翫賞に入りたりき。

『小說神髓』によりて蒔かれたりし寫實小說の種子は茲に至りて芽を萠し、『書生氣質』の名は忽ち讀本、草双紙の類を壓倒して世に布き、流を汲んで筆を寫實小說に染むる者前後相踵いで輩出しぬ。是に於てか勸懲小說の勢力漸次地に落ち、爾來寫實の風天下を靡け、文章に於ても新時代を表はすに適當なる一新文體を工夫して略、成功せる者もあるに至れり。此の點に於ては『書生氣質』の如き、實に明治文學の新紀元を造れる重要なる創作なり。

然り、此の作は紀元開拓の作なり。然れども、こは其の歷史的價値の卓逸を表示する外、別の意義を含めるに非ず。文學としての絕對價値を判せんには、おのづから別途の考察を要す。蓋し此の作の文學的價値は其の歷史的價値の如く優越なるに非ず。之を寫實小說の立脚地より見るも、第一、勸懲小說を排して起りしに係はらず、其の主旨諷刺誨誡に在るを以て、其の目的に添はんとするの極、動もすれば露骨なる諷刺に陷り、人情世態の大寫眞鏡たるべき者をして、强ひて諷誨の隘型に陷らしめんとす。勿論こは『小說神髓』に「模寫主意の小說には求めずして誹刺諷誡の法備はり、暗に人を敎化する力あり」と說ける旨を實にせる者ならんも、開卷第一に「其れとは言はず語らずして讀む人々に悟らしむる覆車の誡因果の關係云々」と叙べしが如く、本文中作者自ら此の主旨を說ける箇所屢見えたり。其の筆致も亦描寫に少くして說明に多く、世態の模寫よりも寧ろ其の解說に近からんとす。第二、人物を主として心理描寫に筆を着けたりと言ふも、其は極めて低き程度に於て然るのみ。各人の性格の悉く模糊たる類型に終

れるは、所謂氣質物の常態として暫く之を措くとも、全體の結構到底事件の變化に重きを置くを免れず。而も其の變化や、概ね偶然の機會に出で、人物の性格より來る必然の結果ならず。奇禍奇遇等、舊時代傳奇の面影を存すること多く、特に大團圓に近づくや、急轉直下、奇機續發、偶然は偶然を生みてめでたし〳〵となる所、宛然歌舞伎の型なり。第三、新舊思想の衝突を描いて切ならず、內面的生活に存する深刻なる衝突を看過して、唯魯文一流の外面的衝突にのみ着目せるの觀あり。第四、其の文體に於ても未だ新時代の寫實小說に相應する迄に發達せず、全體の體裁人情本等に比して著しき進步なく、特に地の雅文は掛詞文字鏈り等をもて飾れる馬琴流の七五調を用ひたり。其の他通篇諧謔に富みて輕妙を極むと雖、多くは地口駄洒落の類にして所詮一九魯文の餘唾に過ぎず。之を要するに『書生氣質』は全然新組織に成れる新時代の作物に非ず。其の立脚地は新舊作風旋轉の中心に立ちて、一代の潮流を喚起せる所に在りて存す。蓋し最も嚴格なる意義に於て所謂過渡期の產物たり。

春の屋は續いて『妹と背鏡』『內地雜居未來の夢』を著作し、心ある青年之に倣ふ者尠からず。尾崎紅葉等の結社硯友社は漸く社員を增し、頻りに創作の練習を力めたりき。此の時に方りて二葉亭主人長谷川四迷は、文壇未曾有の一新作を公にせり。『浮雲』卽ち是なり。

二十年『浮雲』第一編出版せられ、翌年第二編續刊せられ、共に春の屋主人、二葉亭四迷合著と署す。されど實は二葉亭一人の作にして春の屋の加筆を得しのみ。第三編は後れて二十二年秋。小說雜誌『都の花』に連載せられたり。總べて十九回の章齣に分る。叔父に寄寓して某省に判任の出仕を勤むる內海文三、學才ありて世才足らず、冗官減員の際討らず免職となりしかば、叔父園田の後妻お政忽ち下司根性を現はし、曩に一人娘お勢の婿がねにと愛育せしに打て代り、彼を侮辱し薄遇して止まず。お勢は天性浮誇の質、學校に新敎育を受け、內海の新議論に感服したりければ、常に母に逆つて內海を庇ふ。內海見て以て己に意ありとなしゝかば、お政の薄遇にも堪へ、同僚にして戀敵なる本田の侮辱にも忍びぬ。然るにお勢は

始め本田の無學陋劣なるを忌みしが、本來の華美を好める、內海日頃の不活潑に飽きて本田の快活に親しむ。內海此の眞相を知らず、遂に之に怨を述べしに、お勢は內海を戀ひしにもあらず、本田を戀ひしにもあらざれば、事の意外に驚き、且怒り且猛り、本田を疏んじ內海をも憎みぬ。內海尙も斷念し難く、種々の妄想を畫きつゝ、悶々の中尙去るに忍びずといふ筋を以て始終す。

『浮雲』の出づるや、世人は其の內容形式共に、全然從來の作物と選を異にするに驚き、『書生氣質』に比して隔世の感あるを認めたり。實に『浮雲』は『書生氣質』を過渡の橋梁として新時代に入りし小說界最初の創作なりき。思ふに『小說神髓』の所說を最も忠實に體認して、純粹なる新時代模寫小說の範となりしは『書生氣質』に非ずして『浮雲』なり。固より前者は模寫小說の粉本なりしも、前項に見えたる幾多の事實は之をして該種小說の範たらしめず、創新の名譽は擧げて後者に歸せり。

其の規模は狹小、其の舞臺は園田一家の外に出でず、其の時日は三旬の中に止り、其の主要人物は四人に過ぎず。『浮雲』の結構の單純なること從來の小說總べてを超越す。然れども一篇の波瀾は總べて人物の性情に出で、脈絡貫通、悉く一事實を中心として之に集まり、所謂其の綱を提ぐれば衆目悉く張るの趣ありて、全體一箇の有機的結合を形成す。描寫の當體は、園田勢子の性格、及び之によりて惹き起されたる內海が心裡の動搖葛藤にして、作者は其の間に幾多の波瀾を構へて二人が心理解剖を試みたるなり。お政、本田の性格は特に言ふに足らず、內海亦有り古りたる人物なれども、其の勢子の眞相を解する能はずして、半信半疑痛心煩悶を極むる所、お政に輕侮せられ本田に愚弄せられて憤懣心頭を衝けども、尙愛着の弱點、其の決心を腐らすあたり、心理描寫の筆委曲を極め、頗る人情の幾微に觸る。勢子に至りては、作者が明治小說壇に提出せし一新性格にして、單純放恣輕燥開豁、事となく物となく、新奇より新奇に移り行き、嘗て操守あることなし。而も其の新事物に移るや、深く思ひ熟く見てするに非ず、唯感染の至す所のみ。幼うして學問好なる隣家の少女に感染れ、入塾しては洋風

好の塾頭に感染れ、退塾以後は朴茂なる内海に感染れ、其の沈欝に陷るや去つて快活なる本田に感染れぬ。要するに未だ覺醒せざる初心浮誇の一少女にして、一切の行爲、及び行爲の因て來る心理の變化は總べて此の性格より起る。而して此の性格こそ内海をして悗惱せしめ憤懣せしめ、從て『浮雲』一篇を成立せしめし所以の者なれ。

此の作は、唯上述の點のみを以てするも破天荒の小説といふべし。加ふるに性格描寫の技倆の卓逸なる、お勢の人物が殆ど彫り浮められたらんが如く躍動するあり。且其は全然當代人物の代表と見るべき一新性格にして、十八九年の比、皮相文明の光に眩惑して自覺なく省察なく、徨々として新奇を追へる一代民衆の陋態は遺憾なく此の性格に現はれたり。思ふに『浮雲』亦一個諷刺の作、お勢をして新思想を代表せしめ、お政をして舊思想を代表せしめ、以て新舊文明の衝突を描かんと擬す。此の事や『西洋膝栗毛』以來の各小説家の爲す所に異ならずと雖、之を觀察し之を批評する事、斯くの如く深刻に且嚴格なるは未だ之あらず。げに二十年頃の明治文明の描寫としての此の篇の價値は、之をして啻に歴史上に重きをなさしむるのみならず、文學其の物の中に於ても輕視すべからざる地位を占めしむ。唯、其の批判諷誡の筆、往々露骨に陷り、或は心理描寫の筆、往々、事實を按排して讀者の想像推理を俟つことをせず、直ちに作者の談理説明を以て之に充てたるを恨とす。例へば第五回お勢とお政との爭を叙して是が新舊主義の衝突なりと明かに辭りたるが如き、或は結末二回餘りに書き急ぎ、描寫に勉めずして解説に終れるが如き、頗る興味を殺ぐ。第十六回お勢の性格解剖の條の如きも亦描かずして説くの弊に陷る。

とにかく此の小説の内容は純然たる新時代の産物なり。然れどもかくの如きは獨り内容のみに非ず。其の形式卽ち文體に於ても亦空前の試驗をなせり。『書生氣質』の文體は尙舊型を出づる能はざりしも、『浮雲』に至りては全く創始に出で、所謂言文一途を以て地と詞との全體を行り、且詞は常に行を改めて地と分ち、決して言者の名を冒頭に細注して地の文の中に書下す事なし。此の文體や實に寫實小説として此の作を成功せしめし要素な・

り。蓋し、文體は思想を盛る容器なれば、或る思想には必ず最も之に適する文體あらざるべからず。委曲周匝なる新時代の思想を以て、觀察微細に入る寫實の筆を振はんとするに方り、讀本人情本の文體は到底之に添ふを得ず、乃ち顧みて一新文體を需めざるべからず。言文一途の新體は卽ち此の目的に對する最初の試みなりしなり。而して二葉亭が此の體を用ふるや、時に冗漫の嫌なきに非ずと雖、概して洒脫にして才氣に富む。特に自然を叙するや、在來の文學に見るべからざる清新の趣味に滿ち、第三回の月光を寫す所、第七回上野の秋色を描くあたり、楚々として人に迫る者あり。

内容形式兩方面に於ける『浮雲』の得失は略之を盡しぬ。蓋し作者は固と露國文學に通せる人、其の露國小說を讀破せる眼を以て『小說神髓』の所說を玩味し、其の神を持し來りて之を獨得の彩筆に寫し、以て空前の作を成せり。而も其の態度は、春の屋が尙戲作者の風を離れざりしに反し、純然たる文學者の態度を以てしたりき。

〔逍遙、四迷の二作家出でて明治小說壇の風潮は一變し、所謂寫實の風地を動かして起り、新小說の曙光爰に輝き出でぬ。〕事は十八年より二十二年の間に在り。

三、飜譯

泰西小說の飜譯は旣に『花柳春話』に其の基を開き、爾來歷史小說政治小說の飜譯少からざりきと雖、前章に述べしが如く、此等譯者が之に對する態度は、多くは政論家の共れにして純然たる文學者の共れに非ず。其の種類に至りても、傳奇的の一面に限られて、寫實的方面の者未だ起らざりき。且譯筆の技倆の如き、頗る疑ふべき者ありき。逍遙は此の方面に於ても亦卒先して手を下し、純然たる文學者の態度を以てリツトン卿の『リエンジ』を譯し『開卷悲憤慨世士傳』と題して十八年に世に示しぬ。然れども此の譯の內容は依然として歷史的なれば、之を新飜譯の曙光とせんより、寧ろ在來の飜譯が一轉して斯壇の過渡期に入らんとする際の所產とせん方適當なるを覺ゆ。其の內容に寫實的傾向を取り、其の形式に比較的忠實洗鍊の譯筆を揮ひ、專門文學者の態度を以て之に對したる新飜譯小說の曙光は、

實に思軒居士森田文藏の作なるべし。而して此の氣運を鼓吹するに與りて最も力ありしは、即ち雜誌『國民の友』なりき。

二十年春『國民の友』は德富蘇峰によりて發刊せられぬ。政治、文學、宗教、社會の各方面に亙りて清新放膽の評論を試み、當時世に存せし總べての他の評論雜誌を壓倒して、獨り文壇に雄視せしが、特に純文學の趨勢を觀察して新氣運を鼓吹し、或は文學欄を設け、或は春夏二期に文學附錄を添へて當代作家の粹を集め、以て泰西文學の輸入、新文學の興隆に努力し、爾來『柵草紙』の出でし頃まで、隱然たる文學の保護者たりき。

思軒『國民の友』に據り、主として飜譯の方面を擔當し、載せし所の長短篇少からず。佛國ジュール・ベルヌ作『鐵世界』(二十年)及び『大東號航海日記』(二十一年、)同ユーゴー作『瞽使者』(二十年)『探偵ユーベル』(二十二年)、及び『哀史』、其の他チョッケ、ヂッケンス等の小品、總て彼れの譯筆は間、『報知新聞』に掲げたるもあれど、概ね、『國民の友』に出でたり。就中『探偵ユーベル』と『瞽使者』とは最も世に喧傳し、居士の名爲に文壇に高く、遂にはユーゴーの紹介者、佛文學の輸入者として之を仰ぐに至りぬ。是に於てユーゴーの名一時斯界に重く、從來の飜譯界を獨占せる觀ありしリットンを壓して立ちぬ。此の間の消息は不思議にも創作界に於ける政治小說と寫實小說との消長と其の步趨を同じうす。勿論ユーゴーは所謂寫實派の詩人に非ずと雖、其の主觀的、感情的、個人的傾向を有する點を以て、彼の客觀的、理性的、社交的傾向を有する歷史的小說に對照する時は、恰も前二者の關係に似たる者あり。とにかく佛文學輸入の端緒は思軒によりて開かれ、曩に民權自由論の當時、中江兆民の筆によりて僅かに其の片鱗を見得たる佛文學は續々紹介せらるゝの運に向へり。然れども、思軒の飜譯は總べて英譯よりせる重譯なれば、絕世の才筆と雖、佛文學の眞趣を傳ふること恐らくは難し。況んやユーゴー其の人は、內容の高尙ならんことを求むると同時に、形式即ち文章の完全無缺ならんことを力めたるに於てをや。且思軒の文體は漢文調洋文直譯體にして、當時に於てこそ、能く泰西文章の情趣を傳へたりと持て囃されて、模倣者も尠からず生じたれ、有り體に

言へば、文字粗大に過ぎて精緻の情想を寫すこと難く、剩へ多少の誤譯あるを否む能はざりき。されば思軒は決して成功したる飜譯家に非ざると同時に、崇拜者の言ふ如き佛文學の輸入者に非ず。要するに尙純然たる新文學者たるに缺くる所あり。其の出所の政治小說家と等しく三田塾に養成せられたる新聞記者たるに於ても、其の文體の當時新聞文學者の共通文體たる漢文調を擺脫せざる點に於ても、正しく其の半身を過渡時代に置けりと言ふべく、恰も創作壇に於ける『書生氣質』の地位を占めたり。若し夫れ『浮雲』の地位を占むべき者に至りては、再び二葉亭四迷を推さざるべからず。

廿一年四迷は『あひびき』を『國民の友』に、『めぐりあひ』を『都の花』に出しぬ。共に露國小說家ツルゲネーフの短篇なり。譯筆『浮雲』に似て縱橫委曲、情趣盡さざれば止まず。而もよく歐文の調を存して直譯體の詰屈を脫し、一脈淸新の思想聲調を寄與して、文壇に貢獻する所甚大なり。譯者は本邦に於ける最初の露國文學紹介者たるのみならず、飜譯界全般に對して一新紀元を開ける者にして、爾來斯壇の氣運初めて動き、各國詩文の譯筆徐々として起りぬ。

斯くの如きは新體詩、小說及び飜譯の三方面に於ける曙光の概觀なり。事は十五年より二十一年に亙り、就中十八年以下三年間の現象に屬し、二十年以後盛運の基を開けり。然れども其の他の文學、卽ち戲曲、俳句、和歌等は其の新曙光を現はすこと稍遲かりき。戲曲に在りては、依田學海、福地櫻痴の作を過渡として、二十八年道遙が『桐一葉』を公にするに及びて初めて現はれ、俳句に在りては、所謂過渡の產物なる者無く、二十五年正岡子規出づるに及びて突如新光を漲らせ、和歌に在りては、落合直文等の作を過渡として二十八九年の比始めて現はれぬ。されば之等に關する詳細の叙述は暫く之を後章に讓り、先づ、曙光を放ちし三種の文學に就き、其の發展の跡を尋ねんとす。

第二節　寫實小說の興起

文學思潮革新の運動ありて以來、各種の新文學の陸續興起しける中に、獨り群を拔いて進歩の先登に立ちしは、卽ち『書生氣質』『浮雲』の後を承けたる寫實小說なりとす。而して此の氣運に乘じ、或は之に鞭つて一世を指導せしは、卽ち尾崎紅葉、山田美妙齋、及び彼等を唱首とせる硯友社の人々なりき。抑も本邦寫實小說の由來を尋ぬるに、中古王朝の物語は槪ね之に近く、降つて江戸時代元祿の頃、浮世草子の形を以て現れ、爾來八文字屋本となり、洒落本となり、滑稽本となり、人情本となり、以て明治文壇に移りしが、嚴格なる意義に於て寫實小說と言ふべきは、僅に西鶴等の作數篇に過ぎず。其れも馬琴一派の讀本に壓倒せられ、元祿時代一朝の榮華を止めて世は長へに傳奇小說の壇場なりき。此の時に方り、春の屋、二葉亭、續いて紅葉美妙出でて遙に西鶴を紹ぎ、近く泰西小說の趣味を取り、以て新文壇に寫實の一派を開き、歷史小說全盛の勢を挫いて西鶴を九泉の下に喚起せり。

十八年春『小說神髓』世に出づるに先つ事正に二ヶ月、大學豫備門在學の尾崎紅葉、石橋思案、山田美妙齋、丸岡九華等、好文の士相集まり、文會を結びて硯友社と名づけ、各自創作の小說、戲文、紀行、俳諧、都々逸、端唄等を集めて『我樂多文庫』と題し、相批評して以て文學の研鑽に勉めぬ。爾來同志の社員漸く加はり、十九年末には川上眉山人、巖谷漣山人、江見水蔭、岡田虛心亭、廣津柳浪、喜多川麻溪等十數人を增すに至れり。斯る間に新文學勃興の機運漸く熟し、春の屋、二葉亭相繼いで立ち、『國民の友』又發刊せられ、寫實小說の持囃さるゝ世となりしかば、二十一年遂に『我樂多文庫』を印刷發賣する事となし、五月第一號を出せり。之を新文壇に於ける文學專門雜誌發刊の嚆矢となす。當時此の雜誌の體裁組織等は柳北の『花月新誌』と相距ること遠からず、載する所、上述の種類の外、新體詩、狂歌、川柳等、所有純文學及び文界批評にして、或は言文一致を以てし、或は雅俗折衷を以てし、總べて「戀と涙とを研究」するを以て究竟となす。而も尙微々たる小冊子に過ぎず、作物未だ文壇を動かすに足らざりしも、社中の同人悉く大學豫備門、獨逸協會學校其の他に於て新教育

を受けたる年少氣鋭の士なれば、概して英語若くは獨語を解し、十九世紀學術の一般を覗ひ、泰西純文學の面影を知り、從つて其の述作にはおのづから新趣味現はれ、文體、修辭、句讀、記號を始め、全體の調子悉く明治の新彩を帶びたり。加ふるにこの新衣の下には江戸文學の深き愛好と巧なる模倣とより出でたる固有風尙の醇なる有り。されば彼等が寫實の筆を振ひ、戀と涙とを以て靑春の思想に投ずるや、此等の作、大に靑年の間に行はれて、隱然『浮雲』以後の小說壇を支配し、當時の批評界は硯友社を目するに文界の梁山泊を以てするに至りき。げに硯友社は曾に當時に於て梁山泊たりしのみならず、爾來長へに斯壇の一大勢力にして、社中の作家盛名を後日に馳せし者少からず、二十八九年に至る迄の我が文學界は、殆ど其の壇場たるの觀ありき。而して社中殊に秀でて之が牛耳を執り、當時直ちに文名を爲しゝ者は、卽ち美妙齋主人と紅葉山人となりき。

美妙齋

『我樂多文庫』の發行に後るゝこと三月、山田美妙齋、其の短篇小說集『夏木立』を出して盛名を文壇に馳せぬ。美妙齋は東京の人、紅葉思案等と硯友社を結び『我樂多文庫』に從事せしが、尙雜誌『以良都女』(二十年刊)を出し、讀賣新聞にも寄稿して短篇の創作を公にしたりしより、舊稿新作取り交せて總べて六篇、合して『夏木立』とは題せるなり。就中『籠の俘囚』は、沙翁の詩篇『レイプ・オブ・ハウクレシアス』に倣ひて、古羅馬のアッピアスとバージニアとの物語を綴りし者、『花の茨、茨の花』は骨を獨逸に取りたる牧歌風の小品、『柿山伏』はモリエール風の諷刺的滑稽物、『贋金剛石』と『仇を恩』とは、一は滑稽、他は可憐の御伽物、最後の『武藏野』は、材を南北朝時代に取り、武藏野に於ける新田一族の悲劇に織り成されたる一條の哀話を寫しゝ者なり。總べて歐文趣味の橫溢せる斬新の言文一致體を以て瑰麗の文字を行り、本邦文壇未だ見ざる抒情詩的色彩を小說の作品に現はし、讀む者をして泰西ロマンチック詩人の作品に接する思あらしむ。思ふに『夏木立』の諸篇は、寫實的潮流の裡に成り出でしこと勿論なりと雖、『浮雲』の寫實とは大に趣を異にする者あり。『夏木立』には明

治思想の一面を代表すべき園田お勢の如き性格を見ること能はず、新舊思想の衝突を表はすべきお勢母子の爭論を見ること能はず、はた心裡の煩悶を解剖すべき內海文三の如き人物をも見ること能はず。唯『柿山伏』の一篇に、三十未滿の青年にて古今東西の文學を丸呑にせる一政治小說家を主人公となし、當時の政治小說の趣向と文章とを罵倒して完膚なからしめ、新聞記者輩の作品を諷刺して痛切を極むる有るのみにて、他は皆幽韻縹渺たる抒情詩の境に入り、『籠の俘囚』のバージニア、『花の茨』の羊飼兒、『武藏野』の秩父民部及び忍藻の如きは宛然詩中の人物なり。之を當代寫實小說を代表せる者としては、固より『浮雲』の匹儔に非ざるなり。

遮莫『夏木立』の本領は內容に在らずして寧ろ形式に在り。其の文壇讃美の中心となりしは、思想の卓絕なるに由るに非ず、文章の淸新瑰麗、遠く俗流を拔けるに基づく。言文一致は『浮雲』以來珍しからずと雖、文脈の上に著しゝ歐文の組織を交へ、情景を叙ぶるに聯想想像の頗る廣濶なるを以てし、又各種の譬喩を縱橫に使用する等に至りては遙に『浮雲』を凌ぐ。特に擬人法の如きは、啻に非情物の擬人のみにあらず、進んで抽象概念の擬人に及び、宛然洋文を讀むの感あらしむ。例へば、「夜は根城を明け渡した。竹籔に伏勢を張つて居た村雀は新に軍議を開き始め、閨の隙間から斫り込んで來る曉の光は次第に四方の暗を追ひのけ、遠山の角には茜の幕がわたり、遠近の溪間からは朝雲の狼烟が立昇る」（武藏野下）といふが如き、到底在來の文學に見るべからざる脩辭上の技巧となす。作者が文章に留意せるは『柿山伏』に政治小說者流の文章を諷刺せるにも著るく、特に『夏木立』のはし書を見るに、其の苦心亦鮮少に非ざるを知る。彼の述作は常に斯かる研究の結果として現はれ、絕えず新なる意匠を世に提出す。彼が其の儕輩を超えて一朝盛名を得し所以亦此の點に存す。

『夏木立』發售の頃、美妙齋硯友社を去りて獨り文壇に立ち、二十一年『都の花』に「花車」を連載し、翌年『國民の友』春期附錄に「胡蝶」を出し、『ぬれ衣』を單行し、續いて『都の花』に「此の子」及び「いちご姬」を揭げ、獨得の文章を以て益〻文名を博しぬ。就中「胡蝶」は當年の傑作、紅葉

の『色懺悔』と共に一時文壇を動かしゝ者にて、材を平家の末路に取り、戀と忠義との衝突に煩悶懊惱せる一少女胡蝶が悲劇的運命を描き出でし可憐の小說にして、其の趣「武藏野」に似て脚色一層複雜に、主人公の人物一層明瞭に、其の運命一層劇的なり。文章は得意の言文一致體、斬新豐麗の致を儘にす。

斯ゝて言文一致の文體は文壇の歡迎する所となり、矢崎嵯峨の舍を始として之に倣ふ者少からず。彼等の努力によりて種々彫琢せられ、粗笨なる口語も漸く醇化せられんとす。而して之を導て能く圓熟渾成の域に至らしめし者は、卽二十七年以後に於ける紅葉及び其の他の小說家の力なり。

紅葉

明治文學史上の巨像尾崎紅葉は東京の人、十八年大學豫備門在學中、十九歲の靑年を以て硯友社の牛耳を執り、「江島土產貝屛風」と題する一九流の戲文を處女作として、「風流京人形」「紅子戲語」等數篇の滑稽物を『我樂多文庫』に揭げぬ。然れども之等は尙同志間の硏究試驗の作に屬し、未だ以て紅葉の文名を爲すに足る者を含まざりき。斯かる間に美妙齋『夏木立』を出して才名江湖に布きしかば、紅葉之に劣らざらんとし、奮つて斬新の作物に從事し、遂に二十二年美妙齋の『胡蝶』と時を同じうして『色懺悔』の一篇を得、乃ち之を世に問へり。

『二人比丘尼色懺悔』は此の年創刊の小說叢書『新著百種』の第一編として出づ。時代を說かず場所を定めざる一種の時代物なり。木枯吹きすさぶ山里の伏庵に、惜しや花の盛を墨染の衣に包みたる主客二人の比丘尼、身にしむ夜寒を紙張に避けて語らふ中、緣なればにや迭みに懷かしくて身の上を明かす。主の尼、賴む夫の討死に惜からぬ命を長らへて亡き跡を弔ふ由を語れば、客の尼は振分髮の許嫁、悲しや戰國の習とて敵味方にうち分れ、鎬を削りて戰ふ中、懷しき其の人は傷きて我が方に病を養ひしに、義理と恩愛と忠義とに身を責められて、白刃一閃あへなくなりにし由を物語る。茲に二人の戀人の同一人なる事現はれて互に驚く時、板戸洩る日影白くほの〴〵と明くる一夜。是れ其の梗概なり。而して之を寫すに、雅俗折衷に

もあらず、言文一致にもあらぬ、記號に富める一種異樣の文體を以てし、之を彩るに彫琢の致を極めたる絢爛の文辭を以てし、製本の意匠を凝して世に出でぬ。世評は嘖々たり、褒貶自ら在りと雖、概して許すに當年の傑作を以てし、或は『胡蝶』にも勝れりと稱せられき。

之を作者の側より見れば、此の篇は美妙齋に對する紅葉の競技なり。彼が從來の戯筆を棄てて所謂「涙を主眼とする」時代物を作りしは、或は人目を一新せんとするに在りしか。其の文體に多大の苦心をなして變風を創始せるは、亦是れ美妙が言文一致に對する抗爭と見るべし。脚色に奇巧を求め、人物の類型を脱せざるは、從來の傳奇小說に於ける通病にして、此の作亦之に洩れず。勿論讀本合卷に比ぶれば、人物事件多少自然の風姿を帶びたれども、性格歸趣茫として尋ぬべきなく、絶えて時代精神の面影を認めず。然れども其の文章に至つては、洵に當代の逸品、『色懺悔』をして重きを斯壇に爲さしめし所以の主たり。修辭的技巧は暫く措き、文體の側より見れば、先づ地の文と對話と其の體を異にすること『書生氣質』等の如く、對話は淨瑠璃體に俗話調を混じたる者、地の文は雅俗折衷の變體にして、簡潔なる文句を種々の句讀、記號を以て繫ぎ、各語句は概ね思想の上に印象を殘すべき中心概念を提出するのみにて、他は一切之を讀者の想像に任せ、省略縱横、屢〻論理文法を破り、其の手法頗る斬新なり。此の變體は、言文一致、雅俗折衷共に好ましからざるよりして、苦心慘憺の末に得たる者にて、思ふに紅葉が私淑愛讀したりし西鶴也有が俳文に學びて、其の簡潔と餘情とを取りしなるべし。

西鶴復活の氣運は此の時より漸く熟しぬ。此の事や固と紅葉一派の作者が私淑する所あるに出づと雖、之を文壇の趨勢に見る時は、おのづから二三の因緣を數へらる。第一は當時古文學復興の大潮流が西鶴に及べる事、第二、寫實的傾向の傳播と共に、寫實家としての西鶴の價値の認められし事、第三、言文一致體の弊に倦みて理想に近き文體を西鶴に得し事卽ち是なり。先づ古文學復興の潮流は前章既に其の大勢を述べし如く、和歌和文より院本小說の類に及び、稗史出版社は夙く馬琴物を飜刻し、叢書閣は次

いで近松の戯曲を飜刻したりしが、是に至りて元祿時代文學の一明星たる西鶴に向つて尙古の眼を放ちしなりき。次に逍遙以來寫實を以て旗幟とせる作家が寫實家の典型を我が固有文學に求むるや、春水の妖冶三馬の奇警、可ならざるに非ずと雖、西鶴の着眼警拔觀察鋭利、巧に世態人情の一部を描き、社會裏面の消息を寫す筆力遙に之を超えたるを以て、衆目の觀る所期せずして之に就きぬ。第三の文體に關する西鶴の特長は、彼れの崇拜を一世に瀰漫せしめし最大の動力なり。是より先き、美妙齋の言文一致體の出でしや、天下其の新彩を謳歌せりと雖、其れには委曲精緻の得ありて動もすれば冗漫繁瑣の失あり。揮灑自在の利ありて往々含蓄餘韻に乏しき弊あり。且語句の末、概ね同一の語尾に終るを以て、文勢おのづから單調に流れ、勁健の風を缺き、又平談俗話に近きを以て、章句おのづから雅致に乏しく、品位亦足らず。是に於て新しき人情と新しき世態とを寫すべき唯一の文體として採用せられたる言文一致體は、其の試驗の最中に於て、早く既に弊に堪へずと見做され、彫琢醇化の致を極め盡さざるに方り、既に世に見離されんとす。而も之に代るべき好文體は果して文壇に存せりや。讀本體を取らんか、其の緩漫なる七五調、懸詞文字鏈の連續を如何せん。滑稽本體を取らんか、含蓄風韻に乏しくして卑野猥雜に傾くを如何せん。獨り西鶴の筆致、平民的にして、奇警簡淨輕妙の趣を具へ、文辭卑近にして含蓄甚だ饒し。古今文學の中、若し明治の世態人情を寫すに足る文體を求むべくんば、西鶴を措いて他に在らざるなり。是に於てか西鶴を呼ぶ聲は、夙く『夏木立』に見え、續いて『色懺悔』を評せる批評家に現はれ、紅葉の好尙に著はれ、遂に幸田露伴が『國民の友』に西鶴を論せる頃（二十三年）に至りて殆ど輿衆の口に上りぬ。

此の時より紅葉は西鶴を基礎とせる新なる雅俗折衷體を編み出で、暫く逍遙したりし傳奇的世界を去りて現實的世界に歸り、『色懺悔』に試みし時代物を棄てて直ちに『浮雲』の跡を追ひぬ。爾來二十七年の頃に至る迄、『文庫』『小說群芳』『國民の友』『都の花』『讀賣新聞』『聚芳十種』及『江戸紫』等、新聞雜誌叢書に出せる幾多の小說は、作意文體一として西鶴の影響を

受けざるはなし。二十三年『國民の友』に掲げし「拈華微笑」『新作十二景』に出でし「此のぬし」、『讀賣』に出でし「夏痩」「新色懺悔」、二十四年『都の花』に出でし「二人女房」、『讀賣』に出でし「伽羅枕」「おぼろ舟」「むき玉子」、二十五年『讀賣』に出でし「三人妻」、二十七年同新聞に出でし「心の闇」等は、該期間に於ける佳作と稱せらる。

『二人女房』と『伽羅枕』とは、西鶴の影響の下に立てる紅葉の作を代表する好箇の標本なり。前者は官省の裨吏を勤むる士族の娘二人が緣談より結婚懷姙に至るまでの運命を叙し、姉は美、妹は醜、姉は伊達、妹は地味、性情異なるに從ひて好惡を異にし、姉は官吏に歸ぎ、豪快一時の夢にして家道零落、姑小姑の嫉惡に苦勞絶間なく、妹は幼馴染の職工に歸ぎて平和幸福に世を送る狀態を描き、二者最後の運命に大差を來せる始末を明にせり。後者は傾城佐太夫とて一代に鳴りし廓女、今は六十歳の嫗となりて、昔十四より二十までの泥水生活を懺悔せる體にものせし者。「芳き名を傳へずば、あられぬ者にてもあれ、世に知られん」と思ひなりし意氣あり張ある佐太夫が、「仔細あつて黄金を好まず、好男子を好まず、一癖者の名は廓中に隱もなし。情意氣張づくにしては隨分此の命を吝まず、見事立派と言はるゝ程の事をしてのけ、死後末代まで吉原の佐太夫はと、黄金一式の遊女を男の怨言の中に引かれだき身の本願」と揚言しての傾城生活、名殘なく寫し出されたり。二者共に西鶴の筆意に學びたりといへども、『二人女房』は其の作風體裁に幾多の新味あり、地の文と對話とを分ち、作中人物の心理解剖を試み、其の精緻ならんことを求むる極、往々談理の筆を執つて說明の域に入ることなどもあれど、總べて所謂模寫小說の系統を引きたり。且西鶴の作は其の歸趣茫として尋ぬべからざるに反し、此の作はおのづから一篇の歸趣有り。姉妹の運命に寄せたる作者の人生觀、狹小なりと雖存す。其の西鶴に則りし所は、見來れば偏に文章に集まり、文致酷似するの極、往々利弊共に學び、輕妙達筆の利あると共に、文情冷靜、一味同情の溫きを缺くが如きところなきにあらず。

此の傾向は『拈華微笑』『此主』より『新色懺悔』に至りて益烈しく、遂

には文致のみならず、內容卽ち思想まで、西鶴の得失併せ學ぶに至れり。蓋し西鶴は熱烈なる同情を以て自然と人生との種々相を描寫せる作家に非ず。彼は諷刺家なり。社會の一部に向つて鋭利なる觀察眼を放ち、恰も利害相關せざる傍觀者の如く、冷々として之を評し去る。而も其の社會の一部分なる者は、不幸にして當時の煩惱界、特に色慾境なりき。斯くの如きは卽ち西鶴の特徵にして、紅葉は其の得失共に之を學べりしなり。而して其の學ぶや、素と文章筆法に始まりしも、形式と內容とは峻別すべき者ならず、形おのづから心を誘ひて、終に其の思想をも模倣するに至れり。『伽羅枕』の如きは卽ち想形共に純然たる西鶴の模倣にして、此の傾向の絕頂に達せし者なりき。

『伽羅枕』は新思潮に觸れたる明治の人生の眞相を描きしにもあらず。明治文明の具體的批評にもあらず。又作者胸中の或觀念の社會現象に映發せる者にも非ず。はた性格の特殊なる者ありて、之より生み出されたる事件の變化を示せるにも非ず。唯彼の人生の一面なる花柳の煩惱界に向つて鋭利精緻なる觀察眼を放ち、傾城社會の豪傑、意氣と張りとの權化、粹道の神としての佐太夫を寫し出しゝのみ。而も其は明治以前の事、元祿以來醞釀し來りし大都の花街生活及び花街氣質、卽ち從來戲作者の寫し誇りし所を描きしのみ。畢竟是西鶴の餘唾、戲作者の境地にして、見來れば宛然たる紅葉の『好色一代女』なり。されば明治の寫實小說としての價値は寧ろ『二人女房』の下に在るべし。然れども文章は實に模倣の妙を極め、長篇恰も無縫の天衣の如く、一部として弛廢を見ず。其の輕妙簡勁の運筆、特に毎回結末の急轉直下、輕〻切り上ぐるあたり、優に西鶴を凌き、瀟洒妖麗を以て當代に鳴りぬ。

西鶴模倣は『伽羅枕』に至りて極まりぬ。『朧舟』『むき玉子』(『二人女』の中)以後の作に至りて文章思想漸く一家を爲さんとし、西鶴的なる形と想との中、おのづから紅葉の特色を帶び來れり。『朧舟』と『むき玉子』とは、昔氣質の二親に育てられ、氣立優しくよろづ內わに、而も情厚くて容類なき佳人が、貧に迫られて親思ひの一念、何も世ぞと諦めて奉公に出づる悲

み、終に前者のお藤は妾となり、後者のお喜代は繪師の模型（モデル）女となりし始末を寫し、『三人妻』は所謂明治紳商の一型とも見るべき葛城餘五郎に仕ふる三人の嬖妾を描ける長篇にして、お才は固と藝者の中の藝者と世間に知られ、意地他くまでも强き江戸張りの才藏が、葛城の巧計に脆くも根引せられし園ひ者、紅梅は「初々しき中に無量の情ありて媚を作らぬに媚ある」地女のお角が、河竹の勤に等しき奉公先より望叶ひて葛城に引取られし嬖ひ者、お艶は美色を烙鐵に傷けもせで、二十四まで春を護りて指もさゝせざりし一淑女が、ゆくりなく色魔葛城の目に觸れて遂に其の漁色の犧牲となりにし寵妾、三人三樣の趣、其の性情の異なるによりて種々の波瀾を起す運命の變遷を叙し、『心の闇』は人を戀すれども遂げらるべくもあらぬ身の唯一其の人の常乙女にて我に情をかけんことをあだに願へる座頭佐之市のあはれを寫せる者なるが、個々の人物に注目を價すべき新性格なく、描寫の對象情痴の世界を出でずと雖、尙『三人妻』の紅梅の如く、性情寫實の筆の渾成に近きあり。脚色に於ても、『むき玉子』の如き清新ぱして自然なるあり。特に筆致の輕妙に附帶せる西鶴の弊、卽ち筆に同情を缺き、涙を描くも哀を寫すも、共に冷酷なる批評的筆法に陷るの缺點を擺脫し、曩には、佐太夫が涙を揮ひ盡して今は世を茶にせる氣鋒は、寒く冷くして當るべからざりしも、お藤お喜代佐の市等に至りては、涙あり情あり、讀み來りて一種の溫みを覺ゆ。紅葉の作は斯くの如くにして西鶴を脫し、漸く自家の特色を發揮し初めぬ。

以上は紅葉が此の期に於ける作の大體なり。之を通觀するに、着筆概ね平淡の境に於てし、脚色に斬新なる者なく、人物に奇趣ある者なく、極めて平凡に極めて自然なる人情の妙用を寫せり。而して其の主人公を求むるや概ね女性に於てし、其の社會を描くや多く局部に偏す。舞臺は東京に於ける中流以下の社會を出でず。而も筆に上る所は殆ど人間の煩惱界に限らる。其の一生の艶筆を傾倒せし所は、卽ち此の小範圍に於ける女性の種々相を描き、性情の自然なる發展を寫すに在り。思ふに紅葉は社會よりは寧ろ人間を觀察し、人間よりも寧ろ女性を觀察し、女子の性格よりも寧ろ其

の心理變化を觀察せり。故に當時に於ける紅葉の女性は、一として特異の性格を有するなく、一として時代の眞相を表すべき性格を備ふるなし。此の點よりすれば、紅葉は寫實家と稱せんには狹隘に過ぎたり。唯其の心理解剖を試るや、彩筆縱横、情緒自然の發展を窮め盡さずんば止まず。特に女性の弱點を描いて精緻を極めたり。紅葉は乃ち斯の弱點をお銀姉妹に描き、お藤お喜代に描き、お才紅梅お艶に描きぬ。就中後三者に就ての此の點の描寫は、委曲にして痛切を極め、張と意地とに名を賣つて、思ふ一人に情を立て拔く白金才藏も、此の弱點の爲に脆くも葛城の巧計に陷り、大家に仕へて歷々に立交り、容色百人に勝れたるに思ひ上りし鹽煎餅屋の娘紅梅が、遂に身を葛城に任するに至りしは亦此の弱點の致す所、況して彼の浮きたる世上の緣組とやらを嫌うて運命を琴の一技に托したりしお艶が、葛城の口車に乘せられておぞくも容姿を大都會に輝さん心驕りを起し、次で夫婦といふ事人の身にせずば濟まぬ契と思ひなし、更に色魔葛城に對する終天の恨を呑んで之に從ふに至りしが如きは、此の弱點の最剴切に表されたる者といふべし。然り、作者の筆は此の方面に於て成功の域に達せり。然れども、此の弱點や個性の發現にあらで婦人通有の情緒なり。人情自然の步趨を追うて女性心理の解剖をなさん者の必ず到達すべき結論なり。故に此等の作は、女性を描けりといふよりも寧ろ女性の情感を寫せりといふべく、情感の種々相を寫せりといふよりも寧ろ其の通有性を描き出でたりといふべし。

斯くの如きは、當時文壇の梁山泊たる硯友社を率ゐたりし紅葉の概觀なり。顧みて該社の諸豪を歷觀するに、概ね社中一流の艶筆を以て少からぬ述作をなせりと雖、未だ大名を世に馳するに至らず、未だ自家の特色を構成するに至らず。然れども其の二三子既に紅葉と雁行せんとする者なきに非ず。巖谷漣山人、石橋思案外史、廣津柳浪子、川上眉山人の如き卽ち是なり。

漣山人は東京の人、又大江小波と號し、瀟洒輕妙の筆、善く可憐なる年少男女を描き、概ね純潔清秀の趣を帶ぶ。二十二年『新著百種』に出でし

「妹脊貝」を始として『片糸』『友禪染』等、當時の作皆此の類なり。山人の特色爰に在るを以て、適する所は小說よりも寧ろ少年文學に在り。されば二十四年『こがね丸』を作りし以來、自家の本領に向つて歩を進め、小說の筆を措いて御伽文學の方面に染め、或は少年雜誌に執筆し、或は古來の昔噺を編輯し、或は內外東西の御伽噺を紹介し、輕妙流麗の筆を以て此の方面に貢獻する所少からず。遂に少年文學の壇上に獨尊の名を擅にしたりき。然れども山人の製作は、少年文學として決して上乘の者に非ず。蓋し少年文學は其の情趣清高にして溫き同情の溢るゝ者無かるべからず。然るに山人の作、輕妙餘りありて浮薄に陷り、瀟洒餘りありて眞面目を缺き、所謂江戶式恬淡の氣象橫溢して熱烈なる情味に乏し。且作者が好んで用ふる滑稽は、往々駄洒落落語の域に入ることあり。故によく少年をして笑はしむるを得べきも、よく樂ましめ、よく淸からしめ、よく高からしむるに至りては、未だ完璧を望むべからず。唯少年文學の先達として明治文壇の異彩たるに至つては、特筆して傳ふべきなり。

思案外史は同く東京の人、前者と等しく言文一致體を以て小說の作をなし、又滑稽文を善くして屢駄洒落を交へたる批評文諷刺文をものしき。『新著百種』に收めたる「乙女心」『小說群芳』に收めたる「京鹿子」等は創作中の佳篇と稱せらる。惜い哉秀才遂に伸びず。一時『我樂多文庫』に盛名を博せしのみにて彼れの時代は去り、爾後唯筆路の輕妙を讃美せらるゝのみなりき。

柳浪子も亦東京の人、其の小說を公にせしは、蓋し二十一年自己の經營にかゝる雜誌『大和錦』に揭げたりし「二おもて」に始まる。次いで『新著百種』に「殘菊」をものし、爾來『いとし子』『糸の亂れ』『五枚繪姿』等數篇を出しゝが、未だ大なる成功を見ざりき。されど『殘菊』の如き、人情の極めて深刻なる一面を描き、煩悶あり苦鬪ある境遇に於ける情緒の活動を寫して、美妙紅葉以外に觀察著筆の新なるを出し、以て後來大に發達すべき作者の特色を萠し初めたり。『五枚繪姿』亦此の系統を引いて、生ひ先の有望なるを示せり。

眉山人は亦東京の人、二十三年大學を退きて專ら文筆に從事し、夙に筆力の雅健なるを以て著はれ、『我樂多文庫』以來、也有許六の俳文に學びて、瀟洒艶麗の中一種の澁味ある文章をものし、以て紅葉と併稱せられたり。然れども二十二三年の頃、『黃菊白菊』『雪折竹』『墨染櫻』等より二十八年に至るまでの小說には、未だ名作として傳ふべきなし。茲に唯其の筆力を稱へて發達を後日に見ん。

以上四家の外、尙江見水蔭。九岡九華、岡田虛心亭、渡邊乙羽、中村花瘦等あり。『我樂多文庫』及び其の改題『文庫』を始め、『新著百種』『都の花』『文學世界』『小說百家選』等に多少の創作を出せり。

露伴

紅葉が硯友社を率ゐ、雅俗折衷體を採りて寫實の大旆を飜すや、美妙齋は『胡蝶』以來の作亦往時の觀無く、紅葉獨り群作家の上に立ちて小說界を指導したりき。此の時に方りて、同じく西鶴の文體を學びし一作家の起りて紅葉と馳聘せるあり。幸田露伴卽ち是なり。

明治文壇の將星として文學史上に卓立する露伴は亦東京の人、二十二年の初、其の處女作「露團々」を『都の花』に連載し、續いて「一刹那」を『文庫』に揭げ、夙く一種の異彩を帶べる筆力を以て世人の注意を喚起したりしが、同年秋「風流佛」を『新著百種』に出すや、超邁の想と絢爛の筆と二つながら時流を拔き、盛名一時に世に布きぬ。爾來『奇男兒』『對髑髏』(緣外緣とも題す)『眞美人』を經て、二十三年『國民の友』夏期附錄に「一口劍」を出し、二十四年『辻淨瑠璃』を公にし、同じ年新聞『國會』に「五重塔」を出すに及び、彩光益〻發揮して當代並ぶ者なき小說壇の飾りとなれり。

露伴の文章は言ふまでもなく西鶴に出でたり。彼が西鶴に私淑せるは、夙く『國民の友』に同情ある筆法を以て西鶴を紹介せるにても知らるべく、其の初期の作に在りては、作意文體共に元祿の面影を傳へたる者少からず。特に『一刹那』の如き、一刹那の中、心機一轉するを主題として人情の或一面を寫さんと試みたる小篇三を合せ、全然西鶴の作風を紹げり。『奇男兒』

『辻淨瑠璃』亦よく元祿の神を傳へ、『風流佛』に至りては更に靈動の妙を極め、「臨終正念違はず、安らかなる大往生、南無阿彌陀佛は嬌喉に粹の果を送り三重、鳥部野一片の煙となつて御法の風に舞扇、極樂に歌舞の女菩薩一員增したる事疑なしと、樣子知りたる和尙樣隨喜の涙を落されし、」(第三回)と結ぶあたり、消化し盡せりといふべし。此の點に於ては露伴の筆は紅葉の『新色懺悔』『伽羅枕』と等しなみに元祿の模倣と稱するを得べし。然れども彼も亦紅葉の如く、永く模倣の域に止まらず、出でて一家を成し、自己の特色を發揮して雄を一代に稱へたり。而も其の文や紅葉と相距る雲泥、紅葉の妖艶に對して剛健、優麗に對して絢爛、兩々相照して限なき興趣を具ふ。而して其の筆力に至りては、情景並び寫して微に入り幽を闡き、警句屢〻口を衝て出づる所、美妙紅葉も之に及ばず。『風流佛』第九回、一向專念佛を刻む條、特に佛體を飾りし種々の花を削り去る所、續いては第十回、幻の中に戀人と語り、在りし昔を思ひ出でて無我夢中の境に入るあたり、若くは『五重塔』三十二回、夜叉王一齊に暴れ出す狀態を描いて凄壯毛髮を竪たしむる條の如き、洵に渾成の美術たるを得べし。

斯くの如く露伴は其の文章に於て既に西鶴を離れたり。然らば其の內容は如何。紅葉は前述の如く形式と共に內容をも模倣し、後出でて一家をなし、時に至りても、尙所謂「女物語」の連續に元祿作家の面影を存したりしが、露伴の構想は全然其の趣を異にし、世態人情の種々相を觀察して之を活寫せし西鶴紅葉の寫實の筆を學ばずして、常に作者の意志より出でたる一定の觀念を以て貫き、又情海に浮沈する所謂浮世女の生活を描ける西鶴紅葉の艶筆に學ばずして、好んで意氣あり情あり、總ての障害を燒き盡すべき熱烈の一念を懷ける男子を描けり。『風流佛』『一口劍』『五重塔』の如きは此の點に於ける好箇の代表者にして、技藝に對する無上の信仰と無限の熱愛とは全篇を支配する精髓たり。就中『五重塔』一篇最も世に喧傳せらる。江都の棟梁に川越源太とて江戸子の生粹名うての番匠あり。谷中感應寺の塔の建立を受負ひしが、爰に大工十兵衞、技倆は人に劣るべしと嘲えねど、才氣足らねば、馬鹿よのつそりよと蔑まれ、名玉空しく源太の役

に服して光を潛むる者あり。之を聞きて執着の念止まず。濟まぬと知りながら意を決して恩ある親方の向に廻り、棟梁を己に引受けんと計りぬ。源太は江戸子腹の清くさばけて讓歩又讓歩、遂に一切を擧げて十兵衞に委し尙も從來の計畫調査の書類を贈りて助成せんと申出でぬ。然るに自己の技倆を確信せる一刻者、斷乎として其の親切を拒み、怒れる源太が意趣返しの宣言にも恐ぢず、源太の子分の暗擊に創を負ひしも屈せず、のつそりと嘲る數多の工人を督勵して遂に「金剛力士が魔軍を睨んで十六丈の姿を現じ、坤軸動かず足踏して巖上に立つたる如き」五重塔を造り出でぬ。落成の式近くなつて何事ぞや。「夜半の鐘の音、曇つて平日に似つかず耳きたなく」、滿天夜叉の一時に荒れ出し、暴風暴雨、天地晦冥、塔は搖ぎ、軋り、又撓む。十兵衞は立てり。やをれ彼の塔、倒るゝは愚か、釘一本拔け板一枚動く事あらば生きて居ようかと、生雲塔の頂に上りて勾欄を握み血眼開きて暗黑を睥睨せる樣凄じく、手には六分鑿今にも之を含みて十六丈を眞倒に飛び下りなんとす。而も風雨は止みぬ。生雲五層の巨塔は昂然として屹立せり。江戸中の堂塔破れざるは無かりしを目にせる萬衆は、驚異の眼を以て十兵衞の技倆と熱中とを讃歎し、川越の源太も遂に屈しぬ。是れ『五重塔』の梗概なり。一篇女物語を含まず又戀愛譚を帶びず。其の中心思想を構成する者は、技術家が其の技術に對する無限の愛着と牢固たる自信なり。其の精神的製作の自然界及び人間界に對する至大の權威なり。實に此の思想は、啻に『五重塔』の中心を形作るのみならず、廣く露伴の小說に入りて隨所其の中心となれり。試みに筆を復して『五重塔』以前の作を檢せん。

露伴の小說に現はれたる思想を知らんとする者は、先づ小說中の人物を見るべし。『辻淨瑠璃』の西村道也が多才多藝多情多欲の諸質を具へ、所謂粹道の神たる觀あるは、是れ恰も紅葉の『伽羅枕』に於けるが如く、元祿模倣の勢力が、文章のみならず、人物の性格にまで及びし者にして、むしろ露伴の眞面目に非ずと雖、尙心機靈活の妖物として、一片の意氣地沒すべからざる者あるは、卽ち西鶴以外、此の作者の一特質なるべし。げに此